

剣俠受難「上」(国枝史郎)

この捕り縄は

ポンと右手がふところへはいり、同時に左手がヒヨイとあがった。とたんに袖口から一条の捕り縄、スルスルと宙へ流れ出た。それがギリギリと巻きつこうとした時、虚無僧は尺八をさつと振った。パチツと物音を立てたのは、捕り縄がはねられたに相違ない。がその時はその捕り縄、ちゃアんとふところへ手ぐられていた。

東海道の真つ昼間、時は六月孟夏の頃、あんまり熱いので人通りがない。ただ一人の虚無僧と、道中師めいた小男とが、相前後して行くばかりだ。

と同じ事が行われた。つと駆け抜けた道中師、ポンと右手をふところへ入れ、ヒヨイと左の手を上げた。その袖口から一条の捕り縄、スルスルと出てギリギリ、虚無僧へ巻きつこうとするのであるが、やっぱりいけない。さつと払う尺八につれて、グンニヤリとなる。がその時には捕り縄は、袖口からふところへ手ぐられていた。

眼にも止まらぬ早業である。たとえ旅人が通っても、感づくことは出来なかつたろう。だがいったいどうしたのだろう？ 捕り物にしては緩慢に過ぎ、遊戯にしてはいたずらに過ぎる。

なんの変わったこともなく、虚無僧は悠然と歩いて行く。

道中師にも変化はない。

鈴ヶ森まで来た時である。ふいに道中師が横へそれた。後から続いて虚無僧が行く。耕地があつて野があつて、こんもりした森が立っていた。手拭いを出してバタバタバタ、切り株を払った道中師。

「おかけなすって、一休み」

虚無僧腰かけて天蓋を取った。と、すばらしい美青年。富士額で、細い眉、おんもりとした高い鼻、ちよつと酷薄ではあるまいか？ 思い切つて薄い大型の口、だが何より特色的なのは、一見黒くよく見ればみどり、キラキラ光るひとみである。手に余るほどの大量の髪、これは文字通り漆黒で、それを無造作にたばねている。肌の白さなめらかさ、青味を帯びないのはどうしたのだろう？

「熱いねえ、ずくずくだよ」

いいながらグイと胸をあけた。あつ！ 張り切った二個の乳房、胸もとっぱいにもり上がっている。まさしく変装した女である。

「忠公のばかめ、呆れもしない。なんと思つての悪ふざけだい」

「へい」道中師小びんをかいだ。「手練の捕り縄、いかがのものかと、お目にかけたんでございますよ」

「あれで手練かい、叩き落とされたくせに」

「中条流の捕り縄も、あねごにかかつちゃあ文なしだ」

「これは驚いた。中条流だつて？ そんな流名があるのかい」

「私のつけた流名で」

「よりどころでもあるのかい」

「そりゃアありますとも、大ありで。それ私の名は忠三でしよう」

「妾^{わがし}ア忠公かと思っていた」

「ひどうげすな。そいつアひでえ、いえ忠三でございます」

「忠的にしよう、その方がいい」

「だんだん悪くなる、驚いたなあ。いえ私の名は忠三で、しかも肩書きは早引^{はやひき}でげす」

「早引の忠三、なるほどね、だが大してドスも利かない。ところでどうなんだい、中条流は？」

「忠三をもじって中条流。もったいがつくじゃアありませんか」

イスラエルのお町、ふき出してしまった。

「いわれを聞けば有難い……とこういったら嬉しかろうが、どうもね、お前の中条流、こればかりは戴けないよ。……それはそうとオイ忠公、準備は一切いいんだろうね」

「うん、そいつだ」と早引の忠三、にわかにピンと張り切った。

……………

「うん、そいつだ」と早引の忠三、にわかにピンと張り切ったが、すぐにトンと声を落とし、「一切準備が出来たればこそ、長崎くんたりまで飛脚を出し、江戸入りをおすすめたんですよ。そうして今日あたりはおいでだな、こう思ったのでこの忠三、お迎えに出たのでございますよ」

「ああそうかい、そいつア有難う。永い間の念願が、それじやいよいよ届くんだね」

「へい、さようでございますとも」

「うれしいねえ。お礼をいうよ。ああ本当に千べんでもね。だが……」とお町は不安そうに、

「競争相手もあるそうだが、そっちの方も大丈夫かしら？」

「まず大丈夫でございますよ」

「まず大丈夫とは気がかりではないか。確かに大丈夫でなければあね」

「さようで」といったが早引忠三、渋^{じゅう}面^{めん}を作ったものである。

「へい、確かに大丈夫で」

「だってお前、競争相手は、ひととおりの奴じゃあないそうだが」

「その代わり味方にも大物がいます」

「でもね、お前、そのお方は、表^{おもて}に立つてはくださないじやないか」

「かりにも三家のご一人、立てるものではございませんよ」

「そうはいってもつながる縁、お母様さえあのままなら……」

「おっとおっと、そいつアいけねえ」

忠三は急いで手を振った。「死^し児^この^よ齡^ねを数えるってやつだ。

そんな事をいつて何になります」

「さあ何にもなるまいがね」お町はちょっと憂鬱になり、「時々妾は考えるのさ。お母様さえなみの人で、今日までご存命なすったら、こんなみじめを見るんじゃない、それこそ本当にお姫様で、外へ出るにも供揃い、駕籠に乗って行かれるのに……」

「そいつもなみの駕籠じゃあねえ。葵^{あおい}ご紋^{もん}のついてる駕籠だ。いやそうなたら私なんか、土下座をしたっておツつかねえ。……それはそうとねえあね、その後あつしはこの江戸で、

随分仲間を作りましたよ。命令一下働く奴が、さあどのくらいありましようか。そこへあねごが乗り込むんだ、そうするとすぐに女大将さ、葵のご紋なんか蹴飛ばしてしまえた。だがあねご、そいつらを使って、大ダンビラを振りまわすなあ、策としては拙の拙だ。まず真つ先にとる法は持つてうまれたその美貌、そいつでやろうじゃあございせんか。——といつて直接じゃあいけません、間接間接こいつに限る以夷制夷というやつだ。競争相手の随一人、好色漢の島原城之介、あねごに以前から参っているはず、こいつをおたらしなさいまし」

「ああなるほど、島原をね。あいつも江戸にいるのかい」

「えらい勢力でございますよ」

「あいつをたらしめてさてそれから？」

「以夷制夷でございますよ」

「ふふん天草とかみ合わせるんだね」

「こいつ成功疑いない」

「それじゃあ腕を振るおうか」

「どうぞね、一つ、すごいところを」

「ではそろそろ出かけよう」

「まず天蓋、おかぶりなせえまし」

「あいよ」

といつて引つかぶる。と、もう虚無僧姿である。街道へ出て江戸へ入る。雀色の夕まぐれ、さっと人波にさらわれてしまった。

慶安三年六月二日、天草の乱しずまってより、わずかに十二年を経たばかり、將軍家光存命ながら、狂乱の噂府内にも

れ、物情騒然人心恟々、天下乱を思ふ折柄であつた。

大捕り物

いずれ悪漢に相違あるまい、イスラエルお町と早引忠三。二人が江戸へ入り込んでから、十数日が経過した。とその時事件が起こった。

ここに一人の武士がある。

知行五百石でお旗本、代々の主人がつましかつたからか、旗本仲間での大金持ち、富豪といつてもよいほどで、本所錦糸堀に屋敷があり、無役ではあるが貴まれている。ちよつとおかしいが姓は袴、名は源兵衛といつて五十五歳、その人次男で広太郎、二十三でまだ部屋住み、養子にやるか別家させるか、金に不自由がない上に、父源兵衛の秘蔵息子、まああゆつくりというところから、気まま勝手に遊んでいる。しかし広太郎豚児ではない。剣道にかけては柳生流の免許、大力ではないが業には達し、据え物斬りでは名人である。筋肉しまり、背高く、江戸っ児らしい浅黒い顔、性質はむしろ憂鬱であるが、悪寒を与えるほどではない。興に乗ずると大いにはしゃぐ、時によっては毒舌も振るう、それでいて人に愛される。「座談に毒舌は付き物だよ。あの人は聖人でございます、いやあの仁は君子でござる、なかなかもって神様で……こんなことばかりいつてみる、茶がまずくなつて飲めやしねえ。あああいつはオッチョコチョイだ、そうともあいつアとんまだよ、ろくな出世はしねえだろう、ナーニあいつは獄門ものだ、女仇討ちにでも出そうなつらさ……などとやらか

すと話しがはずみ、茶だつてうまく飲めようってものさ」こいつが広太郎の座談哲学、毒舌の弁でもある。ひいでた眉、高い鼻、思い切つて切れ長の涼しい眼、私は冷酷じゃアありませんよ、こういったげにやや厚手の、それでいて醜くない立派な口、金持ちの証拠に耳たぶが厚く、詩人的気稟があるからであろう、額が広く光がある。湯水のように金を使い、悪友を集めて散財するが、それでいてちつとも馬鹿にされない。だが広太郎にいわせると、浮世が面白くないそうだ。「ヤクザだね、この世界は、隅から隅までむだばかりだ」「なぜだい？」ときくと渋面を作り、「なぜだか知らないがそうなんだよ」これが、広太郎の返辞である。

その広太郎この頃中、一層調子が狂つて来た。笑うかと思うとしよげ込んでしまい、しゃべるかと思うとだまり込む。

すなわち快活と憂鬱とが、はげしく交叉するのである。恋だ恋だ恋をしているのだ。さて広太郎ある夜のこと、悪友どもと例によつて、一杯飲んで夜をふかし、別れて家へ帰る途次、さしかかったのが隅田の堤。

「桜時ばかりの墨堤でもあるまい。微醺をなぶる夜の風、夏の墨堤をさまよつたつて、コラーという奴もあるめえじゃないか」

で、堤をあるいて行つたが、その時事件が起こつたのである。「御用！ 御用！」というとり方の声、河を隔てて聞こえて来た。

「これは」思つて眼をやると、対岸安宅町の方角で、飛び廻っている御用提灯！ しかも五つ六つではない、二十三十乱れている。

「や、こいつは大捕り物だ！」たたずんでながめたものである。

「あッ」という悲鳴、「待てー！」という声、「神妙にしろ！」とわめく声！ あわいははるかに離れていたが、深夜だけにあたりさびしく、ちまたの雑音の聞こえないためか、粒だつて声が聞こえてくる。

「ドブーン！」水音の響いたのは、とり方かそれともとられる方か、ともかく誰か河の中へ、飛び込んだに相違ない。

と、ボーツと火が立った。放火したのだ！ 家が燃える。その光にボツと照らされて、一人こつちへ泳いで来る。

鏘然太刀音

火事の光にボツと照らされて、一人こつちへ泳いでくる。「網をのがれた曲者だな」こう思つたが広太郎、自分がとり方というではなし、取り抑えようとはしなかつた。だが充分の好奇心、桜の木蔭へ身を隠し、じつと様子をうかがつた。泳ぎついたその曲者、岸へ上がるとまず袂、キューツと水をしばらくらしい。それから裾の水をしぼり、スルスルと土手へ上がつて来た。月はあつたが桜の葉越し、光が充分に届かない。ただ人一倍たけが高く、肩に燦と白髪が波打っているのが見て取れた。老人かな？ それにしては、ヌツと伸びた腰つきが、そうではないと裏切っている。チラリと火事の方を見返つたが、何やら口の中でつぶやいた。と、ふところへ手を入れた。取り出したのは小長い物、そいつを頭上へズイと上げ、そろそろ一方へ開くのを見れば、間違いない巻軸だ。

「有難え、ぬれてはいない」よっぽどうれしかったに相違ない。こうハッキリつぶやいたものだ。

木蔭で見ていた広太郎、ムラムラ好奇心がつのって来た。そっと近寄り富樫もどき、相手の肩越しにのぞきこんだ。チエツという舌打ちの音、人の気配を感じたらしい。ヒラリ振り返ったが抜き打ちだ。その早さ、その鋭さ、横なぐりに腰のつがい、ダツと払われたがきまれば、まさしく広太郎胴輪切り。

酔ってはいたが心は正気、ましてあらかじめ曲者と、用心していた広太郎、飛びしさと桜を楯、幹に全身を隠しながら、刀の鯉口ブツツリと切り、相手の様子をうかがった。

片手青眼につけたまま、左手で巻軸を巻くらしい。サラサラという紙の音。と、左手がふところへはいった。ははあ巻軸を納めたな。「これ」とはじめて声をかけた。

「見たであろう？　む、どうだ？」右へ右へとジリジリ廻る。

「不運な奴だ、いかしては置かぬ」

不思議な声音、鬼気がある。かれてはいるが力がある。あざ笑うのか、威嚇するのか、どっちとも取れる声音である。

とまれ一旦耳にしたら、容易に忘れられない声である。

立ち木を中に広太郎、左へ左へと逃げながら、心でつぶやいたものである。「すごいなあ、恐ろしい奴だ。人を斬ったな、幾人もなく。血煙りの中を通って来た奴だ……。勝ち目はない、おれに勝ち目は」

「これ若造」と例の声、「感心だな、抜きおらぬな。逃げるつもりか、それもよからう。ふ、ふ、ふ、逃げられぬえ」

右へ右へと廻りこむ。

「殺されてしまえ、きつと殺す。……なぜのぞいた、馬鹿な奴だ、見えしなればよかったのだ。見られた以上は助けられない。コレ前へ出ろ、切りこんで来い。……来ないか、行くぞ。ソレ、ソレ、ソレ」

構えをつけながらしゃべりまくる。場数を踏んだ証拠である。一つの立ち木から他の立ち木、移ろうとして広太郎、一瞬間全身を現わした時、肩に白髪の泡を立て、「どうだ！」と一躍切りこんで来た。と、鏘然たる太刀の音、はじめて広太郎抜き合わせ、危く鏑際で受けたらしい。

さっと左右へ飛び違う。

「えらいの、若造」

「何を！　だまれ」ブルツと一つ武者振るい、タラタラと流れるあぶら汗、額から両眼へ入ろうとする。

「御用！　御用！」と遠のく声。とり物も終りに近づいたらしい。火事は盛んだ。紅色の火光、ここらあたりまでポツと明るい。相青眼の二本のつるぎ、その中でキラキラと輝いている。

恋人お京

二合目の太刀、また鏘然、音を立てて火花が散り、鏑ぜり合いになったとたん、「しまった」という声が突っ走った。同時に一つの黒い影、もろにうしろへ飛びしさがヒューツと何か投げつけた。と、もうその時にはその人影、河とは反対、耕地の方へ投げられた石のように走っていた。眼にもとまらぬ早業で、しかも綽々たる余裕がなければ、到底出来な

い芸当である。

と、初めて、「待て！」という声が広太郎の口からほとばしった。時のハズミで出た声で、真に呼び止めた声ではない。その証拠には追おうともしない。追わないばかりかグタグタと、大地へ坐ってあぐらをかいた。ホーッともらす太息と、ガチャンと刀を捨てて、ピッタリ両手を突いたものである。

「天下は广大。えらい奴がいるなあ」まずもらしたものである。「柳生の極意甲割り、死に物狂いで下ろした太刀が、幸いきまって敵の刀をつばのきわから、折つたればこそ、運よく命は助かったものの、そうでなかったらやられたところだ。……うむ」といつて考え込んだ。「どうもわからない、何者だろう？」またそこで考えこんだ。「剣道名譽の武士にしては、少しく態度が無頼に過ぎる。……市井の無頼漢にしては、余りに腕が利いている。……胆の据え方、機のかみ方、とてもとても常人ではない。……そうしてあれば？　あの巻軸は？」

ただ肩越しに見たばかりで文字か絵画か何が書いてあったか、見て取ることは出来なかった。

腕のしこりをもみほぐし、落ちていた刀をさやに納め、フラフラと立った広太郎、自分の屋敷へ帰ったのは、半時ばかりの後であったが、その夜出会った強敵が、その後も永くつきまとおうとは、神ならぬ身の——ちよつと古風に——実を知る由もなかったのである。

七日ばかりは気持ちが悪い。で広太郎はこもっていた。

「もうよからう、泳ぎ出すかな」カラリと晴れたよい天気、

フラリと広太郎屋敷を出た。さて行く先はきまっている。恋人お京様の屋敷である。

ここに小松原平左衛門といって、やはり五百石のお旗本、同じく無役で、相当裕福、といって袴家には及ばない。屋敷は小石川掃除町、柳町の角に立っている。その長男を舞二郎といい、広太郎とは同年輩、昔からの親友で、その妹がお京様、しばしば遊びに行くうち、広太郎恋してしまったのである。

「舞二郎殿おいでかな」

「おおこれは袴様。ハイハイ皆様お庭の方で、お話し最中でございます」

「ははあ、どなたかご来客で」

「はい、いつもの臼井様が」若党ここでニヤリとした。

「うむ、そうか、臼井殿」にわかに関太郎いやな顔をした。それにはもっとも理由がある。広太郎の恋の競争者だからだ。

玄関からグルリと庭づたい、裏庭の方へ行つて見た。縁に腰かけた三人が、面白そうに話していた。

「これはようこそ広太郎殿」真っ先に舞二郎が声をかけた。

「おや、これは広太郎様、ようこそお出かけなさいました」こういったのはお京である。

「これはこれは袴氏、今お噂をしかけたところで、お待ち申しておりましたよ。やっぱりそんな、噂をすれば影、お見えになるだろうと存じていました」臼井金弥の挨拶には、なんとなく毒気が含まれている。

恋人の家

何となく毒気の含まれている、臼井金弥の挨拶を聞くと、広太郎額、へしわを寄せた。

臼井金弥は旗本の長男、父は臼井小六郎といい、二百石の安祥旗本。家柄はよいが家計はよくない。袴家に比べると問題にもならず、小松原家に比較しても、まだ甚だしく見劣りがする。金弥当年二十二歳、広太郎より是一つ下、武道は未熟、学問もないが、男振りだけはばかによい。といつてりりしい男振りではなく、色なま白く眉細く、鮎のような形をしたなまめかしい眼、鼻の高いのはいうまでもなく、べにをさしたような受け口など、成長した陰間とでもいいかげである。行きずりに寛永寺の坊主などが、いやらしい眼をして見送りながら、「惜しいものでござるな、野郎頭が」「前髪を立て振り袖を着せたら、寺を開いても愚僧は通う」などと囁くと金弥の方でも、それがうれしくて気取った咳をし、衣紋の襟をしごこうという、ざっとそういうさむらいである。ところがここに困ったことには、金弥とお京とはいいなすけであった。父と父とがずっと昔に、そういう約束をしてしまったので、今さらどうにもならなかった。「臼井の家がゆたかなら、また、知行でも多いなら、いいなすけの約束変更してもよいが、万事当家より劣っている。で、いいなすけの約束を破り、お京をよそへ縁づけたなら、臼井の家ではひがむだろう。『あれ見よ小松原平左衛門は、臼井の微禄に愛想を尽かし、武士にあるまじく約束を破り、娘を他家へ縁づけたわ』世間の口の端

もうるさかう」これが平左衛門の意見であった。「しかし父上、広太郎殿が、お京を懇望しておられます。この私とは昔からの親友、それに人物はあの通り、文武二道に達しております。金弥殿などとは比較にもならず、無二の良縁かと存じます。……それにお京の心持ちも……」ある時舞二郎がこういうと、平左衛門はものうそうに、「広太郎殿は立派な人物、それこそお京の婿などには、もったい至極もない方だ。お京の心も進んでいるなら、これに上こす良縁はない。が舞二郎、袴家は、あの通りの財産家。でこれは問題にならない」「武士の義理、世間への体面、これもさることではございますが、お京の心も察すれば」「お京の心？ うむなるほど、では金弥殿を嫌っているのか？」「いえ嫌ってはおりませぬが、さらに一層広太郎殿の方へ……」「無理はないな、それはそうだろう。……だがそれは勘定へは入れまい。……幸いお京はおとなしく、我を押し通すところがない。気の毒ではあるが犠牲になつてもらう」

舞二郎の意見にもお京の心にも、充分理解は持ちながら、なお平左衛門は自説を棄てない。頑固一遍での旧弊なら、説破することも出来るのであるが、そうでないだけにむずかしい。

一方金弥は広太郎という、恋の競争者が出て以来、にわかに執ねくつきまとうようになった。財産からいっても、人物からいっても、到底広太郎の敵ではない。そこで金弥は唯一の武器、よい男前とうまい弁舌、それでお京の心を引き、他方両親をせき立てて、婚礼の日取りを早めることにした。で二人の婚礼は非常な事件でもない限り、とこのうものときま

っていた。金弥の得意、広太郎の焦心、このところ火花を散らしていたが、今や顔を合わせたのである。

「ほほう拙者の噂をな、それはそれは迷惑千万、ろくな事ではござるまい。噂といえはよく聞こえるが、いい換えると人の蔭口。ところでどうも蔭口というやつ、おおかた悪口に墮するものでな、例えばその人の口癖とか、または身振りとかいうようなものを、つい誇張していいがわるもので」ムカムカしているので広太郎、思わず火ぶたを切ってしまった。

鞘あて

噂とはすなわち蔭口である。広太郎のいったこの一言、金弥の胸へはピンとこたえた。というのは実際この時まで、蛇のようにノラクラした冗弁をもつて広太郎の蔭口をいつていたからで、痛いところへさわられたのである。本来ならば赤面もの。しかるに金弥赤面しない、むしろかえって揶揄的になった。

「なるほどな。これは金言、さすがは袴広太郎氏、うまいことを仰せられる。がしかし愚考するところ、少しく矛盾してはおりませんか」

「ナニ、矛盾？ そんなはずはござらぬ」

「いつぞやの貴殿のお説によれば、座談はすべからく悪口たるべし、ということであつたはず。噂すなわち座談でござる。自然悪口がよろしいはずで」

「うむ」とこれには広太郎、行き詰まらざるを得なかったが、にわかに磊落に哄笑した。「座談の悪口にもよりけりでござ

る。若い純な娘ごなどの前で、成心あつての悪口など、男子としては慎むべきもの、何とそうではござらぬかな」ちゃんと広太郎見抜いている。

胸に五寸釘の金弥であつたが、そんな気振りはチラリとも見せず、「これはおかしい、聞き棄てにならぬ。そういういい廻しをなさる以上、何か拙者に姦策でもあつて、お京様の前で貴殿の事を、悪しざまに申していたようでござるな。いやはどうも飛んだ廻り気で。貴殿、それでは永生きはされぬ、神経ばかりいら立ててはな。ハッ、ハッ、ハッ、邪推でござるよ」——お京様はどうせこつちのものだ。婚礼も間近にせまっている。いわば恋の勝利者だ。どんなに威張つても大丈夫だ。広太郎め、もがいていやがる。金があるの、文武両道、兼備でござるのと鼻にかけても、女扱いではかなうまい。ざまあ見やがれ、いい気味だ。えぐつてやれ——いわゆる小人の根性で、金弥ネチネチと出たものである。

しかし広太郎も驚かない。「ほほうさようか。それなら結構、まことに公明正大というものの、見上げてござるよ、臼井氏」ヒョイとあっさり引っぱずしてしまった。

今度は金弥があせつて来た。「なんだ、お高くとまりやがって、見上げてござるもないものだ。これじゃあまるでおれの方が、下眼に見られてスカされたようなものだ。お京様の前だ、いけねえいけねえ。馬鹿に見える。このおれがな」

いいなずけの娘お京の眼に、馬鹿気て見えるということは、まさしく一大事に相違なかった。

「大きく出てやれ、話を大きく」で金弥はいったものである。「いや何貴殿の噂などは、ほんのチョット出たままで、実は

当今の政政治向きについて、主として話しておりましたので」
こいつを聞くと広太郎「ははん」といって眼をまるくした。
がその眼が細まった時、プツと両方の頬がふくれ前歯がチラリと現われた。軽蔑しきった苦笑である。「ははん、さようで、それは大きい。うぶな娘ごの前などでは、大きな話をした方が、たしかにえらく見えますからな。しかし一層大きいなら、日本の話より五大州の話、ないしは天文^{てんもん}地文^{ちもん}の話、地獄極楽の話などの方が、効能がありはしませんかな。ただし結局そういう話は、面白くないことも確かでござる。あえて皮肉でござらぬが、若い娘ごに取り入ろう、こういうお心でござるなら、歌舞伎物まね音曲話、そういったやわらかい話の方が効果てき面と思われますがな。第一その方が貴殿に似合う。似合わぬものはつまりニセ、いか物はいけない、いか物はいけない！」思い切つて突っぱねた。

と、ムラムラと金弥の顔へ、怒気が浮かんだものである。

堀外の声

金弥の顔色が変わったのは、広太郎にとっては痛快であった。しかしこれ以上やり込めるのは、大人気ないと思ったので、クルリと背を向けて舞二郎へ向かった。

「舞二郎殿、おいそがしいかな」

「いや、例によって平凡で」

「ちよっといつもよりお顔色が悪い、勉強が過ぎるのではあるまいかな」

「ナニ、それほど勉強しません」

「それがよろしい、おなまけなさい」
「これ以上なまけたら馬鹿になる」
「いやそれ以上勉強されては、この拙者などはお話しさえ出来ぬ」

「そういうられるとこの拙者、なんだか大変学者のように見える」

「学者でござるとも、立派な学者で」

小松原舞二郎、生来^{せいらい}の多病。それで剣道は自ら廃し、好める学問の道にむかい、林家^{りんげ}の弟子として錚々^{そうそう}たるもの。広太郎と同年で二十三歳、それでいてすでに代講をする。学者として立つことさえ出来るのである。顔色あおく、身体やせ、話す声なども弱々しい。が、すみ切った光ある眼、敏感らしいしまりのある口。頭脳^{めいせき}の明晰と相まって、その心は広く厚く、老成した君子のおもかげがある。広太郎ほどの人間でも、舞二郎には一目置き、むしろ兄事^{けいじ}しているのである。

「拙者などより広太郎殿、貴殿の方が世間が広い、面白い話はござらぬかな」

「さようさ」といった広太郎、先夜の出来事を思い出した。
「一つあります、意外のことが、世間には物騒なやつがある。

拙者ひどい目にありましたよ」

で、捕り物のあったこと、不思議な人間に斬り立てられたことを、かいつまんで物語った。

「ほほう」と舞二郎それを聞くと、驚きの目を見張ったが、「捕り物の内容ご存知かな？」

「いやいやトンと存じませんな」

「邪教徒^{せうていこ}の巢窟^{そうくつ}を襲ったのだそうで」

裏門から外へ飛び出した。

傀儡師

「ははあ邪教徒？　ではキリシタン」
「さようさようキリシタンで」
「で、結果は？　一網打尽かな？」
「主領をはじめ五、六人の者が、うまくのがれたということ
で」

「ふうむなるほど、それでわかった。隅田で出あったあのく
せ者、恐らくそいつらの一人でござろう」

「さよう、話のご様子ではな」

「どっちにしても物騒な世情だ」

「台閣諸侯も困難でござろう」

「いや全く困難らしい。叛骨を帯びた連中が随分諸方面にい
るようでござる。南海の龍、紀州大納言、このお方などは随
一人だ」

「変な浪人も沢山いますな」

「由井正雪、山鹿素行」

「外様大名にも危険なのがいいます」

「伊達、島津、加賀、毛利」

「天草、島原の残党などもな」

「それに近來頻々と、奇怪な盜賊が横行するようで」

「それに」と舞二郎はうれしそうに、「お聞き及びでもござろ
うが、婦女子をかすめる悪漢が跳梁跋扈しているようで」

この時であった、不思議な声が、塀の外から聞こえて来た。
「イスラエルの神に……にえ捧げようぞー！」

続いてジャランという音がした。

しわがれてはいるが力のある、鬼気を含んだ声である。

「あいつの声だ！　間違いない。……ご免」というと広太郎、

飛び出したところは屋敷町、いつもは人通りが少ないのに、

近所に祭礼でもあると見えて沢山人が歩いている。その人々
の頭の上、二尺あまりもグンとぬきんで、巨大な白木綿が歩
いていた。純白の髪を肩へたれ、純白の行衣を身にまとい、
一尺ばかりの一本歯の下駄、そいつをはいた修験者で、環の
ついた鉄杖をつき、数間のかなたを人波を分け、悠々と歩い
て行くのである。翻る袂、乱れる裾、なびく白木綿そつく
りだ。

「薄月夜の墨田堤、桜群葉に蔽われて、はっきり姿は見えな
かったが、間違いのない純白の髪、そっくりそのままのしゃ
がれ声。あの時の曲者に相違ないが、修験者とは意外だな。
とにかく顔を見てやろう」

その時修験者は四角を曲がった。その角を広太郎がまがっ
た時、やはり修験者は数間のあなたを、同じように人波を分
けながら、悠々として歩いていった。急ぐようにも見えないが、
非常に大股にでも歩くのだろう。容易なことでは追いつくこ
とが出来ない。柳町から餌差町、この辺は広い往来で、両側
に家々がビッシリと並び、いらかが薄白く陽に光り、地面か
らほこりが立ち、物売りの声、下駄の音、行き来の人の話し
声、文字通りの雑沓であったが、その騒音を貫いて、ジャラ
ーンと響き渡る物の音、修験者の持っている鉄杖だ。餌差町
と春日町の間、ちょうどその辺まで来た時である。編笠をか

ぶった一群の武士が、辻からムラムラと現われた。と、修験者を指さして、口早に何やらしゃべったらしい。揃って後を追った。「おかしいなあ」と広太郎、心の中で怪しみながら負けずに後を追った。白衣の修験者をクルクルと、武士の一団が取り巻いたのは広い春日町の四辻で、「何か起こるな!」と思った時、はたして意外な事件が起こった。まず修験者が立ちどまり、サーツと鉄杖を揮ったものである。とたんに二、三人バタバタと、もちろんも武士が地に倒れた。思った一瞬間、修験者の姿が消えてしまった。しかし間もなく宮坂町の方から、きわめてかすかではあったけれど、ジャラーンという音が聞こえて来た。

あッと思う間の出来事である。

広太郎はぼんやり突っ立ってしまった。

「あの早業、あの力量、あの男に相違ない。……だがいったい何者だろう?」

その時である、耳もとで、つぶやく声が聞こえて来た。

「お嬢様にご用心なさります。……あぶのうござります。……ご用心」

振り返って見ると一人の男、浅黄のずきんにうこんの袖なし、伊賀袴をはき一本差し、人形箱を胸へ掛けた、古風の傀儡師がうつ向き加減に、足のつま先を見詰めながら、すべるように右手を通して行く。ずきんの下からはみ出しているのは半白になったかみの毛で、年はそちこち五十五、六。たくましい頸、怒った肩、くくりあごの下ぶくれ、横顔ばかり見せていたが、ワングリと高い立派な鼻、食いしばったような口もとなど、一癖も二癖もあるつら魂。

「おかしいなあ、なんのことだろう? お嬢様にご用心なさります。あぶのうございます、ご用心。……おれにいったのか誰にいったのか、こいつからしてわからない。おれには一人だって妹はない、女房がないんだから娘もない」

気がついて見るとその傀儡師、宮坂町の方へ行くと思えて、春日町の辻を西へまがった。

「待てよ、こいつひょっとすると、お京様のことじゃないかしら? どっちみちひどく気にかかるなあ」真夏の白昼、修験者と傀儡師。二つのものの怪にぶつかつたように、広太郎は慄然と身ぶるいしたが、はたして大事件が持ち上がった。

人さらい

その夜起こった事件というのは、不思議といえば不思議でもあり、奇怪といえば奇怪でもあるが、平凡といえば平凡ともいえる。一口にいえば、娘のお京が、危うく人さらいにさらわれようとしたのを、袴広太郎が人さらいをとらえ、通るかかった同心達へ、突き出したというまでである。

人さらいというのはほかでもなく、「イスラエルの神へにえ捧げようぞ」こう呼ばわった修験者であった。

その夜お京は兄の部屋で、かなり遅くまで話しこみ、十二時近くになって寝についた。お京はおとなしい性質で、日本式の娘型。物事内輪へ内輪へとひそめ、出しゃばることをひどく嫌った。容貌は非常に高尚で、キツパリした富士額、細面で中高の顔、地蔵眉、澄み切った眼——といって決して冷淡ではなく、あまりに邪心がないために、一点の濁りさえ見ら

れないのである。はたして旗本の娘だろうか？　あまりに貴族的の鼻ではないか、こういいたいような鼻の形。くちびるはいちこのように小さく赤い。どこにともなく神性があり、処女という言葉の具象化が、すなわちお京だということが出来る。燃えるほど広太郎を愛していても、いいなずけの金弥を退けようもしない。

寝についても眠られず、昼間角目立って口論した、広太郎とそうして金弥とのが、心にかかってならなかった。それでも午前二時頃になると、うとうとと眠気がさして来た。と、その時間近いところから「お京！」と呼ぶ声が聞こえて来た。

「どなたか妾を呼んでいる」こう思った時また、「お京！」それはそこから来るらしい。ふすまを抜け出し雨戸を開け、裏庭をのぞくとよい月夜。と、また「お京！」と呼ぶ声がする。「はい」というと、はだしのまま、スルスルと庭へ下り立ったが、裏門の方へフラフラと行き、門を開けたのも無意識であつた。

と見ると往来には人氣なく、ああおと光が漲っている。月光の中に立っているのは、白木綿のような真っ白の人物。余りに身長が高いので、仰ぎ見なければならなかった。

「妾をお召しでいますか」

「従いておいで、イスラエルの宮へ」

「はい有難う存じます」

「選ばれた処女、恐れるには及ばぬ」

ユラユラと歩く後につき、屋敷の角をまがろうとした時、真っ黒のものが飛び出して来た。

「売僧！」

「無礼者！」

「人さらいめ！」

ジャラーンと鳴る鉄杖の音、ヒューツと風を切る木刀の音、「うん！」といううなり声。ドツと倒れた人間を踏まえ、突っ立ったのはほかでもない、傀儡師の言葉に不安を覚え、一夜警護に当たっていた、袴広太郎その人であつた。

「お出合いなされ！　お出合いなさい！」

わめいた声を聞きつけて、小松原家から家人が来た。

そこへバラバラと走って来たのが、市中見廻りの八丁堀の同心。

「おお袴氏と仰せられるか、こやつ邪教徒、しかも人さらい、捕えあぐんだ曲者でござる。ようこそお捕えくだされた。お渡しくだされ、引つ立てて参る」

「それはご苦労、お連れくだされ」

「今後もお娘にご用心」

見ればお京、気絶している。家へかつぎ込んで介抱すると、パッチリ眼を開けたが物をいわない。しかし事件がこれだけなら、さして問題でもなかったのだが、この後が非常に悪かった。

奇怪な客

というのは数日後、衣裳美々しい立派な武士が、袴広太郎を訪れて、こんなかけ合いをしたからである。

「それがし事は西国の武士、築土新吾と申すもの、突然参上

無礼の段は、特にご容赦にあずかると致し、早速ながら申し入れます。うけたまわれれば貴所様には、昨夜掃除町の方面にて、目下評判の人攫いを、からめ取られたと申すこと、しかとさようでございますかな？」

丁寧なようなところもあれば、傲慢なようなところもある、かなり不快な態度口調で、まずその武士は口をきった。

「いかにもさよう」と広太郎、負けずに不作法に返辞をする。

「それがなんとか致したかな？」

「いや、お手柄でございましたな。——ところで甚だ失礼ながら、あの人攫いは容易ならぬ手引き、なかなかもって普通の事では、取りおさえることは出来ませぬ。いかが致して貴所様には、生擒り致してございますな？」

「木刀で脳天をくらわせてござる」

「ほほう、木刀で。それは不思議。では貴所様には、あの人攫い、昨夜あの辺を襲うということを、あらかじめご承知でござりましたかな？」

「さよう」といったが広太郎、こいつ何かもくろみがあって、やって来たなと感じいた。「まずまずそういつてもよからう」「拙者もさよう存じました」築土という武士、どうしたものか、ここでキラキラと目を光らせた。

「袴氏……で、獲物は？」声を落とした忍び音だ。

「何、獲物？ なんのことでござる？」

するとその武士、ニヤニヤしたが、「駄目でござるよ、袴氏。たとえばのようにお隠しあっても、決して決して一人占めにはさせぬ」変なことをいい出した。

「一人占め、いよいよわからぬ。なんでござるな、獲物とは？」

「ふッ、ふッ、ふッ、ふッ」とどうしたものか、築土という武士、陰険に笑った。「いやさすがは袴氏。容易に底をお割りにならない。そうでござろう、それが当然。実際それだけのご用心がなければ、あのような仕事は出来せんからな。がしかし袴氏、われらも最近あの男を、つけ狙っていたのでございますぞ。横取りされてはたまらない。第一」と武士は眼を怒らせた。「本来きやつのもっていた物はわれわれ一味の所有物でござった。それをきやつめがドサクサまぎれに。……いやそれゆえあの獲物を、全部貴殿よりお返しを願ひ、一人で得分しようなどは、決して決して申しませぬ。それほどわれらも野暮天ではござらぬ。平たく申せばまず山分け、これはもうもう当然でござる。その点は充分ご安心、大丈夫でござる大丈夫でござる。なかなかもってあのような獲物は、一人で取ろうの儲けようのと、ジタバタしたところで出来ない相談、莫大なねうちでございますからな。で、打ち明けてご相談いたす、どうぞ貴殿におかれても、われわれ一味の間へはいられ、共同的行動を願いたい。これではいなやございますまい。第一その方が安全でもあり、また可能性もあらうというもの。もちろんご存じとは存じますが、貴殿の獲られた獲物だけでは、甚だ不完全でございますからな。その片割れの持ち主も、当方においてはあらかたのところ、目星をつけておりますので。この点貴殿には有利でござる。是非とも……」とひざを進めた。

「われわれ一味にご加入くだされ、その入会の印として、今日ひとまず拙者の手へ、獲物をお渡しくださるまいか」

また一大事

これには広太郎参ってしまった。なんのことだかわからない。

「獲物獲物とおっしゃるが、この拙者にはトンとわからぬ。どのようなものかな、その獲物とは？」

真面目にきき返したものである。と、武士の面上に、憎悪の情が浮かんだが、すぐに佞柔の表情に返った。

「いいかげんになされ、袴氏。とぼけるのにもほどがござる。よしまたどのようにトボけられても、食わせられるような拙者でもない。お芝居をするも善し悪しでござるよ」

「芝居もしなければトボけもしない。拙者真面目にきいてるので」

「ふふん」と武士はせせら笑った。

「あくまでもシラをきられる気かな」

「知らぬものは知りませんな」

「それで拙者を追っ払う気かな」

「当方でお招きしたのではない。ご用が済まば帰られるがよろしい」

広太郎も少し気色ばむ。

「さようか、なるほど。そう出られたか」

築土新吾、スツと立った。がまたすぐにピッタリと坐り、探るような声でつぶやいた。

「ご不満かな、山分けでは？ よろしい、それでは、四分六といったそう」

「くどい！」と広太郎、腹に据えかね、はじめて叱咤を響かせた。「何をいわれる、無礼千万！ 拙者も武士、嘘はいわぬ！ 獲物の山分けの四分六のと、町人じみた不快な掛け合い。知らぬといったらあくまでも知らぬ。すぐに帰られい！ 帰らせえ！」

「よろしい！」

と新吾、わしのように、その眼光をひらめかせたが、「後悔なさるなよ、袴氏……いやきつと後悔する……見たよなものだ、後悔されよう！ ……貴殿に関してはこの数日、われら懸命に探ってござる。秘蔵の一品盗み取り、貴殿に鼻をあかせて見せる」

「よかろう」と広太郎投げるようにいった。

「盗みなければお盗みなされ」

「ふふん、その時……」

「馬鹿め！」

「何を！」新吾の顔に一瞬間、身振るいするような兇相が、ムラムラとばかり現われた。

帰ったあとで広太郎、吹き出さざるをえなかった。

「なんだろう、あいつ、変な奴だった。鷹野ではあるまいし、獲物獲物と、獲物のことばかりいつていたが、おれは知らないよ、そんなものは」

だが間もなく驚くべきことが、かれの身の上に振りかかってきた。

二日ほどたった深夜のこと、小松原家から人が来て、お京の紛失を告げたのである。

「ううむ」と広太郎、それを聞くと、手を握らざるをえなか

った。「秘蔵の一品盗んでみせると悪武士め威嚇したが、さてはお京のことだったか」

大小ぶっこむと屋敷を出、辻駕籠に乗ると駈けさせた。

「舞二郎殿、真実かな!」

小松原家へ駈けつけるやいなや、声を筒拔かせたものである。

平左衛門と舞二郎、成長した陰間の金弥まで、声もなく奥の間に坐っていたが、

「広太郎殿、よい知恵を」

いつも沈着の平左衛門が、まずオロオロといったものである。

「お聞かせください、どういう事情?」

「こうでござる」と舞二郎、沈痛の口調で語りだした。

真の目的

「実は人攫い事件以来、お京、憂鬱になりましたな、ものさえろくろく申しません。恐ろしい災難にあった者が、時々落ち入る憂鬱性、まずそれだろうとは存じましたが、うっちゃって置いては、病気にもなろうと、努めて心を引き立てるように、いろいろ注意を加えましたが、どうも一向きき目がなない。そこで本日無理に勧め、小間使いお常に供をさせ、浅草へ遊びにやりましてござる。夕方になっても帰ってこない。どうした事かと案じていると、お常一人がひともし頃に、泣き込んできたではございませんか。どうしたときくとお嬢様が、人さらいにさらわれたとこう申すので。どこでさらわれ

た、どうして攫われた、さらった武士はどんな人相かと、拙者たたみかけてききますと、場所は浅草の河喜という料亭。

さらった武士は四十格好の、あごひげの濃い、眉の太い、立派なよそおいをしたさむらいで、なんと不思議ではございませんか、このようにいったと申しますことで、『拙者は築土新吾といい、袴氏とは年来の懇意、先ほどよりして河喜の二階で、広太郎殿と飲食中、ふとご令嬢のお通りを見かけ、広太郎殿の申すには、小松原家のご令嬢、お京様が通られる。甚だもって失礼ではあるが、お差し支えなくばお立ち寄り、お物語りいたしたい。貴殿お勧めして参るようにと。で拙者参りましてござる。お手間は取らせぬ。ほんのちよっと、お立ち寄りくださらば有難いしあわせ……』妹めも甚だ不注意千万。たしかめもせずかうかと、立ち寄ったそうでござります。さあそれっきりいつまで待っても、妹の姿が現われぬ。心配になつてはいつてきくと、そのお客様なら二挺駕籠で、ずっと以前に裏口から立ち帰ったという女中の返辞。そこでお常仰天し、泣く泣く帰って来ましたそうで……それから家内大騒動、人を出して捜索中。さよう、ただ今も捜索中でござる。……もちろん拙者の思うには、例の人攫いの一味の者の、わるだくみに相違ない。袴氏の知ったことではない。しかし一応お越しを願い、事情申し上げた上で、お知恵もあらばお借りしたいとな。……広太郎殿、どうしたものでござろう?」

これが舞二郎の話であった。

「ううむ」とうなると広太郎、腕をくんで考えたものだ。しかしこれは詭計であって、内心ではたいして驚かなかっ

た。

「おおかたこうだろうと思っていた。おれにはきやつらのやり口がわかる。築土新吾となる奴、おれが獲物を持っていくと、あくまでも信じているところから、お京様を奪い取り、それをおとりにおれを誘い、きやつらのいうところの獲物なるものを、巻き上げようとするのだろう。なるほどな。うまい手だ。おれが獲物を持ってさえいたら、早速出すに相違ない。ただいかんせん、持っていない。第一獲物の性質さえ知らない。いったい何だろう、獲物とは？ ……しかしそれとはかくとして、きやつらの目的は獲物なのだ。有難いことにはお京様ではない。で明日にもきやつらの方から、なんとかいつてくるだろう。その時かまわず乗り込んでゆき、掛け合ってお京様を取り返してこよう」

で広太郎はこういつて、小松原家へいとまを告げた。「拙者に少しく存じよりもあれば、まずまずおまかせくださいますよう。あすかあさつて、両三日中には、お京様をきつと奪い返し、おつれいたすでございましょう。心配ござらぬ。ご安心なされ。特に臼井金弥殿にはな」

そとへ出ると薄月夜、明け近い深夜で人通りがない。

だが上野まで来た時である、うしろから人の足音がした。振り返ってみると見覚えのある、例の不思議な傀儡師であった。

「四谷左門町、播磨守様の裏手、黒板塀に巴の印、……そこをお訪ねなさります」

つと横へきれて消えてしまった。

巴御殿

慶安年間の四谷左門町ときては、いわゆる悪漢の巢窟で、微禄の御家人とか香具師とか、猿廻しとか夜鷹とかないしは怪しげな浪人者とか、そんな者ばかりが住んでいた。もちろん商家もあつたけれど、真面目な商人は少数で、物価などもうんと高く、ほかの町でのまず三倍、それで売る方も平気なら、また買う方も怪しまない。かどわかし、賭博、喧嘩、刃傷、すり、泥棒というようなことが、昼夜となく行なわれ、しかも法網をくぐっている。悪漢には悪漢の道徳があり、互いに隠し合いかばい合うからだ。お尋ね者にとっては安全区域、ここへ逃げ込むと目つからない。その代わり若い女などが、うっかりここへ紛れ込むものなら、とても純潔では帰れない。

なにがし播磨守という大名屋敷が、この一郭に立っているのは、ちょっと場違いの感があるが、その屋敷の裏手にあつて巴小路という小路がある。露路があたかも巴のように、変な形に作られていてそこへいったんはいり込むと、容易なことでは出ることができない。危険な左門町のその中でも、とりわけ危険な一郭で、ここに住んでいるということだけで、悪党どもは押しがきいた。「ナーニあつしは善人で、綽名は仏名は小平。虫けら一匹殺しやあしません。もっとも住居は巴小路で」などというたいがいのは、ふるえ上がって金を出す。

その物騒な巴小路の真ん中どこに立っているのが、巴御殿

という化け物屋敷であった。御殿とはいっても巴小路での御殿。黒板塀こそかかっているが、決してたいした伽藍ではない。

だがいったいどういうところから、化け物屋敷というのだろうか？ いずれ原因を探ったら、先住のなにがしが妾を殺し、爾来血の雫がしたたるとか、金持ちの婆さんが縊り殺され、その恨みが残っていて、毎晩毎晩しゃがれ声で、「金くだせえ」とおっしゃるとか、そんなところへ落ちつくのだろう。さらに一層研究したら、超自然的原因などはなく、陽あたりが悪いとか、井戸水が悪いとか、まわりがきたないとか、家賃が高いとか、至極平凡な實際問題へ、帰納されるに相違ない。

事実そこはここ数年来、借りて住む者がないのであった。

借り手がないから家がクサる。家がクサるから陰気になる。で、世間の連中が、化け物屋敷だと吹聴する。——といった方が本当かもしれない。事実が顛倒して語られるところに、魑魅魍魎や化け物屋敷の、存在が許されるというものである。いったん存在が許されるや、神に氏子、仏に信者、そういうものができるように、取り巻きの連中が現われる。ひどい奴になると利用する。

「巴小路の化け物屋敷、そりゃあとてもすごいものだ。だがおれは驚かねえ、おれはそのそばに住んでいる。どうだえ、えらからう、金をよこせ」

すると一両出すところを、二両出そうということになる。巴小路の住人にとっては、巴御殿の存在は、とんだ金儲けの種なのであった。

金儲けの種だから大事にする。そこでセッセと宣伝する。

次第まさりに巴御殿、出世せざるをえないではないか。で、このごろでは巴御殿、幻怪神秘のとばりを纏い、蟠踞するようになってしまった。そうしてちつとも不思議でないことは、宣伝をした氏子までが、どうやらこの頃では巴御殿を、超自然的建物と思うようになった。

ところがほんの最近に至って、驚くべきことが出現した。金儲けの種で信仰のマトの、巴御殿に借り手がつき、かれらの縄張りを犯したことである。いよいよ一騒動なくてはならない。

敵地へ乗り込む

喧嘩するにもゆるするにも、あらかじめ敵の状況なるものを、知っておかなければ都合が悪い。巴小路の住人ども、巴御殿の借り主を、そこでこっそり探ってみた。天草殿と呼ばれている、一見貧弱な老武士と、築土新吾と呼ばれている、威風堂々たる中年の武士。それから煮焚きをするお婆さん、住み手はわずか三人と知れた。

「なんだ、たった三人か、二本差しなんかじゃあ驚かない。ねじ込んで行け、ねじ込んで行け」

すっかりなめて掛かったが、間もなく見当がはずれてしまった。なるほど住み手は三人ではあるが、続々と異風の間人が、出たりはいったりするからで、武士姿の者、町人風の者、無頼漢風の者、旅姿の者、しかもそれらが揃いも揃って、足の運び眼の配り、普通尋常な者ではない。

「驚いたなあ、何者だろう？ どっちみち大変な奴らしい。」

こいつアちょっと手が出せねえ」残念ではあったが巴小路の住人、指をくわえて引きさがってしまった。

さてある日の午前である。この物騒な巴御殿の前へ、姿を現わした武士があった。

「四谷左門町播磨守様の裏手、黒板塀に巴の印、うむ、この屋敷に相違ない」不思議な傀儡師に暗示を受け、お京を取り返すそのために、やって来た袴広太郎である。

「ご免」と玄関で案内を乞うた。

ぬっと姿を現わしたのは、向こう傷のある兇相の武士。

「どなたでござる。何かご用？」

「拙者は袴広太郎。築土殿に御意得たい」

「ははあ、貴殿が袴氏で。取り次ぎましよう、暫時お待ち」
気味悪く笑うと引つ込んでしまった。

「いやな奴だな、笑いおった」あたりを見廻すと庭が広く、樹木が小暗く繁っている。「場合によつては斬り合うかもしれない。立ち木の多いのは結構だ。多勢を相手に戦うには、掩護物が必要だからな」

「袴氏、いざお上がり」同じ武士が現われた。

通された部屋は薄暗く、しけるとみえて黴臭い。しばらくは誰もやって来ない。油断なくあたりを窺っていると、一つ間を置いた奥の部屋で、ボソボソ話す声がした。一つはいかにもいき苦しそうな、確かに老人の声であり、もう一つはまさしく聞き覚えのある、築土新吾の声であった。その話し声の絶えた時、前のふすまがスツと開いた。

「これはこれは袴氏。過日は参上失礼いたしました。今日はようこそ参られたな。実は本日人を遣わし、ご招待いたそうと存

じていました。なんのご用でおいでだか、それもちろん承知でござる。お京殿のこととござろうな。それにつけてまずおわび、全く失礼いたしました。お名をかたって浅草から、いわば、誘拐したので。が、それとて例の獲物、あいつが是非ともほしくてな。そこでちょっと小手細工。貴殿最もお大事なものを、いわゆる玉として引き上げましたので、悪くお思いくださるぬよう。ご心配ござらぬ、ご心配ござらぬ。お京様にはマメ息災、機嫌よく笑って遊んでおられる。さてそれで単刀直入に本題に入る、としてもちろんご来駕あられたについては、例の一件物ご持参と存ずる。いざ、お渡しくださいよう。それと引き換えにお京様、早速この場でお渡しいたす。いやここまで考えるには、ずいぶんと骨を折りました。が、結果は成功というものの、有難し獲物が手に入りますかな。貴殿もすばらしくおえらいが、これで拙者も馬鹿でないつもり。アツハツハツいつてみれば、狐と狸のばけくらべで、ただ残念には丑みつでない、昼も日午前ときた。いやまたこいつが新しくてよろしい。が、駄弁はこのくらい、計算勘定しましょう」築土新吾坐ると同時に、相手に物をいわせまいと、勝ち誇った高飛車態度。そればかりか両手を差し出して、いたかくように上向けた。早く獲物を載っける載っける！ つまりはたつているのである。

天草時行

憎い奴とは思ったが怒っては損と広太郎、わざと冷静沈着に、「一昨々日おいでの節も仰せられた獲物という言葉、とん

と拙者には合点参らぬ。まずそれから承りたいもので、かかる場合掛け引きは無用。拙者決して嘘は申さぬ。獲物の内容お教えくだされ。もしその上にて拙者の手で、調えられる品物なら、即刻喜んで調べましょう。また手に余る品物なら、これはどうもいたし方ござらぬ。おことわりをしたその上で、今日は拙者も決心して参った。一步も引かぬ、刀にかけても、きつとお京様をいただいて参る。築土新吾殿、一体全体、獲物というのはどんな物でござるな？」隙を見せては大変である。こういいながら広太郎、相手の顔を睨みつけた。と、築土新吾の眼に、ありありあざけりが浮かんだが、それが消えると怒気となった。

「黙らっしゃい！」とまず一喝、「何をいわれる、馬鹿な話だ。掛け引きしないといいながら、その口で掛け引きするではないか。何、品物を調えるとな？ それには及ばぬ、とぼけた話だ。お手前の持っている品物さえ、当方へ渡せばそれでよい。事は簡単、明瞭な話だ」ここで築土、頤をしゃくった。「な、袴氏、貴殿のことだ。危険至極のわれわれの住居へ、単身やって来られたには、それだけの用意があつたからでござろう。それポツポ、懷中にさ、それとも左右の袖にかな、例の獲物があるはずだ。出したり出したり。さあさあ早く」またもや、両手をヒョイと出し、上向けにして煽いだのは、よこせよこせという催促である。

袴広太郎、これを見ると、もういけないと決心した。「おそらく何かの誤解だろう。思い違いをしているらしい。といつてとくにもとかわれない、一層こたわるは知れている。屋敷はたいして広くはない、築土新吾と先刻の取り次ぎ、奥にいる

らしい老いばれ武士、家内はどうやら三人らしい。斬って家探ししてやろう」膝頭に置いた左の手、そつと股へ引きつけた。「斬りよい姿勢に大けさがけ。右の肩からプツリと！びっくりするなよ、据え物斬りのいき！」ムックリ立てかけた右の膝、これが動けば左手が鞆、右手が柄へ飛んでゆく。一足踏み出せば抜き打ちだ！「むっ」と気合をこめたとたん、奥から老人の声がした。「築土よ築土よ、あぶないぞよ。それ肩だ、右の肩」

飛びのく築土。広太郎は、ギョツとしてピタリと端坐した。と、正面の唐紙が、スルスルと一方へ開いたものである。現われたのは一人の老武士。やッ、その風采のあがらないことは！年は六十以上でもあろう。せいの高さは五尺にも足らず、握り拳ほどの小さい顔、色は蒼く皺だらけ、口を見ればみつくちである。袴なしの着流しに、小刀一本たばさんでいる。わずかばかりの胡麻塩の髪を、総髪にしてうなじに取り上げ、紫のひもで巻き立てている。

チョコンと坐ると丁寧に一礼、それからしゃべりだしたものである。

「ようこそおいで袴殿。愚老は浪人天草時行。以後はな、どうぞ別懇に……、それはそうと、広太郎殿、剣は柳生を学ばれたな。立派なもので、よい気合だ。愚老すっかり感心した。築土築土、大馬鹿者め！お前など十人かかろうと、広太郎殿に及びもつかぬ。威張るばかりが能ではない。以後は注意、人を見るがいい。もうお前は斬られたようなものだ。貝殻骨から胸板まで、サーツと一太刀。アッハッハッハッ、すると生命がなくなってしまう。がしかした、広太郎殿、貴

殿もまだまだちょっとお若い。気合をこめてぶった斬る、あれはな、普通のやり方で、名人となると反対だ。気合を押さえて斬ってしまえます。それはとにかく、さて広太郎殿……」時行ヒヨコヒヨコと膝を進めた。

呪縛のお京

膝を進めた天草時行、硫黄火のように青光る眼を、じっと広太郎へ注いだが、

「正直に申す、広太郎殿。愚老は貴殿の気性が好きだ。ふすまを隔てて、お聞きした五音、上相声で清らかでござった。

内心にいつわりをたくわえぬ証拠。そいつが築土にわからぬとは、ヤクザ者だな、このべら棒！ 以後は注意、よろしいかな。……そこで広太郎殿へ申し上げる。いやはや、どうもとんだ粗相、愚老をはじめわれわれ一味、貴殿を誤解しておりましたよ。というのはいわゆる獲物、それをてつきりお持ちだと、……しかし今ではハッキリわかった。お持ちでない。そうでござろう。そこで方向転換だ。こいつどうも仕方がない。ついては」と今度は一膝下がった。「なんと貴殿のお力をもつて、イスラエル教主、島原城之介、そいつの手から秘蔵の巻軸かんじくそれを取り返してはくださるまいかな？」

「イスラエル教主、島原城之介？ 秘蔵の巻軸と仰せられるは？」広太郎ゴックリつばを呑んだ。なんともいえない奇態な妖気、それが天草という老武士から、陰々とせまって来るからである。

「うむそいつもご存知ない？ これは当然、そうでござろう。」

お話し致す。城之介とはな、貴殿が捕えて同心へ渡した、あの白衣の修験者でござる。そうしてそやつが持つてるので、その巻軸というものをな」

「が、すでに修験者は、同心の手から奉行所へ」

「なるほど渡っているかもしれない。しかしそこには裏があります。地獄の沙汰も金次第、いやな例だが引かねばならぬ。

貴殿お家はたいへん裕福、それ、そいつを利用して」

「いろいろ使えとおっしゃるのか？」

「いや、そこまでは指図いたさぬ。潔白のご気性、おいやであらうな……では、やむを得ぬ。お眼にかけよう、貴殿、魂のおのくものを」

天草時行スツと立ち、ふすまを開けると、縁へ出た。

「広太郎殿ついておいで」

縁の行きづまりに一つの部屋、それを通るともう一つ、そのふすまを引き開けた。昼だというのに暗いのは、四方たてこめているからで、ほんのり照つたのは雪洞ぼんぼりの灯。脇息により、手は合掌、開いたひとみで洞然と、天井を見ている若い女、間違いはない、お京である。

「逢ってお話しなさるがよい」トンと広太郎を突きやると、天草時行立ち去ってしまった。

走り寄った広太郎、お京の肩を抱いたものである。

「拙者でござる袴広太郎！ お助けに来ました。もはや大丈夫！ お京様！ お京様！ お京様！ お京様！」

だが返辞をしなかった。何かをじっと見詰めている。と、やがてあこがれるように、

「美しい殿堂、毛皮の幕屋、祭壇で小羊がたかれています……」

…広い沙漠、日が沈みました。青いお星様、十字星……地中海の波が二つにわれ、そこを通って行く幾十万！先頭に立ったモーゼ様！山へお登りになりました。雲が蔽うて雲の中から、黄金の聲が聞こえます。天使様のお声、ガブリエルの……妾は行かなければなりません！呼んでおいででございます！——イスラエルの神に、え捧げようぞ！呼んでおいででございます……」

お京、ふつと声を切り、顔を横向け広太郎を見た。「あつ、あなたは広太郎様！」

「気がつかれたかな、お京様！」

が、やっぱり駄目であつた。お京の顔が上向くと、恍惚としていたのである。

「花に蜜蜂、野には牛乳、遠い遠い小亜細亜。美しい美しい約束の国、そこへ行かなければなりません」

「気が狂つたのだ！発狂だ！」

「そうではござらぬ」と奥の部屋から、天草時行の声がした。
「呪縛でござるよ、城之介のな！」

南蛮屋

今日の浅草千束町、慶安時代には何といったか？洗足町といったらしい。今日も千束町は魔窟だが、その時代も魔窟であつた。だがひどく色っぽい魔窟で、百鬼横行するけれど、おおかた美しい白首なのであつた。そういうところも今日に似ている。小料理屋、私娼窟というようなものが、大いにはびこっていたのである。洗足町のひとところに、碁盤目小路と

いう一郭があつた。文字通り小路が碁盤目のように織られ、迷路をなしているからである。

碁盤目小路からやや離れ、今日でいえば象潟町、その辺に風変わりの小料理屋があつた。その屋敷は南蛮屋、その料理は南蛮流、すなわちスペインやオランダ流の珍な料理を食べさせるのであつた。だがもちろん上流ではなく、今日でいえば縄のれん、いや二流どこのレストランで、大衆的ということもできる。店飾りも異国的で、食卓や腰掛けも外国風である。一年ほど前からあるのであるが、最近、素晴しく美しい女が、チョイチョイ店へ出るというので、にわかにワツと人氣が立ち、白首、地まわり、ごろん棒、おつにひねったイカ物食い、そういうこれまでの馴染以外、相当立派な侍や、大店の若旦那というような者まで、昨今は出入りをするようになった。

さてある晩のことである。例によつて南蛮屋は繁昌していた。二十人近くの客があつて、その中に五人ほどの武士がいた。

店とのれんをさかいにし、狭い料理場が出来ていたが、そこに数人の料理番がいてひそひそこんなことを話していた。

「おい、見や見や今夜もいるぜ。薄気味の悪いリャンコめが。あのあから顔の四十年輩、あの侍を知ってるかい」

「知らなくてよ。お茶の水だあ」

「せいの高い侍は？」

「あれは本郷三好坂だよ」

「本郷六丁目も来ているぜ」

「ふふん、浅草七軒町もいらあ」

「おっと、最^も上の浪人もいらあ」

「全くもつてご精が出るな、とつ代え引つ代え飽きもせず、やって来るのはいいとしても、時々ひどく乱暴するので、たいてい有難い客ではないよ」

「有難くないばかりかい、迷惑至極というものだ。あいつらが来るのでいやがつて、足を遠のかせるお客様もあらあ」

「だがあいつら、自分たちの素姓が、わからないと思つてゐるのだろうか。もしそうならトンチキだな」

「江戸じゃあ一流の人物だ、まさかそうとは思つてゐない。顔の知れてゐる奴らだからな」

「親方にちよつと知らせておこう」
ひとり奥の方へはいつて行つた。

店では五人の侍が、チビチビ杯をなめながら、あたりの様子^{ようす}をネメ廻^{めぐ}していたが、

「これ、ごろん棒、お前はどこだ？」お茶の水と呼ばれた四十年輩の武士が、横手に腰掛け酒を飲んでゐた、地廻りらしいいなせの男へ、ぶつきらぼうに話しかけた。

「見れば立派な体格だが、それに年もだいぶ若い。働き盛りだ、働け働け。酒などあまり飲まぬがよい。貴様五本もたいらげたではないか。もっともおれは十本たいらげた。飲みたければ酒も飲むがよい。が、なるたけほかへ行つて飲め。南蛮屋では飲まぬがよい。ひどくボルよ、この店はな。さあさあ帰れ、いいかげんで帰れ。いづれ女房もあるだろう。帰つて女房を可愛がれ。たいしてべっぴんでもあるまいがな。貴様のつらも相当不出来だ。おそらく似合ひの夫婦だろう。：なんだ、そのつらは、睨^{にら}みおつたな」どうやら喧嘩を売る

らしい。

五人の武士

相手が悪いと思つたのか、地廻りらしいいなせの男は、にが笑いをしてだまつてゐた。かさにかかつたお茶の水という武士、

「これ、貴様、無礼千万だぞ。武士たるものに言葉をかけられ、返辞をしないとは何事だ。おしか、それともつんぼなのか」

「うるせえヤイ！ 三ピンめ！」

ここらあたりの地廻りときては、武士などには驚かない。とうとう爆発させてしまつた。「何がなんだと、いらざるお世話だ！ おれの金をおれが使うのだ。てめえの厄介になりやあしめえし、女房のことからおれのつらまで、なんの用があつて詮索するんでえ。どこで飲むうとおれの勝手だ。ボルかボラねえかそんなことはてめえ達よりおれの方が詳しい。見りゃあ相当のなりをしているが、田舎者だな。銀流しだな、ゆるろうとかかっているのだな。ヘンべら棒、その手に乗るか、コウこの辺の地廻りはな、雑種とは違ふ江戸ツ子だ。火事が好きで喧嘩が好き、女が好きで酒が好き、大名小路小路、伊勢屋稲荷に犬の糞、江戸紫から錦絵まで、嫌いなものあ一つもねえ。が、一つある。二本差しよ。こいつだきやア真^まっ平だ。『さようしからば』『貴公尊公』『雨天で降雨』『快晴で好天気』、アク抜けねえセリフを使いやがつて、どこへ行つてもモテもせず、それでふだんに威張りやあがる。結構なご

府内をゴミゴミと、きたなくするなあてめえ達だ！ どうするか見やあがれ罰あたりめ！」熱澗をサツと投げつけた。あたたかというにあたらな、ヒョイと身を開いたお茶の水という武士、相手の利き腕をつかんだが、

「元気がいいの。うん、ごろん棒」

「いてえいてえ。おおいてえ！」いなせの地廻りもがき出した。

「おそろしい力だ、おおいてえ！ こんなに強いとは知らなかった。ワーツ、いけねえ、人殺しいい！」

「これこれ何だ、野暮な声を出すな。殺しはしない、折っぺしよるだけだ。取ったこの手を逆にひねる。するとメリメリと音がする。骨のつがいが離れるのさ。と腕がブランコになる。身体髪膚父母に受く、毀傷せざるは孝のはじめ、こんな格言もむだになる、可愛い女もだくことができない。生まれもつかぬ片端者！ よいか、ごろん棒、折っぺしよるぞ」

いなせの地廻り真っ蒼になり、フーフー息ばかりついている。

「それとも拙者の忠告を入れ、今後南蛮屋へは来ないようにするか。誓えばゆるす。どうだ、どうだ」

「へえへえ承知致しやした。もう来ることじゃあございません。旦那様え、ごめんなすって」

「うんそうか、それなら許す。が、なんとかいったっけな、大名小路広小路、伊勢屋稲荷に犬の糞、江戸紫から錦絵まできらいなものは一つもねえが、二本差だけは好かねえか」

「ありゃあ無駄の形容詞で」

「お前が本来むだじゃあねえか」

「そんなあんばいでございます」

「むだな人間というものは」トンと門口から突き出した。「西の海へと、サラリー、サラリー」

「お払い！」とそとで叫んだのは、とんだ場違いの江戸ッ子である。

とうとう一匹つまみ出してしまった。バラバラと四、五人が立ったのは、そば杖を恐れて逃げたのだろう。

「いや、お茶の水面白かった」こういったのは最上家の浪人。「さあ飲んだり、大きい奴で」グイとどんぶりを突き出したのは、本郷三好坂といわれる武士。と、一人ヒョイと立った。浅草七軒町と呼ばれている武士で、部屋の片隅に腰かけている、商家の若旦那とも思われる、町人のそばへ寄って行った。

なぶられた金弥

事件が起こるかと思ったところ、何にも事件は起こらなかった。武士が寄って来ると見て取るや、「ヒヤッ」とわめいて若旦那、金も払わずに飛び出してしまった。損をしたのは南蛮屋で、がっかりしたのは七軒町という武士。

「骨のある奴は一人もないな」ギロギロあたりをネメ廻すと、七、八人バラバラと、急いでそとへ逃げ出してしまった。

だが、その時不幸にも、一人の武士がはいって来た。成長した陰間の臼井金弥で、悪い所へ来たものである。髪が乱れ、衣裳が着崩れ、ちりをかぶっているところを見ると、まるで永旅でもしたようだ。色こそあおざめているけれど、さすが縹緲を自慢するだけあって、眼に立つほどに美しい。トンと

腰かけにひじを突いた。「これ女中、お銚子」気取ることだけは忘れない。「オホン」とイヤな咳をした。しかしすぐにガツクリとなり、茫然として考え込む。

五人の侍うれしがってしまった。

「おい、三好坂、お前ゆけ」

「よろしい」というと立ち上がり、ニヤニヤ笑いながら近寄った。「あいや、お武家。お酌しましょう」

驚いた金弥、眼をあげると、三十八、九の立派な武士、向こう側に腰かけている。

「これは恐縮、いやそれには……」

「ご遠慮なさるな」とドクドクとつぐ。「南蛮屋とはおなじみかな」

「なかなかもって、今夜がはじめて。それも偶然通りかかり」
「ははあさようで、それなら結構、こんな所へは来ない方がよろしい。お見受けすればご若年。それにどうやら浮かない様子、失礼ながら失恋かな？」沈着な声でズケズケと聞く。
すると金弥は眼を見張ったが、「ほほう、どうしてご存じで？」

「アッ、やっぱり失恋か。それはそれはご同情に堪えぬ。玄人でござるか、素人でござるか？」

「許婚でござる、拙者のな。旗本の長女で名はお京。昨日誘拐されましたので、それで拙者江戸市中を、尋ね廻っておりまして、お心あたりはござらぬかな？」金弥真面目に聞いたものである。

「さようさ」といったが三好坂という武士、かえってアベコベに面くらったらしい。

「いずれべっぴんでござろうな」

「いかにもさよう。天女のように」

「いやいや拙者の思うところでは、弁天様のように美しい筈で」

「お言葉どおり、弁天様のようで」

「だが少々浮気の方でござろう」

「これは無礼！」と金弥おこった。

「貞淑無類、珍しいほどで」

「いやいや拙者の考えでは、浮気者の大莫連。それで許婚の貴殿を棄て、仇し男と逃げた筈でござる。……競争相手はなかったかな？」

「さあ」と金弥、なぶられるともしらず、「一人ありました。」

旗本の次男で」

「それそれいつが仇し男でござる。おそらく今ごろは手に手を取り……」

「いやいや断じて、そんなことはござらぬ。実はその男も拙者と同じく、探し廻っている筈で」

「などと安心していると、貴殿、煮え湯を飲まされますぞ。」

「そいつが曲者、討ち果たすがよろしい」

「さようかな？ そうだろうか？」

金弥うかうか乗りかけた。「ここに一つ残念なは、そやつの方が、武道では……」

「ははあ、貴殿よりできますかな」

意外にも広太郎

三好坂という武士、またニヤニヤ、

「さようさ、全く、打ち見たところ、貴殿はご縹緲はよろしいが、ちとそのどうも、ご柔弱のようだな」

縹緲がよいといわれたので、またもや金弥才ホンと咳。衣紋を直したものである。

「失礼ながら貴殿には、寺侍でござろうの？」そろそろ無礼なことをいう。

「とんでもないこと、旗本でござる」

「ははあ、徳川ご直参か」

「しかも安祥旗本で、家柄にかけては、負けを取らぬ」

「それは、えらいの」とだんだん無礼。「で、ご知行は何千石で？」

「む」と金弥つまつたが、「そういう貴殿は、お大名かな？」

「拙者、天下の浪人でござる」むしろ凛とした声である。

「どうしたどうした三好坂」こういうしながら四人の武士、ドカドカかたまつてやって来た。

「何さ、ここにいるご仁がな、あんまり縹緲が美しい。寺侍かと聞いたところ、安祥旗本とおっしゃるので。どうかな、旗本に見えるかな？」

「どれどれ一見。これは美男！ ははあこいつ、河原者だな」

「どれどれ一見。これはヨ力稚児。陰間でござろう、それに相違ない」

「どれ拙者にも見せてくれ。あッ、なるほど。これは素的。」

女であろう、変装した女」

「まあさ、拙者にも見せたり見せたり。ウフッ、まさしく両性だな」

金弥ガタガタふるえ出した。「無礼でござろう、無礼でござろう！」

「しゃれた事を申せ！ 変性男子！ それ方々、この化け物の、腰の物を抜いてみようではないか」

「それがよろしい。なまくら拝見」一人が金弥の刀を抜いた。

「感心感心、さびてはいない。しかし曲げると曲がるやつだ」ガランと往来へ投げ出してしまった。

「後学のため見て置かつしやい！」最上の浪人と呼ばれる武士、自分の大刀をガラリと抜いた。

「わかるかな、栗田口藤四郎！」

すると続いて七軒町という武士、同じくガラリと引き抜いた。

「来国光で、切れるぞよ！」

続いて三人が引き抜いた。

「大青江だ！ よっく見ろ！」

「すなわち鳥飼国俊だ！」

「驚いてはいけない、松倉郷！」

真物かにせ物か知らないが、名に聞こえた五本の刀、ズラリと並んだものである。

「もうよかろう」といったのは、お茶の水という武士であった。「さあさあ帰れ。今後は来るなよ」

トンと金弥を突き出した。

あとには客は一人もいない。みんな逃げ去ってしまったら

しい。

「これ、小女。酒を持って参れ」

この前後から十二、三人の人影、家の奥から店をながめ、打って出ようとひしめいていたが、どうやら誰かがとめたため、いつか姿が消えてしまった。

「酒はどうした。酒だ酒だ！」

「もうよろう。勘定だ」

すると小女が現われた。

「へえ、五両いただきました」

途方もない高い値段である。またゴテルかと思ったところ、例のお茶の水と呼ばれた武士、だまって小判を五枚並べた。一斉に立ち上がって出ようとした時、門口から客がはいって来た。ほかならぬ袴広太郎である。

バンパイヤ

どうしてこんな南蛮屋などへ、袴広太郎は来たのだろうか？ やはり金弥と同じように、偶然入り込んで来たのだろうか？ それにしては様子が違う。何か一心に思い詰めたような決心の色が明らかに眉宇の間に現われている。思うところあって来たらしい。しかしそれはとにかくとして、南蛮屋の店へはいった以上、安穩ではいられまい。

乱暴な五人の侍が、見のがしておく筈はない。はたして五人の侍は、広太郎を見ると顔を見合わせ、元の席へ引き返した。

ここは南蛮屋の奥座敷、屋号に似つかわしい南蛮風の部屋で、青い絨緞、オレンジ色の壁、白堊の天井、黒檀細工の円卓、ギヤマン細工のランプなど、この時代には珍しい、異国趣味が漂っている。巨大な寝椅子に横になり、コロコロコロと音を立て、精巧な水煙草の吹管をくゆらしているのはイスラエルのお町で、この前に椅子に腰かけているのは、南蛮屋の主人でお町の同志、例の早引の忠三である。スペイン産の漆黒の猫が、部屋をグルグル歩いているのも、南蛮産の純白の鸚鵡が、もらった煎餅をコチコチと、鋭いくちばしで、壊しているのも、ちよつと風変わりの光景である。鉢植えの蘭は満開で、芳香がほのかに漂っている。古風の兵船を描き出した、大型の油絵が金ぶちにはめられ、壁の一所にかけられてあるのも、また好ましい異国趣味である。と、猫がノソノソと、鸚鵡の籠の真下へ行き、ミーンと一声やさしく呼んだ。と、鸚鵡は煎餅を一ひら床へ落とした。うまそうに猫がそれをたべる。鸚鵡と猫とは親友らしい。

ガラガラと器物の壊れる音が、店の方から聞こえてきた。「チェツ、奴らまだいやがる。乱暴狼藉の仕放題。畜生ほんとにムカムカするなあ。どうかしてやらなけりやあ気が済まねえ。これまでにした店だって、きやつらのおかげでさびれてしまう。……あねご、勘考はあるまいかね」

「うっちゃってお置きよ、どうなるものか。今があいつらの全盛時さ。あばれ放題あばれるがいいや、そのうちにこっちが勝ってみせる」

「などとおちついているうちに、口があいたらどうします」「妾あ大丈夫と思うがねえ、そんな氣遣いはまずなからう。」

相手も大変な人間だが、あいつだってあのとおりの曲者さ、
痛め吟味では口もあくまい」

「あっしにやアなんだか心配でね。どうでしょう、いっその
こと、荒っぽい料理に取りかかつては」

「そいつこそ本当にあぶないよ。だって忠公そうじゃあない
か。味方に五百人の人数があれば、敵には千の人数がある。
それに味方がどうかというに、残念ながら烏合の衆さ。町人、
百姓、ごろん棒、女子供に食い詰め浪人、一束いくらつてい
う人足だよ。ところがお前、あいつらときたら、一騎当千の
武者だからねえ。それに親玉が浪人ながら、十万石のくらし
をする、兵法の先生と来たひにやア、どうあがいたって歯は
立たないよ。まあまあもう少しながめていよう、待てば海路
の日和ひよりつてね。古いようだが金言さ。金言は無駄にはできな
いよ。……ネロや、ここへおいで」

ミーンとなきながらスペイン猫、寝椅子の上へ飛び上がった。
身体からだをうねらせ抱く拍子に、裾から緋縮緬ひぢりめんがはみ出した。
「眼に毒だ、殺生せつしょうだなあ」忠三、横つちよを向いたものであ
る。

恋の憧憬

「へん」とお町はあざ笑った。「そう緋縮緬がこわくては、
太物屋ふつものやの前は通れないぜ」

「それがさ、並みの緋縮緬じゃあない。あぶらの乗った真っ
しろな、ピンと張り切ったはぎが二本、鎮座ましますと思う
とね、こう胸の辺がモダモダしまさあ」

「衆仙くもせんの口だね。きたない仙人だよ」

「惜しいものだ」と早引はやびきの忠三、にが笑いをして慨歎した。
「あねごも今年にはたちの筈だ。いろをこしらえていい頃だ。
兼好けんこうさんがいつてまさあ。色を好まねえ阿魔あまっ子は、底のね
えひしゃくに似ているってね。どうもあねごはがさつでいけ
ねえ」

「呆れあきもしないよ、ひしゃくだとき。玉の杯底なきごとしさ。
それにお前、阿魔あまっ子じゃないよ」

「どっちにしても似たようなものさ。なにしろあねごは落胤らくいん
には見えねえ」

「そりやあそうだろう。わざとしているんだもの。根からの
平民という奴は、不思議にひどく高踏こうたがるし、貴族うまれの
人間は、あべこべに平民になろうとするよ。でもね」とお町
ぼんやりと、あこがれるように眼を据えた。「いい相手さえ目
つかったら、妾めかけアいつでも恋をするよ」

「どんな男がお好きかね？」

「ああ真っ先にいつて置こう。お前のような男じゃあないよ」

「ご丁寧でげす。さてそれから？」

「色の浅黒い好男子さ」

「アレ、おいらに似ているぜ」

「武道の方も達人でね」

「中条流なかつりゅうの早縄はやなわはえ？」

「金持ちでなけりや嫌いだよ」

「あッ、こいつだけがはずれている」

「三拍子そろった若い男さ」

「飲む打つ買うの三拍子なら、めったにヒケは取らねえが」

「さあそいつだってあぶねえものさ、飲むときまって管を巻くし、打つと勝って来たためしはなし、買うとむやみに振られるしさ」

「ワーツ、あねご、コキおろしましたねえ」

「冗談おいしいな。正直なところさ」お町グルリと腹ばいになった。薄物を透して二本の足が、かかとかからスナリと伸びている。ワングリした腰つき短い胴、たくましくはあるがととのった肩、日本人放れのした体格である。伸ばした腕に袖がまくれ、二の腕がムツチリとあらわれている。

見ないような様子はしているが、忠三こっそり眼を使い、はだけて見える乳の辺へ、いやな笑いを送っている。二つの乳房に押し伏せられ、もがき廻っているスペイン猫が、どうやら忠三には羨ましいらしい。

「おいらも猫になりてえなあ」こんな事を考えているらしい。

「無理あねえな」と忠三がいった。「島原城之介がコロリと参り、あねごの味方になったのはね」

「ふふん、あいつもお前に似ている」

「惜しいことをした。ちょっとの違いだ。巻軸がこっちへはいったものを」

「今さらいったってどうなるものか」

「あねごにしちゃアまずかったね。すぐに巻き上げりやよかったのに」

「いくら好色の城之介でも、あれほどの物が手にはいりゃあ、ちよっと渡すのが惜しくなるものさ」

「そのうちとうとうとツつかまってしまった」

「なんとかいったつけねえ、とっつかまえた奴は？」

「袴が広いとかいう奴さ」

「ああ袴広太郎か」

「あねご？」と忠三、声を強めた。

お館様へ

「あねご」と忠三、声を強めたが、「どんなものでしょうね。こんな時にこそ、お館におすがりになっては？」

「それがさ、どうも気が進まないよ」イスラエルのお町、気がなさそうに、「せっかくここまで仕上げたんじゃアないか。それを今さらおすがりしては、甲斐性がないというものだよ」

「機会を逃がすと大変だがなあ」

「うるさいねえ。心得ているよ」

「いい手段でもおあんなさるのです？」

「いったじゃアないか、もうさっきに。待てば海路の日和とね」

「私にや難船が眼に見える」

お町、今度は返辞をしない。

「わがままでさあ、わがままですよ。ちゃんと膳立てをしてお招きした、あっしの苦心は買ってくれず、待てば日和は悠長ですなえ。それもさ、他人のためじゃねえ、みんなあねごのためですのにね。永い念願の巻軸が、すぐ手にはいるじゃありませんか。ちよっとおすがりしえしたらね。……お母さんのうらみ、あねごの心外、そいつもまんざら知らねえじゃあねえが、まあまあそんなものはこの場合、そっとしまっ

て置くんですね。……いけませんかね。どんなもので？ ……

「オヤオヤ、なんだい泣いていらつしやらあ！ ははあ、お母様を持ち出したので、それで愁嘆なさるんですね。やり切れねえなあ。まるで赤児だ。オオ、よしよし泣くな泣くな！ 禁物でけす、涙はね。あねごにそうやって泣かれると、どうやらあつしまで悲しくなる——とこういふいいんですが、実は反対にうれしくなるんです。というのは泣いたとたん、倍も綺麗に見えるんでね、緋縮緬よりなお素敵だ。全くあねごは変ですねえ。笑ってよく泣いてよく、それで怒ってもいいんですからねえ。あッ。なんだ、泣きやんじゃった！」

「なんだい忠三、いいかげんにおしよ」涙をふくとイスラエルのお町、グルリと一つ寝返りを打った。喜んだのはスペイン猫で、乳房のおもしろから逃げ出してしまった。と、お町、口をすぼめ煙りを吐いたものである。

「あのね、いずれはそうなるうよ。お館様のお力に、おすがりするようになるだろうさ。それよりほかに今のところ、いい手段はないのだからね」

「そうでげしよう、そうですともさ。そうきまったらさあすぐに」

「ところが駄目さ、まだ今はね。……誰かいつそ強い押し手で、押し立ててくれたら飛び込んで行くよ」

「え？」といったが忠三には、どうやら意味が飲み込めないらしい。「なんのことでげす、押し手とは？」

「はつきり妾にもわからないが、なんだかそのうちに、もうすぐにも、何かが妾の前へ来て、妾の心をかり立てて……」

あこがれるように茫然と、白望の天井を見たものである。

「ははん」と忠三、今度はわかった。「いけねえなあ、大望の

邪魔だ」

「何がさ？」とお町、眼を返す。

「やっぱりなんだ。玉の杯には、底がねえ方がよさそうだ」コツコツと戸を打つ音がした。

「ああいいよ。はいっておいで」

はいって来たのは料理人、やはり仲間の一人である。

「イスラエルのあねご、お客様で」

「え、私に客だつて？ おかしいねえ。だれだろう？」

「立派なお武家様でございますよ」

「あつ、驚いたなあ、もう来やがった」これは忠三のつぶやきである。

こがれる心

イスラエルのお町を訪ねたのは、ほかならぬ袴広太郎であった。帳場の前へたたずみながら、ジリジリとして待っている。

「逢わなければならぬ。どんなことをしても。まだかなまだかな、どうしたんだろう？」

五人の不気味の侍が、ジロジロ見ているのにも気がつかない。

「どうしても逢ってお願いする。是が非でも納得させなければならぬ」地団太を踏むばかりである。

発狂ではござらぬ。呪縛でござる。さよう島原城之介のな。さがして城之介にお逢いなされ。呪縛を解くようおたのみなされ。お京様の狂乱はなおりましょう。その節巻軸を奪い取

り、当屋敷へご持参なさい。お京様をお渡し致しましょう。……こういう天草時行の言葉を、ほとんど夢中で聞くようにして、巴御殿を飛び出したのは、今日の午前のことである。何より真つ先に訪ねたのは、懇意の与力勘十郎の屋敷で、広太郎はこういつてたのみ込んだ。

「先夜拙者手ずから捕え、通りかかりの同心衆へ、お渡しした白衣の修験者、島原城之介と申す者に、特別をもってこつそりと、牢前にても結構でござれば、おあわせくださることとなりますまいかな？」

それに対する勘十郎の言葉は、まことに不思議なものであった。

「何を袴氏仰せられる。修験者とか島原城之介とか、さような囚人はおりませぬよ。貴殿捕えたと仰せられるが、ではその後町奉行所より、ひきあわせ人として呼ばれましたかな？ 事実同心に渡されたのなら、それに相違ござるまい。がおそらくその同心は、凶徒の一味、にせ同心でござろう」

びっくりしたのは広太郎で、途方にくれざるを得なかった。思い余って市中をさまよい、車坂まで来た時である。よいやみの中からものの怪のように、例の傀儡師が現われた。

「浅草へおいでなさいませ。象潟町の南蛮屋、そこにいるイスラエルのお町様。その方におたのみなさいませ」こういうとフツと消えてしまった。

で、訪ねて来たのである。

「あの傀儡師何者だろう？ まるで運命の神様のようだ。吉凶共に先づれをする。イスラエルのお町とは何者だろう？ 善か悪か不安だなあ。逢えばわかる逢えばわかる。善悪にか

かわってはいられない。少しでも力になる者なら、たのんでのんでたのみ込み、どんな犠牲を払ってでも、お京様から呪縛を解き、あの屋敷からつれ出さなければならぬ。が、それにしても驚いたなあ、あの時の同心がにせ物とは。はたして島原城之介、どこに隠れているのだろうか？ イスラエルのお町とかいうその女、城之介のありかを知っているのかしら？」

取り次ぎをした料理人、奥へはいったまま出て来ない。

「まだかな、まだかな、どうしたんだろう？ ……ああそれにしてもお京様、なんという境遇になったんだろう。あのまでは氣違いだ。一日遅れれば一日だけ、悪化するに相違ない。……それに気味の悪いあの屋敷。それに気味の悪い天草という武士。よしや呪縛はなかりうと、あんな屋敷へ入れて置いたら、本物の氣違いになるだろう。……遅いなあ、どうしたんだろう？ 逢わなければならぬ、逢わなければならぬ。……逢ったらおれはこういつてたのむ。費用も惜しまぬ。不義に心をまかせてもいい。どんなのぞみにでも応じましょう。もしも可憐なお京様を、正氣にお取り戻しくだされたら」

闇討ち

「お逢いなさるそうでございます。さあさあどうぞお上がんなすって」

取り次ぎの者がこういった時、はき物をぬぐのももどかしく、広太郎は座敷へ飛び上がった。

店を通ると廊下であり、その突き当たりに別棟があり、その扉が開いた時、広太郎思わず「これは？」といった。南蛮屋の部屋の様が、広太郎の眼を驚かせたのである。

見知らぬ訪問者を怒ったかのように、スペイン猫が背を持ち上げ、ガリガリとつめをといだのも、金属性のなき声を、籠の中で鸚鵡が立てたのも、広太郎を少なからず驚かせた。しかしもちろんそれ以上、ひとみの色と皮膚の色とが、異国人種の伝統を伝え、その他は日本人と変わりがない、妖艶な混血の若い女が、部屋の中央に立っていたのは、広太郎にとっては驚異であった。

「花ちゃん花ちゃん、だまっておいで」

イスラエルのお町はいったものである。すると鸚鵡がなきやんだ。

「ネロやネロや、あっちへおいで」

すると猫が立ち去った。

「お掛けなさりませ、袴様、……妾がお町でございます」

底力のある銀声！と、くちびるがほころびた。石榴色をした真紅のくちびる！その間からのぞいたのは、磁器のように艶のある真っ白の歯！ムツと感じられる肌のおい！だが室の中を充たしているのは、芳しい蘭のかおりである。

ああ優秀なるバンパイヤ！さすがの広太郎も圧迫を覚え、じつと立ちすくんだものである。

「だが大丈夫だ。この女なら！どんなことでもかなえてくれよう」

同時に心の片隅では、安心を覚えたものである。

しかしはたして広太郎にとり、イスラエルのお町と逢ったことは、そんなにも幸福なことだったろうか？

しんと更けた浅草界隈、店々は閉ざされ燈火は消え、通る人さえまばらである。と、スタスタと一つの人影、象潟町の方角から、碁盤目小路の方へやって来た。ふと迷い込んだ碁盤目小路、さあ早速には出られない。行っても行っても小路である。行っても行っても四辻である。鳥の巣のような小さな家、それがビッシリ並んでいる。「これは困った」とつぶやいた。それは袴広太郎であった。南蛮屋からの帰りであろう。一つの辻をまがったとたん、「参るぞ！」という声があった。同時に人影、黒々とおどり、サツと太刀風が頬にふれた。飛びしった広太郎、家の外壁へ背をつけた。

「これ、何者だ。人違いをするな。拙者は旗本、袴広太郎。怨みを受ける覚えはない！」

柄は握ったがまだ抜かない。暗中の敵を睨みつけた。

「ふふん」とあざ笑う声があった。

「袴広太郎、まさしく承知。さあ出て来い、出られるかな」にくにくしいおちついた声である。星影で見れば大上段、辻の真ん中に立っている。感覚でわかる、その構え、容易ならぬ強敵である。

「袴と知ってかかって来たか。わけは知らぬが是非に及ばぬ」氣息を調べる忍び声、こういうと広太郎はスツと抜いた。

「盗賊かな、遺恨かな？ 島原城之介の一味かな？ 困ったものだ。ちと手強い」前足を折り、後足を敷き、敵の胸まで肩を落とし、スルスルと進むは柳生流の下段、二星を取って

勝とうという、すなわち沈龍ちんりゅうの構えである。

小路戦

沈龍の構えで広太郎、スルスルと辻まで寄せて行った。左手ひだりてを差し向けさあ斬れという、一面誘いの構えでもある。あわいいっけん一間、そのとたん、敵の体形ユラリと変り、スツと上段から青眼になった。「来るな！」と感じた一刹那、果然左肩へ斬ってきた。と待ち設けた広太郎、サツと車に斬り返した。身体からだのひねりに従って、おのずから左肩が後へ引き、ピッタリ姿勢が立ち直る。ギョツとしてしりぞく敵に乗り、残心を勝つ心持ち、サツと右腕うでへ太刀をつけた。敵もさる者スツと退く。足踏み違えた広太郎、息もつかせず左腕さでを取る。が、こいつも引ひつ外はずされた。と、ツツ——と二人ながら、前後へ退いたものである。あわい二間、双方無言、互いに氣息をととのえる。

とまたジリジリと寄り合った。相手は青眼、その太刀先、三寸へわって太刀をつけた。間一髪、横手払い、チャリンと払った敵の太刀。そこへ摺り込んだ広太郎、またダツと車に斬る。どうかわせたか左身さしんを入れ、敵はピッタリ受け止めた。「しめた！」と思った広太郎、智見妄病ちみわうびょうを払うという、禅の心にのっとった、当流での「斬釘截鉄」きびしく右腕へ打ち込んだ。が、こいつも駄目であった。ものの巧みにかわされたのである。驚いた時には敵の姿、どこへ行ったものか見えなくなった。

「素早い奴だ。業も巧み、一流の達人。何者だろう？」決して

て油断はできなかった。辻の四方を見廻してから、家の外壁へ背中をつけ、そのままゆるゆると横歩き、辻を一方へ曲がって行った。とまた同じような辻へ出た。

「参るぞ」

という声が出た。全くちがった声である。二人目の敵が出たらしい。辻の中央に黒々と、大兵の武士の姿が見える。

「また出たな」と広太郎、臍下へいかに太刀を引きつけた。左手ひだりての肩を差し向ける。わだかまったる龍である。と、なんという無造作だ、片手なぐりに斬って来た。受けず払わず横へそれず、猛然とした広太郎、真まっ向手一杯に打ち込んだ。すなわち長短一味の太刀、三尺の剣はこの瞬間、九尺柄の槍やりと一変する。「おつ」と叫んだ敵の声！「これはえらい！」と二度の声！飛びしさったと思ったが、小路へ避けたか見えなくなった。

用心しながら進んでゆく。と、また四辻へ現われた。が人影は見えなかった。それを一方へ曲がった行く手に人影が立っていた。ちがった声で、「参るぞー」といった。

辻ではない、狭い小路だ。振り廻すことはできなかった。左手ひだりてに柄を握り持ち、右手みぎてをしのぎへそつとあて、左脇へかい込んだ。敵の心臓を真一文字、駆け入って突かん決心である。太刀は持っても無刀の精神、当流での「捷徑」しやうけいである。ジリジリと進む広太郎。敵はジリジリとあとへさがった。ふたたび四辻へ出た時である。

「えらい気魄だ。まずご免！」いったかと思うと敵の影、一つの小路へ駈け込んだ。そのまま姿が消えたのである。

すっかり汗ばんだ広太郎、筋張ろうとするものを揉み、し

ばらく様子をうかがったが、ゆるゆると小路を先へ進んだ。碁盤目小路の一郭である。行っても行っても辻である。辻をまわると小路である。どうしても郭外へ出ることができない。またもや違った音声で、「参るぞ」という声が聞こえてきた。見れば四辻の真ん中に、長身の武士が立っている。

「あいやお武家、袴氏とやら。ずいぶん立派な腕前だの。拙者鉄扇にてお相手いたす。ただし後には槍がある、宝蔵院流の鎌槍がな。まずこれだけは逃がれられまい」こんなことをしゃべりだした。寛々たる物腰である。

暗中の渦

鉄扇で相手をするという！ 小癪の態度と思ったが、すでに現われた三人の敵で、敵の技倆は知れている。いずれも素晴らしい手利きである。広太郎にとっては一生懸命、相手の右手の膝のあたりへ、太刀先をつけて構え込んだ。いわゆる、「獅子のほら出」である。「ははあそうか」と鉄扇の武士、片手太刀身をつ放し横青眼にピタと構えた。さあどこからでも来るがよい！ こういいたような構えである。構えながらもよくしゃべる。

「さあおいで、なんで来るな。和卜、八重垣、大詰め、小詰め、天狗抄花車、柳生流にも色々ある。さよういろいろの秘伝がな。が要するに一刀両断、三学というのが根本だそうなの。とはいえ一刀両断は、柳生ばかりの専売ではない。万般の剣道に共通のはずだ。……堂下に僧侶集まって、一匹の猫を是非するや、南泉という味噌すり坊主、聞いた風にノコノコお

りて行き、『猫は元来一物にして、敵味方を争うは迷妄のもと。これさえ切れば光風霽月、手をとってともに山中を行く、これを切るには不動智をもつてすべし』などと一応もってもらしく、その実あいまいな屁理窟をつらね一刀両断に切ったのを、柳生三蔵という御用剣術家、無門関あたりから引っぱり出し、三学の説をあみ出したそうなの。切る方はそれでもいいけれど、切られた猫はどうするのだ。猫の心も察せずばなるまい。……どだい俺からいわせると御用という文字が気に食わない。御用学者に御用歴史家、御用商人に御用達、御用御用と呼びかける捕り手の奴ばらときたひにはとても悪趣味で鼻持ちがならない。打ち見たところ貴殿などは、だいぶ年がお若いらしい。腐っても鯛、間違っても、御用武士などにはおなりなさるなよ。……ははあどうやらおこったな。太刀先がピリピリふるえてきた。よろしい大いにお怒りなされ。怒らない奴は佞柔だ。ヘラヘラ笑いながら小股をすくい、時々あくどい金儲けをする。こういう奴がいるために、浮世がだんだんきたなくなる。……おッ来るな、さア参れ！」

怒りを発した広太郎、柳生の極意、九ヶ必勝、大のしにのすと水月を越し、こぶしさがりに斬り込んだ。太刀といっしよに身を沈め、敵の打ち物に隠れたが、ドンと飛んだは体あたり、敵もろともに自分の身も、こなにしようとしたのである。

「惜しい」

という声がうしろでした。ハッと広太郎振り返ると、鉄扇の武士が立っている。

クッククックと笑ったが、「まずまず見事、ちと遅かった。

それはともかく、うしろをご覧。槍だ槍だ槍が出た」

家の外壁へ背を持たせ、いわれるままにうしろを見た。はたして暗中に人あって、槍に素繰りをくれている。

「袴氏とやら、槍参らせる」さも愉快そうな声である。小路戦に槍を使う、こいつ馬鹿だといったいが、ピューッと突き出したそのすごさ。あッ、広太郎突かれたらしい！と胸先二寸の距離、そこで槍はピタリと止まり、シューッと後ろへ手繰られた。その鮮かさ、古今無双！冷や汗をかいた広太郎太刀を青眼に構えたまま、じつと一所へ立ちすくんだ。

グルグルグルグルと闇ながら、眼前に渦巻くものがある。槍だ槍だ槍の穂先だ。眼がそこから放れない。しだいしだいに引き込まれる。

「もう一本！」と声がした。とたんに繰り出された槍の穂先、広太郎夢中で払い上げたが、

「あっ！」と声を筒抜かせた。

武士たちの正体

なぜ広太郎は驚いたか！夢中で払い上げた槍の穂先、チャリンと金の音は響かずに、ボコンと木の音がしたからである。「おっ、こいつ稽古槍だ！」

すると哄然と笑い声がした。「さよう、いかにも稽古槍、穂先の代わりにタンポがある。がしかし袴氏、この稽古槍受けられるかな。生き胴はもちろん鉄壁なりとも、拙者が突けば突き通す。うそと思わば貴殿の胸板、遠慮はいらぬ差し出しなされ。蛭巻の辺まで突っこんで見せる。ハッハッハッ、ご

所望次第！」

またも闇中にグルグルと、ほの白いものが廻りだした。飛び込めもせず退きもならぬ。するとうしろから鉄扇の武士、「ソレ袴氏、お行きなされ。飛び込んだり飛び込んだり。たかがタンポ槍、なんでもござらぬ。拙者後見、大丈夫でござる。……いけませんかな、飛び込めませんかな。ははん、さようか、無理もないて。……あいや方々出ておいでなされ！拝見しましょう、この勝負」

バラバラと辻から現われたのは、三人の武士の姿である。広太郎五人に取り巻かれてしまった。「駄目だ」と考えた広太郎、ガラリ太刀を投げ出すと大地へ坐って腕を組んでしまった。「殺そうと生かそうとままにしやがれ」覚悟のほぞをきめたのである。と見て取った正面の敵、トンと槍を地に突いたが、

「これは感心、よく見抜かれた。どうせかなわぬと思ったら、そういう態度がいさぎよい。ひどい奴になると盲滅法、飛び込んで来て怪我をする。一層の馬鹿は逃げようとする。卑怯者になるとたすけを乞う。貴殿の態度は俎上の鯉、尾鰭をたんで静まったというもの。勇士でなければとても出来ない。……なんと方々そうではないか」

「さよう」といったのは鉄扇の武士で、つかつかと小腰をかめた。「失礼いたした、袴氏、悪気ですった所業ではござらぬ。まずご勘弁を願うとして、拙者ことは柴田三郎兵衛。本郷三好坂に塾を構え兵学の講義をいたしおる者」

すると槍の武士が一揖した。「本郷お茶の水に道場を持つ、丸橋忠弥盛幸でござる」

するともう一人が進み出た。「最上家の浪人金井半兵衛」

続いてもう一人の武士がなのった。「浅草七軒町で槍術指南、拙者は加藤市右衛門でござる」

「拙者は奥村八左衛門。住居は本郷六丁目でござる」最後の一人のなのりである。

「実は」と能弁の三郎兵衛、「先刻南蛮屋にてお目にかかり、その際申し上げようと存じたところ、奥へ通られて出て参らぬ。そこで途中でお待ち受けし、甚だ失礼とは存じたが、一つには力量もためしてみたく、またご忠告も致したく、五人代わる代わる立ち出でて、お相手いたしましたような次第でござる。……なんのご用で南蛮屋へ、おいでになったかは存ぜぬが、あそこは一種の秘密結社、それにイスラエルのお町と申して、容易ならざる毒婦がおります。ゆえあつてわれわれ一味の者は、かれら一党を敵として、従来争って参りましたについて、敵に人数を増させまいと、時々出てゆき邪魔いたします。貴殿におかれても将来は、その辺充分ご用心なされ、彼らの餌食にならぬよう、これはご忠告と申すよりも、むしろわれわれの願いでござる。いや実際貴殿のごとき、すぐれた人物が向こうに付かれてはわれら難渋いたします」

すると忠弥が進み出た。

翔ける巨鳥

つと進み出た丸橋忠弥、

「南蛮屋の一味を一口に言えば、天草、島原のキリシタン、その目的は邪教の布衍、ただし刻下の目的は、巻軸を奪おう

とするのでござる。……もつとも巻軸はうまうまと……」

「丸橋氏」と三郎兵衛がとめた。

「これでお暇いたそうかな」

「それがよろしい。しからばこれにて」

「ご免ください、袴氏」

タラタラと五人肩を揃え、スツと小路へ消えてしまった。

その素早さ、あとはシーン！

大地へぶつ坐った袴広太郎、しばらくは立ち上がらなかった。

「なるほどなあ。かなわない筈だ。五人ながら江戸の一流、わけでも丸橋柴田ときては、匹儔のない名人だ。一人と一人立ち合ってもこつちには、微塵勝ち目はない。それが五人に掛かれたんだからなあ。よくそれでも闘ったものだ。負けっぷりがいいのでほめられたが、いやほめられるにも色々あるわい。……それはそうとイスラエルのお町、そんな素姓の妖婦かしら？ 事情を打ち明けおれがたのむと、最初はいかにも案外らしく、じつと俺の顔を見詰めたが、『島原城之介のおり場所も、また巻軸のあり場所も、ほぼ見当がついております。そうして妾達にとりまして、その巻軸は重大な物。余人などへは渡せませぬが、事情を聞けばお気の毒。お京様とやらのお命にも、かわりあると承ってみれば、うっちゃって置くことも出来ますまい。よろしゅうございます。お引き受けしましょう。今晚のうちに片をつけ、明日中にお京様を、お屋敷へお返しいたしましょう』と、さますがしく引き受けてくれたが、そんな毒婦とは思われなかった。もつとも俺がうれしまぎれに、『このこと成功いたしましたならば、

どのようなお礼でも致します』と、こういうと、微妙な笑いをたたえ、『お金もいらず、物もいらず、何も戴こうとは思いませんが、そのうちあるいはあなた様の、一番一番大事なものを、戴き上がるかもしれません』と、なぞのような言葉をもらした時、何かしらおれはゾツとして、寒気をさえも催したもののだが、こんな点からいう時は、なるほどなあ、毒婦かもしれない」

股腕のしこりを揉みほぐし、広太郎はやおら立ち上がった。と、その時、星の下辺、屋根棟低く黒々と、まりのような物が飛んでゆく。風を切るのは翼の音、鳥にしては大きな鳥だ。

「はて何だろう？」と見上げたが、たいして気にもとめなかった。

碁盤目小路をやつと出て、自分の屋敷の方へ帰って行った。

さて一羽の巨鳥であるが、碁盤目小路の屋根上を過ぎ、深夜の江戸を西南に向かい、赤坂の方へかけてゆく。

上赤坂喰違い、大手よりは二十三丁、そこに広大な屋敷がある。五十五万五千石、紀州名草群「#「名草群」はママ」和歌山の城主、三家の次席大納言、紀伊頼宣卿のお館である。

そこまで来た時、その巨鳥、翼をちぢめると思ったが、スーッとばかり木立へ下りた。しばらくは何の音もない。

その奥庭に張り出して、一字の建物が立っていた。その部屋の中に端然と、見台にむかって坐っているのは、五十年輩の高朗たる人物、館の主頼宣である。

と、ハタハタと戸外から、雨戸をたたくものがある。が、頼宣気がつかない、じっと書物に食い入っている。と、また

ハタハタとたたく音！ はじめて頼宣顔をあげた。

「はてな。風でも出たのかな？」

と、またハタハタとたたく音！

紀州頼宣

当時紀州頼宣といえ、叛骨稜々たる老英雄。將軍家光狂乱と聞くと、「うん、大丈夫だ。おれがいる」こういったことである。家光なんかくたばってしまえ。おれが將軍になってやる。ちつとも不思議はないじゃないか！ こういう意味が言外にある。明の遺臣鄭成功、明朝恢復の大望を抱き、大日本国に援兵を乞うや、「五十五万石返上致す、十万の兵をお貸しください。支那四百余州を蹂躪し、見事奪ってお眼にかけます。さて取り上げた四百余州……」中途で言葉が切ってしまった。誰が將軍なんかに寄付するものか、おれが文字通り王様になるのさ！ こういう腹があったからである。由井正雪の乱があつて、老中に疑いをかけられるや、「めでたい！」と頼宣まずいった。「嫌疑の本人がおれでよかった。外様大名なら家が潰れる。そうむやみと潰してはいけない」それからからからと笑ったそうである。さすがの知恵伊豆も眼を丸くし、「大納言様は凡人でない。尋常にゆけば宗家の柱、下手にそれるとがんになる。さわるなさわるな、そつとして置け」こういったことである。「うん、おれは南海の龍だ！」これが頼宣の常套語であつた。そこで号して南龍公という。

下ぶくれの垂れ頬で、一見すると大変やさしい。半白の髪

を茶筌^{ちやせん}に取り上げ、薄茶のかたびらの着流しである。塗り骨の扇で涼を入れ、じっと見ている見台の書は、六韜^{りくたう}でもなければ三略でもなく、意外！ スペイン語の兵書である。

とまたあま戸へあたる音、ハタハタハタとやわらかい。

「これはおかしい」とズイと立ち、ふすまを開けると長廊下、つと立ち出でて雨戸を開けた。スーッと舞い込んだ一羽の鳥、はがいをちぢめると座敷へ下りた。南洋産の白鸚鵡^{しろくわうぶ}、首に紙片が巻き付けてある。

「ほほう」とさすがに驚いて、静かに坐るとだきかかえた。

鸚鵡はちつとも動かない。紙片をほぐすと女文字、一通り見ると打ち案じたが、やがて時絵^{ときえ}の硯箱^{すずりばこ}を引き寄せ、何かサラサラと料紙へ書きたたんで鸚鵡の首へ巻いた。それをあいずに舞い上がり、一巡部屋を廻ったが、すぐに戸外へ飛び去った。雨戸を締め切った頼宣卿、ポンポンポンと、手を打った。

「はっ」といらえて、ふすまを開き、手をつかえたは宿直^{とくのち}の武士、「は、お召しでございますか？」

「うむ、ちよつと兵庫^{ひょうぐ}を呼べ」

間もなくやつて来たは牧野兵庫。おそば去らずの寵臣^{ちようしん}で、火術にかけては扶桑^{ふそう}第一、丸目一貫目の筒をかかえ、品川の海、五町の沖合い、廃船を轟然^{こうぜん}と打ち沈めたという。人品骨柄も打ち上り^{のぼ}、年齢四十一歳である。

「おお兵庫か、これを見い」例の紙片をヒョイと出した。

「拝見」というと押し戴き、一渡り見たが顔を上げた。「町姫様よりの懇願状！」

「うむ、そうだ。意外だったよ」

「しかしお館^{やうた}にはどうしてこれを？」

「今な、鸚鵡が舞って来た。そうしておれに手渡したのさ。で、すぐに返辞をやった」

「ははあ、鸚鵡が？」と眼を見張ったが、「何とお館にはご返辞を？」

「いうまでもない。承知したとな」

「これはごもつとも存じます」

「ついてはその方大儀ながら、すぐに参って取り計らってくれ」

「かしこまりました」

退出をした牧野兵庫、間もなく大納言家の裏門から、一挺^{ちよう}のかごが走り出た。

見台に向かった紀州頼宣、読んでも意味がわからないらしい。

「町姫、町姫、可哀そうな娘！ あれの母さえ……尋常であつたら……」眼頭に涙がたまつたらしい、指で押さえたものである。

その間もかごは宙を飛ぶ。

土牢の中

深々とふけた夜の江戸、そこを駈けゆく一挺のかご、まるで流れる星のようだ。いったいどこへゆくのだろう？ 四谷^{よつや}を過ぎ、市ヶ谷^{いちがや}を過ぎ、牛込^{うしご}の方へ走ってゆく。

その牛込の榎^{えのき}町に、大名屋敷を思わせるような、立派な屋敷が夜空をぬき、静まり返って立っていた。

その屋敷の長廊下を、二人の武士が歩いて行く。一人は雪洞^{せんどう}

を片手に持ち、一人はむちを持っている。顔色あおく二重ひとみ、切り下げ髪を肩にかけ、法眼袴をはいたのは、館のあるじ由井正雪、もう一人は門下の鵜野九郎右衛門、足音を忍んでシトシトと歩く。廊下が尽きると切戸口、そこを開けると石の階段、二十段ぐらいはあるらしい。それをおりると櫓の扉、それを開くと牢格子、もうこの辺は地下である。

「鵜野、戸をあけい」と正雪の声。

ガチンと錠の上がる音、ギーと開く牢屋口、ズイと二人はいり込んだ。雪洞の灯に照らされて、ボツと明るい牢の中、その中央の板敷きに、何か生き物がいるらしい。白髪、白衣、修験者で、手を合掌、顔を上向け、熱心に呪文を唱えている。すなわち島原城之介である。

「島原、島原、城之介！ おいのりかな、精の出ることだ」まず正雪声をかけた。「が、根気ではおれも負けぬ。今夜もお前を責めに来た。さあさあ強情もいいかげんにしろ。巻軸を出せ、出してしまえ」パチパチと鳴らしたは、むちである。

と、城之介合掌を解き、グルリと正雪を振り返ったが、

「正雪殿、ご苦労千万」こういった声には鬼気がある。「全く根気のよいことで、日夜お責めにいらっしやる。で、拙者も持っているものなら、その巻軸とか申すもの、早速進呈致したいのでござるが、お気の毒様で持っていますせん。その証拠には衣裳をはぎ、下着を取ってお調べになったが、どこにもなかったではござらぬかな」むしろヘラヘラ笑ったものだ。

「うむ、それはわかつている。……どこに隠したか聞いているのだ。住居をいえ、お前の住居を」

「拙者はイスラエル教の教主でござる。信者のある所、天が

下、これ皆拙者の安住地でござる」

「大きく出たな」と由井正雪、今度はあべこべにヘラヘラ笑った。

「實際浮世をおどかすには、なるだけ大きく出た方がいい。そういう点では賛成だ。しかし人を見て法を説け。この正雪にそんなことをいっても、驚きもしなければ感心もしない。上は天文下は地理、武芸十八般伊尹両道、陰陽の原理人相手相、占術禁厭方宅から、仏教儒教神道に及び、兵法では楠流、究めていないものはない。そういう俺だ。駄法螺はよせ！」ここで正雪ギロリと睨み、「それに」とトンとむちを突いたが、「お前にとつては、この俺は元来恩人ともいふべきものだ。袴広太郎とかいう小童に、搦め取られたお前ではないか、もしその筋へ突き出されてみる。島原の残党キシタンとして、否応なしに火あぶりだ。それを助かったというものは、われらの同志佐原重兵衛、機転をきかしてにせ同心となり、横取りをしたがためではないか。恩返しをせい、巻軸を渡せ！」だが城之介がえんじない。「それというのも底をわれば、巻軸欲しさのしわざでござって、親切づくしではござらぬ筈、その証拠には同じ日の午後、富坂町の四辻で、その佐原殿の一群が拙者を襲ったではござらぬかな。もっとも鉄杖の一なぎで、他愛もなくカタをつけましたがな。案外弱いのでびっくりしましたよ。なんの親切を恩に着ましよう」

城之介あざ笑ったものである。

拷問するぞ

島原城之介に笑われても、正雪怒りもしなかった。「ではいいよ不承知か」

「承知不承知は別問題。拙者巻軸など持っていないせん」

「まだ強情か、やむをえぬ」正雪ここで考え込んだ。青白い秀麗な顔だけに、考え込まれると気味が悪い。「鵜野」と正雪は小さな声で、「拷問の用意！ みつしりとやれ！」

「何？」と城之介顔色をかえた。「拷問なさるとおっしゃるか？」

「なみの拷問とは違うぞよ」正雪水のように冷静に、「一本一本髪を抜く、頭がはれあがつて四斗樽ほどになろう。さてそのつぎには齒を抜くのだ。ミリミリミリと釘抜きでな。さてその次には眼をえぐる。だが両方はえぐらない、片眼だけは助けて置く。醜^{しゅうぼう}貌^{ぼう}を見ることが出来るようにな。さてその次はなま爪だ。手の爪から足の爪、一枚一枚ひっぺがす。血がしたたって、床を染め、その中でお前はうめくだろう。さてその次には二つの耳、いやこいつも片っぽだけだ。焼け火ばしで突き通す。ジリジリ肉が焦げるだろう。さてその次には肛門をあぶる。さてその次には男根を切る。さてその次には口をわり、水を腹中へ注ぎ込む。墓^{がま}のように腹がふくれるだろう、その上を足で踏みつける。口から鼻から一時に、水があふれて出るだろう。苦しいぞよ、七転八倒！」

「おやりなされ！」と城之介、かれ声をしばって、うめくようにいった。「神の試練！ こらえてみせる！」

「さて最後の拷問は……」

「まだやるのか。これは面白い」

「お前の恋するイスラエルのお町……」

「何を！」と城之介膝を立てた。「巻軸取りの競争相手……うむ」とうなったものである。

「おびき寄せてこの牢屋で……」

「何をするのだ、何をするのだ！」

「一糸もまとわずはだかにし……」

「はずかしめようとするのだな！」

「お前の見ているその前でな……」

「罪悪だ！」と飛び上がった。「エリヤよ、予言者よ、イスラエルの神よ！ この悪人を、雷^{らい}となつて、即座にお打ち殺しくださいませ！」

「ほえろほえろ、五十ペンでもほえろ。イスラエルの神が天上から、この土牢へ現われて、屋根を破ってお前を連れ出し、奇蹟を現わしたらおれは信ずる」

「モーゼに現われた大天使よ、この姦^{かん}悪^{あく}な盗人を、火柱となってお焼きくだされ！」

「いい形容詞だ。かなり莊嚴だ。さてイスラエルの神様め、火柱になるか雷になるか、ちよっとおれにも楽しみだ。が永くは待たれない。なるだけ早く出してくれ。十まで数える、十までな。……一、二、三……」とゆっくりと、正雪数をかぞえ出した。「十だ！」と叫ぶと皮肉にも、四方を見廻したものである。

「これはいけない、現われないようだ。さてそれではおれの番だ。どうやら最後の拷問が、いちばん利き目があるらしい。」

鵜野門家の衆を率い、南蛮屋敷へ取り詰めろ！ お町一人を目がけてな」

「待て！」と城之介がひざまずいた。「お町にはなんの罪もない！ どうぞそれだけはやめてくれ！」

「ではよすか、巻軸を！」

城之介なんの答えもない。

「鵜野、行け！」と正雪の声！

「はっ」というと九郎右衛門、牢屋口から出ようとした。とたんに外から声がした。

「先生、ご来客にございます」

お町の素姓

来客というのはほかでもない、紀州家の家臣牧野兵庫、客間にピタリと控えている。

「おおこれは牧野氏、深夜のご来駕何用かな！」

はいって来るや正雪は、やや不快そうにこういった。

兵庫前名を弥左衛門といい、尾羽打ち枯らした浪人であったが、その器量に眼をつけたのが、由井民部助正雪で、兵学講義に参上する、紀伊頼宣公へ推薦した。爾来兵庫累進し、おそば去らずの寵臣とはなったが、昔のことは忘れない。正雪を先生と呼んでいた。しかし今夜は正式でなくとも、大納言の使者である。で、厳然と威儀を正し、

「さて早速に申し上げる。承れば由井殿には、島原と申す修験者を、おかくまいあると申すこと。しかるに紀州大納言様には、該修験者とは懇密でござる。で至急に修験者を、お屋

敷から追放なさるようこの段しかと申し入れます」

「ははあ」といったものの正雪にとつては、これは意外の言葉であった。「いかにも島原城之介と申す、怪修験者はかくまいおりますが、どうしてそれを大納言家には？」

「いやその儀につきましては、拙者んと存じませぬ」

「ううむ」と正雪考え込んでしまった。「不思議だな、どうしたんだろう？ 島原城之介を捕えたことは、世間の者は知らない筈だ。ましてや紀州大納言様などが、知っておられる筈がない。それにも拘わらず知っておられる。そればかりでなく城之介めと、懇密の仲だと仰せられる。どうもまこととは思われない。曰くがなければならぬぞ。……どんな事があるうと城之介めを、このまま逃がしてやることは出来ぬ。巻軸、巻軸、素晴らしい巻軸！ こいつのありかを知るまではな。……とはいえ御説を拒んだら、今後お出入りは出来ないだろう。おれにとつてはこれも苦痛だ。紀州家の後ろ楯があればこそ、世間でもおれを信用してくれる。これがなくなったらその時から、おれの信用は落ちるだろう」取捨に迷わざるをえなかった。

とその時牧野兵庫、一膝進めると声を落とした。

「紀州家の使者として申すでなく、単なる牧野兵庫として、由井先生へ申し上げます。これは先生におかれては、是非とも大納言家のお言葉に従い、島原という修験者を、この際追放あそばさよう、切にお進めいたします」

「うむ、それはどういうわけかな？」

「大納言様へすがられた方が、尋常な方ではございません」「ナニずがる？ ずがるとは？」

「修験者を追放するように、すがった者があるのでござる」
「ははあなるほど。何者かな」

「それより先に先生へ、お尋ね致したいことがございます。
イスラエルのお町と申す婦人、先生にはお聞き及びござらぬ
かな？」

「さようさ、噂は聞いております。島原天草の残党で、ある
スペイン司僧の娘と、日本の貴族との間にできた、混血の美
人だと申すことで」

「その日本の貴族というのが、大納言家でございます」

「ナニ、それではイスラエルのお町は、頼宣公のご落胤か！」

正雪仰天したらしい。

「そのご落胤の町姫様がおすがりしたのでございます」

巻軸のありか

牧野兵庫の駕籠が帰り、夜が白々と明け初めた頃、由井正
雪の門前で、ジャランという鉄杖の音がした。現われたのは
島原城之介、スタスタ町の方へ歩いてゆく。

「由井正雪といったところで、ろくな知恵は持っていないえ。

眼の前にある巻軸に、気がつかねえとはあきれたものさ。身
体や頭をさがしたところで、なんでそんなものがあるものか、
持ち物にだよ、持ち物にだよ」こんなことをつぶやいている。

明けゆく江戸は美しい。高台のあたりで鳥がなき、雀が
八方に飛びちがう。乳色をした夏の靄、裾の方からまくれて
ゆく。と、城之介深呼吸をした。「やっぱりな、土牢よりはい
い。土牢は空気が不潔でいけねえ。それに随分責めやがった。

この大行者の城之介様をな、三下並みに扱かやアがった。よ
こせよこせ巻軸を！ ふふん、取られてたまるものか」

山伏町から筆筍町、築土八幡から東北へそれた。

「眠いねむい、恐ろしく眠い。入りかわり立ちかわりやって
来て、眠らせねえようにしやがったんだからなア。こいつに
やおれも参ったよ。十両でも二十両でもくれてやる、どうぞ
ちよっぴり眠らせてくれ、ほんとにおれはこう思ったものさ。
……それはそうとここはどこだ！」グルリと四辺を見廻した
が、「ははあ本郷真砂町か。うむこの辺に大金持ち、滝山源兵
衛がいた筈だ。その総領のお篠という娘、ちよいと踏める顔
だったよ。よしそれでは例の奴……」そこで叫んだものであ
る。

「イスラエルの神に、え、捧げようぞ！」

ジャランと鉄杖を響かせた。あさまだきで人気がない。さ
びた声と鉄杖の音、虚空を渡ってさえ返る。とスタスタと城
之介、足を早めて行き過ぎた。「まずあの女もこっちのものだ。
生身を賞翫した上に、いや応なしに献金させる。悪くないな
ア、おれの商売は」

身体も疲れているらしい。歩く足がヨロヨロする。

「さてこれからどこへ行ったものだ？ ほかに行く所がある
ものか。南蛮屋だあね、お町の所さ」どうしたものか笑い出
した。「あの女を思うとグラグラする。全くなあ、いい女だ！
いってみればにが手だね、こっちが呪縛にかかってしまう。
あの女へなら巻軸だってくれる。眠い眠いああ眠い。あそこ
の寝台へゴロリと寝、子守りうたでも聞きてえものさ」

本郷を抜けて下谷へ入り、それから浅草洗足町、碁盤目小

路を上手に抜け、象潟町へ踏み入った。南蛮屋の前へ立つ時、あくどく笑ったものである。そこでまたジャランと鉄杖を鳴らし、スーッと中へ消え込んだ。

よい天気、日がさして来た。堂のいらかが光っている。

と南蛮屋の門口から、一人の小男がすべり出た。ほかでもない早引の忠三、ひどく機嫌が悪いとみえ、口小言をいいながら走り出した。

「やりきれねえな、あのあねごには」これが最初の口小言である。

「袴が広いという奴に、とうとうとろけてしまやアがった。口をすくしてたのんでも、おいらのいうことはきいてくれず、そこへあいつがやって来て、一口たのむとすぐ承知だ。よろしゅうござんすというところで、パーッと鸚鵡をトツ放す。すると城之介が帰って来て、ヘラヘラ変てこに笑ったかと思うと鉄杖の中から巻軸を出し、うやうやしく献上する。この辺までは結構だが、どうもそのあとが面白くねえ。せっかく奪った巻軸を、天草へ返せというのだからなあ。あッ、痛え！この野郎！ といっただおれにぶつかったのは！ オヤオヤオヤ、公孫樹の木か！ 申しわけねえ、おれの方が悪い」

忠三の煩悶

公孫樹におわびを申し上げ、さて忠三走り出した。

「こうなりやアおれが投げ状で、島原の残党天草時行、浅草安宅町にとぐろを巻き、凶徒を集めて陰謀中、早くお手入れなさるよう……などと奉行所へ密告し、その捕り物のどさく

さ紛れに、島原城之介を入り込ませ、大事な巻軸を盗ませた事も、ムダになったというものさ。つまらねえなあ何ということだ！ 天草の手へ返した以上、めったに二度とは取ることは出来めえ。いめえましいなあどうかしてえものだ。いってどうにもなりやしねえ、お町のあねごにかかったひにやあ、おいら手も足も出ねえんだからな。オイ忠公や、いい子だね、悪あがきせずに行っておいで。そうして巻軸を返して来な！ こういわれるとこの忠公、自然と足がヒヨコヒヨコ出て、ご覧のとおり走っている。魅力だね、魅力ってやつだ。だが魅力って何だろう？ さあわからねえ、見当もつかねえ。別嬪さんということかな？ ほれちゃったという事かな？ うんにや、少しばかり違うようだ。そりやアそうと城之介め、寝椅子にころがっちゃアいねえかな？ ナニサ寝椅子はころがるものさ。ころがって悪いとはいわねえが、もしそのそばに緋縮緬が？ ワーッ、いけねえ、勘忍してくれえ？」忠三往来へ突っ立ってしまった。「いや大丈夫！」と思い返した。「そこはあねごだ。まるめてしまうだろう。心配ご無用、心配ご無用……などと安心をしていると、ひでえ目にあわねえものでもねえ」そこでまたもや立ちどまった。ベソをかいだと思ったら、「寝椅子を呪う！ 寝椅子を呪う！」途方もない声でわめき出した。とバラバラと五、六人、人が立ちどまったものである。おつといけねえ早引の忠三、びっくりして先へ駆け出したが、四谷までは道のりがある。駆け通せそうにも思われない。「駕籠ってものがあるじゃアねえか。なぜ乗らねえ、ばか忠々め！」自分で自分を怒鳴りつけた。「さてな」と見廻すとお茶の水でここが江戸かと思われるほど、木立が

繁って物淋しい。と向こうから駕籠が来た。「空駕籠^{からかご}だな、おあつらえ向きだ。万事浮世はこういきてえものさ。駕籠屋アッ」と大声で呼びとめた。

「フェーッ」というと先棒が、ガタンと駕籠を抛り出した。「へえへえこれは親分さんで、どうぞ勘弁願います。やくざ者ではございますが、まだお縄を戴くには、間があるようでございます。そりゃアあなた稼業^{かせぎ}がら、小博奕^{こばくち}ぐらいは打ちますが、それとてほんの時々で……オイ後棒、おめえもあやまれ」

すると後棒がまかり出た。「これはこれは親分さんで、どうぞマアご勘弁を願います。へい私どもの稼業^{かせぎ}がら、海道筋へでも出ますれば、ゆすりかたりの一度や二度、やらねえこともございせんが、それとてあなたこれまでに、両とねだったことはなし、お縄だけはお目こぼしを。……オイ先棒もう一度あやまれ」

すると先棒がまた出た。「親分さんえ、まあどうぞね、おゆるしなすっておくんないまし。チヨクチヨクいやなことをやらかすのも、浮世が悪いからでございますよ。へい全くセチ辛^{がら}い浮世で、なんにでも運上^{うんじやう}がかかるので、平几帳面^{ひらきちやうめん}にくらそうとしても、見渡す世間が不正直なので、それがうつるんでございますな。まあまあどうぞお縄だけは……」

「何を！」といったが早引の忠三、ふと気がついてふところを見た。捕り縄の先がのぞいている。

「ははあ岡っ引と見やがったな」そこで忠三活用し出した。「承知出来ねえ、承知出来ねえ、コレ、てめえ達悪い奴だぞ！」

ただの駕籠

「これてめえ達は悪い奴だ」こうはいったものの早引の忠三、どうにもおかしくてならなかった。上唇^{うわくちびる}がまくれようとする。とはいえここで笑ったが最後、化けの皮が剥^はげるだろう。「これ途方もなく悪い奴だ」物々しい調子でやり出した。「いやもつと余罪^{よざい}があるろう。余罪^{よざい}がある余罪^{よざい}がある！　そういうつらだ！　余罪^{よざい}づらだ！　これ、おれはな、人相もできる。御用聞きというものは、人相手相方宅から、うらない、まじない、天文地文、そういうものまで知らなければアならねえ、てめえ達のつら、どうもよくねえ。ははアやったな、かどわかしを！　そういう面だ、かどわかしつらだ！」ふところの縄をひねくった。「これ白状しろ、まっすぐにいえ！　悪い奴だ、途方もなく悪い！」同じことばかりいつている。どうにもこうにもおかしくてならない。そこでいよいよ真面目になり、「ひつくくってしまふ、ひつくくってしまふ！　だがな……」とにわかにニヤニヤして、「オイ四谷までなんぼで行く？」

「へい？」と駕籠屋、眼をまるくする。

「ばか！」と一つおつかぶせたが、ここでちょっとヘンなものになった。「もつともてめえ達のいうとおり、どうもご治世^{じせい}もよくねえなあ。役人のやり方だって面白くねえ。バタバタ四隅^{すみ}をひっぱたいてき、ほこりばかり立てやがる。畳一枚に運上^{うんじやう}がつき、窓一つに運上^{うんじやう}がつく。これじゃアいきだつてつまるだろう。悪党^{あくどう}だって出る筈^{はず}だあね。それにさ、悪党^{あくどう}という奴は、本来はひどく善人^{ぜんにん}なんだからな。三尺たけえ木の

上で、首をさらす覚悟して、おおっぴらに仕事をするんだからなあ。ところがおめえ善人とくると……まあまあそいつはどうでもいい。つまりなんだ、善人という奴は、引っ立て役に悪人を使い、尊敬されながら悪いことをする。……だからよ、だからよ、おれとしては悪党の方へ味方するなあ」ホイいけねえと感づいた。これじゃどうしたって岡っ引にやア見えねえ、そこでうんと厳肅になり、「勘弁できねえ、くくし上げる！　とこう元来ならいうところだが、おれは大変忙しい。四谷へゆくのだ、追いつ込んで。で、目こぼしというのじゃアねえが、きょうのところは見のがしてやる。が、面は覚えて置く、見やがれ今度悪いことをしたら、容赦はしねえ、あげつちまう。おれはな、エーと、早引の忠……うんにや、神田の忠六だ。それはそうとオイ駕籠屋、ちようどいいところへやって来た。おれを乗っける、四谷まで」

「へえへえこれは有難いことで」駕籠屋喜んで両手をこすり、「親分さんのお供なら、唐天竺へでも参ります。さあさあどうぞお乗んなすって」

「うん、ところで駕籠賃は？」キワドイところ、掛け合いをする。

「めっそももない、そんなもの。なんの親分さん、戴きましよう」

「そうか」といったが奥歯をかみしめ、「おれはいろいろは取らねえぜ」しかしとうとうニコツイてしまった。「駕籠賃ぐらいはいいだろう」

トンと駕籠へ腰を据えた。「早くやんな、ゆるすなよ」

ホイホイというので駈け出した。

クッククックと早引の忠三、横っ腹を抱えたものである。「見せてえなあ、あねごによ。忠的忠的ってばかにするが、その忠的時によると、こんな儲けもするんだからなあ。それにさ、あねごはコキおろすが、中条流の縄だって、場所によっては役に立つ。クッククック、ただの駕籠だア」

「へい四谷へ参りました」

「うん」というとヌツと出る。巴小路へ入り込んだが、いわば敵地へ乗り込んだようなものだ。オッチョコチョイの忠三ではない、顔も身体もひき締まった。巴御殿の玄関に立ち、「ご免」といった声にさえ、ピーンと覇気がみなぎっている。

暗示の言葉

巴御殿の表門から、一挺の駕籠がかき出されたのは、忠三が入り込んでから半とき後で、北をさして走って行く。内にはたれがいるのだろうか？　牛込を過ぎ小石川に入り、掃除町まで来た時である。駕籠がとまってタレがあたり、ヨロヨロと出たのは一人の娘、それはほかならぬお京であった。

「いったい妾はどうしたのだろう？」ぼんやりと四辺を見廻した。「浅草河喜という料理屋に、袴広太郎様がおいでと聞き、行った時から正気がなく、駕籠の中へ押しこめられ、陰気な屋敷へ連れて行かれたが、夢うつつのように見えたのは、美しい殿堂、広い海、限り知れない砂の原、小羊をたくあおい煙り、そうしてその間にこわらしい、みつ口の小さなお爺いさんが、向こう傷のあるおさむらいさんが、はいつたり出たりしていたが、おおそうして一度だけ、ほんのチラリとでは

あったけれど、袴様のお姿もお見かけしたが、どれもハッキリとは覚えなない。……でもみつ口のお爺伊さんが、さつき妾を丁寧、駕籠へかき乗せてくだすった時から、妾は正気に返ったようだ」

髪一筋乱れていず、衣裳一つ着崩れていない。中高の細面。神性と処女性のあることを、さながらに現わしたあこがれるような眼。これが旗本の娘だろうか、貴族の姫君ではあるまいか？　こう思われるほど気高い鼻。少しやつれてはいるけれど、昔のお京と変りがない。

「おや」とお京は眼をみはった。「ああここは掃除町だ。妾の家があそこにある」

夢中でバタバタとかけ込んだ。

真っ先にお京を目つけたのは、庭を掃いていた若党で、

「お嬢様がお帰りでございますぞ！」

声に応じて走り出したのは、父平左衛門、兄舞二郎、袴広太郎、臼井金弥、まず父と子が抱き合った。

「お京！」といったが涙を流し、「お礼を申せ広太郎殿に。おかげだおかげだ、広太郎殿のな！」

だがその後でもらした言葉は、まことに不思議なものであった。

「これで切腹はまぬかれた。お京の身の上に間違いでもあったら、あのお方に対し、いきてはいられぬ」

巻軸は元の持ち主へ帰り、お京は家へ帰って来た。事件は一段落ついたとはいえ、間もなく起こった二つの事件で、その平和はかき乱された。

その翌日のことであるが巴御殿の門前へ、フラリと現われ

た人物がある。

「傀儡舞わしましょう、傀儡舞わしましょう」

例の老人の傀儡師であった。

「そもそも傀儡のはじまりは、日本においては神の頃、神代時代にございます」リリカルに口上を述べ出した。「下って飛鳥奈良朝から平安朝に至っては、色売る女がこれを使い、下品になったは不面目、源平北条足利氏、戦国を経て御代となり、ますます巧みの傀儡舞わし、わけても拙者の人形は、南蛮渡来の活き傀儡、魂あつて踊ります。ご覧なされい、ご覧なされい」

おりから忙しいたそがれ時、宵闇が迫ろうとしていたが、上手な口上に人立ちがして、グルリと傀儡師をとりまいた。「まず手はじめは文屋傀儡、六歌仙のその一人、つづいて小町を踊らせます」そこで傀儡師は唄い出した。

ヤンレ文屋の康秀は

業平朝臣と恋仇

小町の采女と焦がれたが

すると、バラバラと巴御殿から、二人の武士が現われた。

活き傀儡

巴御殿から出て来たのは、築土新吾と向こう傷のある武士——長崎左源太という武士であった。

「これこれなんだ、やかましい。立ってはいけな、散った散った！」

こういったのはその左源太。

「ほほう傀儡か、よかろう舞わせ」これは築土の言葉である。

「これはこれは旦那様、なにとぞなにとぞご覧だされ。見るも法楽ほうらく聞きくも法楽、投げ銭せん蒔ま銭せんいりませぬ。お気に入ったらお手拍子、それで結構でございます。とはいえ食わなければなりません。そこで前からお約束、傀儡首尾よく舞いませようなら、たんとはいらない一文ずつ、傀儡へお投げくださいますし。……さあさあ舞ったり文屋殿。恋の一念野を越えて、くくり袴に露をかけ、まゆずみさえも汗なれや、小町へ通って行くところ、折しも初夏の夕まぐれ、おぼつかない藤の花、それさえ涙の種となる。燕子かきつばた花さく八橋も、渡れば渡る渡りがね、そこへ後あとから追って来た、業平朝臣なりひらあそんの狩衣かりぎぬや、オーイ、オーイと呼びかける」

一向意味がわからない。しかし大変面白い。箱から取りあげた文屋人形、ヒヨイと地へ置いた老傀儡師三尺ばかりさがったが、片手で膝を打ちながら、なお口上を続けてゆく。

「ヤンレあわれな文屋殿、そこで手をすり申すには、お許しください業平さん、京は祇園ぎおん会不動尊、八幡様へ願かけて、おたのみ申す小町様、どうぞ私へくださりませ。いやいやいやと首を振る、業平さんのいうことに、それはいけめえ文屋さん天神様へ誓っても、小町ばかりは譲れねえ。これを聞いたる文屋さん、さりととはさりととは気が強い、悪でござんす業平さん、わちきと小町の馴れ染めは、そも十月の神無月、野分芭蕉のわきばしやうに秋深く、きぬうつ音も消えがての、御所のお庭は葉鶏頭はすけいとう、その廊下の真ん中で、オットドッコイおれがいう、おれと小町の馴れ初めは、清明の日の高殿で。花吹雪する真つ昼間、小町の方ではれたので、おれの方でもほれてやり、

かむりの笄かざし落としたが、どうでも小町はいい女、柳の五衣に緋の袴、檜扇ひおうぎ持ったとりなりは、官女官女官女だア……」

だんだん変てこなものになる。だがいったいどうしたのだ。地上に置かれた人形が、口上に連れて手を動かす、首を振ったりするではないか。いや不思議はない、ぜんまい仕掛け、しかしこの時代では驚異である。

「やア踊り出した踊り出した」

「いきてるいきてる、活き人形だ」見物は口々に囁ささし立てた。その騒ぎに誘われたのか、又ツと現われたのは天草時行。「騒がしいの、どうしたのだ」醜みにくいみつ口でうめくようにいった。

「傀儡でござる。いきている傀儡」こういったのは築土新吾。

「どれ」とかき分けて前へ出て、硫黄火いおうびのように青光る、小粒の眼まなこでにらんだが、ピョンと背後うしろへ飛び退いた。「逃げろ！あぶない！ ほえかかるぞ！」

爆発の音の響いたのは、実にその次の瞬間であった。煙硝の匂い、黄色の煙り、ワツという悲鳴、逃げ出す足音！ 傀儡が破裂したのである。もうそのころには老傀儡師、どこへ行ったものか姿がない。

「やられた！」と叫んだのは天草時行で、屋敷の内へ駆け込んだ。

「方々かたがた、巻軸は盗まれましたぞ！」

間もなくこういう叫び声したが、同じその夜に小松原家でも、一つの事件が勃発した。

また誘拐

お京が無事に帰ったので、広太郎と金弥とを客として、小松原家では宴を開いた。お京だけは出席しない。それは疲れしているからで、隣りの部屋へ寝かして置いた。イスラエル教とはどんな宗教か？ この問題で花が咲いた。

「キリシタンでござろう。それに相違ない」例によって金弥出しやばったものだ。

「しかしキリシタンはキリシタン。イスラエル教はイスラエル教、おのずから差別があるようござる。もっともだいぶ似たようではあるが」これが広太郎の意見であった。

「いやキリシタンに相違ござらぬ」バカのくせに金弥がんばろうとする。

「拙者そのうち調べてみましょう」舞二郎穏やかにこういったので、話がほかの方へ移って行った。

「なんに致しても広太郎殿には、ひとかたならぬご恩になり、なんと申してよろしいやら、お礼の言葉もございません。お京にとっては命の恩人、また私にとりましてもな」平左衛門改めてお礼をいった。いい尽くせないというようである。

「いや今回の事件では、私にも責任がございましたので。それに成功しましたのも、ほんの偶然でございましてな。飄々々と現われる傀儡師が、いわば手引きをしたようなもので」広太郎、ちっとも威張らない。

金弥そこでまた出しやばる。「拙者も随分苦心しました。江戸じゅうグルグル廻りましてな。お京様は拙者の許婚、さよ

うさよう許婚で！ で苦心いたしました。さよう、こんな事がありましたよ。ええと浅草へ参りました時、五人の浪人にとりまかれ、そのなんだ、ゆすられましたので、そこで拙者うんと睨み、斬るぞ！ と申したらバラバラと、ハッハッハッハッ逃げて行きましたよ。弱いさむらいがあつたもので」当然なことには誰一人、金弥の武勇伝を信じない。

その時であつた、トントントントンと門をたたく音がした。門番がぐりを開けてみると、常使らしい小男が、一通の書面を持っていた。「ご主人様へ」というのである。「どなたからで」と門番がきくと、「道で逢ったお方から」こういう漠然とした返事であつた。

「なんだろう、いったい？」と平左衛門、封を切つて読み下した。

「お京様のお身の上、さる御方なつかしがられ、お預かり致す」という文面であつた。アツと仰天した一同の者、隣室へかけ込んだが、サア事だ！ お京はもぬけの殻であつた。

どうして！ いつの間に？ 何者が？ お京を誘拐したのだろうか？ 隣室には家人がいた。しかも四人のさむらいが。

蒼白になったのは臼井金弥、齒がみをしたのは広太郎、眼をたれたのは舞二郎である。が、不思議にも平左衛門だけが、あわても驚きもしなかった。じつと文面を凝視した。

「いや大事はござるまい。かえつてこの方がよいかもしれぬ。どっちみち今回の出来事は、島原城之介、天草時行、そういう者のわざではござらぬ、……だが不幸の娘ではござる」これが平左衛門の言葉であつた。

杉窪の里

日本橋から三里、新宿となる。新宿から一里、松戸となる。松戸から三里、小金の宿。小金から三里、我孫子となる。ずっと行けば、水戸へ出る。これすなわち水戸街道。今日の里程とはだいぶ違う。我孫子と小金との中間に、馬橋という駅路がある。その馬橋から我孫子へ向け、十町余りも行ったところに、目立たない一基の石標がある。「これより西、杉窪の里」これがぎざまれた文字である。だが道もなんにもない。ただ一面の熊笹で、地勢は傾斜、次第上がり、飛び飛びに林、それから森だが、その森の尽きた頃から、一筋の山路が通じている。そうしてその路の消えたところに、杉窪の里が出来ている。戸数五十戸、人数三百人、奇妙な芸人の住み場所である。一名放歌の里という。放歌僧の連中が、中古時代に住んでいたからで、里人は放歌僧の後胤なのである。

四方樹木にかこまれた、すり鉢形の小盆地で、その真ん中に宏大な屋敷、里の長の住居がある。それを圍繞して点々と立っているのが五十戸の人家、すなわち里人の住居である。

この杉窪の特権として、運上を納める必要がなかった。ただしその代わり毎年の元旦、選ばれた芸人が柳営へ参り、祝儀の放歌を奏したものである。里人の性質は剽悍で、義侠心に富んでいた。野心家などが活用すると、面白い芝居が打てそうな連中、噂によれば武器なども、貯えているということである。とはいえ日常の生活には、特に変わったところもない。米の飯に味噌の汁、野菜も食えば塩引きも食う。犬もほえれ

ば鶏もなく。お茶も飲めば酒も飲む。色恋もすれば子供もむ。仕事といえは芸事の練習。そうして芸事に必要な、道具類の手入れなど。みんな大変仲がよく、親方に対して忠義心が厚い。親方の名は杉窪の銅兵衛、なかなかの人物だということである。

さてある日のことである。銅兵衛の屋敷の前庭から、明るい女の笑い声がした。

「ホ、ホ、ホ、馬鹿だねえ。どうしてそんなにノロマなの。とらえるといいわ、遠慮なく。さあさあ早くおとらえよ！ノロマのノロマの三吉や！」

すると続いて猿の声が、キーキーと聞こえてきた。

木立が深いので姿が見えない。と、派手やかな振り袖が、庭の一方から他の一方へ、木の間を縫って走って行った。しばらく経って追って行ったのは、毛だらけの猿の足である。「オヤ妾をとらえるなんて、ほんとにいやらしい三吉だよ。お前、まるで文三のようだね」

手のひらでたたく音がした。とすぐ猿のなき声がした。

とまた派手やかな振り袖が、庭の一方から反対の方へ、木の間を縫って走って行った。

「ノロマのノロマの三吉や、どうしてそんなにノロマなの。とらえてごらんよ、さあ妾を」

ややあってノソノソした猿の足が、声のする方へ追っかけて行った。

どうやら鬼ゴツコをしているらしい。

その時一人の若者が、木戸をくぐってはいって来た。

「へ、へ、へ、へ、お嬢様、相変らずねんねえで」

「だあれ？」と娘の声がした。「文三さん？ 何かご用？」ひどくその声は不平らしい。

「まだ親方は帰りませんかね」

「今夜あたり帰るとき。……行ってくださいよ、用もないくせに。……ノロマのノロマの三吉や、とらえてごらん、さあ妾を！」また振り袖が木の間を縫う。

頭領帰館

娘と猿の鬼ゴッコ。それを見ている文三という若者、変な気持ちにならざるをえない。

「ねえお嬢様、君尾様、三吉猿なんかチャイにして、私と鬼ゴッコを致しやしょう。ようござんすか、とらえますぜ」木の間をくぐって走り寄る。

「いやだヨ——、ばか文三」娘の声がすぐ聞こえる。「なんだい、お前色魔しきまのくせに、いやらしいわ。大嫌い！ さわっちゃいやよ、さわっちゃいやよ……ホ、ホ、ホ、ホ、いい気味だ！ わたしが睨にらむと慄おそえるじゃアないか。弱い男ね、骨なしだわ。そうかと思うとしつこくてさ、わたしの後ばかり追いかけてさ。ね、ね、ね、ね、君尾様、ね、ね、ね、ね、お嬢様、死ぬまで『ね、ね』というがいいわ。その代わりわたしもいつてやるわ。そうよ死ぬまで『馬鹿文三』ッてね。……」

またも木の間をヒラヒラと、べに色勝がった友禅の、振り袖姿がひらめき飛ぶ。

その後を追うのは猿ではなく、文三という若者の足。

「そう没義道もくぎだうにおっしゃいますな。ね、ね、ね、お嬢様、文三はほかではございますが、どうやら猿よりはましの筈で。……早い早い随分早い、早いお足でございますなあ。こいつアどうも大汗だ。もつとゆっくり、お嬢様、内輪うちわにお歩きなさいまし。……そうら捉とらまえた捉とらまえた。細くて白くてすべっこくて、綺麗なお手々でございますなあ」

「厭いやだよ厭いやだよお放しよ、なんてきたないんだろう、お前の手は。あぶらだらけで、ネチネチして、蛭いづだわ、蛭いづだわ、まるで、蛭いづだわ！ 厭いや々！ すいつこうツてのね。いよいよ蛭いづだわ。薄っ気味の悪い！ ぶつよ！ ぶつよ！ 頬ほつぺたを！」

ピチャピチャピチャとたたく音！

「引ひつ搔かいておやりよ、三吉や！ かまわないよ、引ひつ搔かいておやり！」

するとキーキーと猿の声。

「おお痛い、おお痛い、ぶちましたね。お嬢様、これは有難う存じます。いえ何大変結構で、ほう帯をして、油紙で包み、大事に致します。……がその代わりお嬢様！ ちょっとちょっと。ようがしよう」

「何をするんだヨーいやな奴！ だれか来ておくれヨー。だれか来ておくれヨー文三がわたしをなめ殺すヨーツ」

その時であった。木戸をくぐり、一人の人物がはいって来た。例の不思議な老傀儡師である。眼を据えて及び腰、木の間をじっと透かしたが、

「これ文三、何をする！」りんとした威厳のある声である。

「ヒヤッ」という文三の声。「これは親方、ようお帰り！」小

びんを掻き掻き現われた。

「ようは帰らぬ、悪い時に帰った。アッハッハッ、気の毒だったなあ」

「へい」というとヒヨコリとお辞儀。「お早いお着きでございます」

「何を馬鹿な、旅籠^{はたし}ではなし。自分の家へ帰って来たのだ」

「ご帰館！」と文三いい直した。

「ご洗足^{せんそく}のお水、取りましようで」

「何さ、裏に清水がある」

「へい」とトチツてまたお辞儀。

「それでは私は里じゅうへ……」

「うん、ふれを廻してくれ」

「へ——イ」というと汗をふき、野郎、木戸から飛び出してしまった。

「お父様！」と娘の声！うれしそうに走り寄った。

「娘や、やっと帰ったよ」老傀儡師は機嫌を直し、これもうれしそうに笑ったものである。

戦闘準備

老傀儡師^{こくわいし}事杉窪の銅兵衛、里へ帰ったその日から、里の様子が一変した。兵糧の積み込み、武器^{へいき}の手入れ、まぐさの刈り入れ、四辺の防備、そうして毎日の秘密会議。男も女も子供までが、殺気を帯びて緊張してきた。いったい何事が起こったのだろうか？ いや何事が起こるのだろうか？

「人数が不足だ、武辺者がほしい。五、六人ほしい、一人で

もよい」口の中でこんなことをつぶやきながら、武事を監督した。

「どうなすったの、お父様？」娘の君尾が不思議そうにきいても、銅兵衛は手を振って答えなかった。「お遊びお遊び、歌ってね。お前にはそれが一番似合う。山の小鳥さん、お日様の子。なんにも心配することはないよ」

だが恐ろしい大敵が、襲って来るということだけは、間もなく君尾にもわかるようになった。

さてある日のことである。三吉猿を引き連れて、君尾は盆地をのぼって行った。のぼり切ったところに草原がある。灌木、微風、野花^{やか}、小鳥、陽は明るく空気はにおい、大変心地よい草原である。

「さあさあ三吉、鬼ゴツコだよ。とらえてごらん、さあわたしを」例によって鬼ゴツコをやり出した。

スーッと君尾が走ってゆく。とその後から三吉猿、今日は手拭いで頬かむりをし、後足で立って追っかけてゆく。

だがなかなか捉えられない。しかしいったいどうしたのだろうか？ 猿は敏捷^{びんしょう}なけものなのに、いかに素早く走るとはいえ、娘の君尾をとらえられないとは？ いやそれにはわけがある。つまり、君尾がひどく不機嫌になり、ピチャピチャ吉をたたくからである。女の纖手^{せんしゅ}というものは、どうしてどうして馬鹿にはならない。これでたたかれると随分痛い。三吉といえども痛いのはいやだ。で、利口に立ち働き、わざと捉えようとしないのである。だがあんまり捉えないと「ノロマのノロマの三吉や」こういって君尾に馬鹿にされる。芸を仕込まれている三吉猿、君尾の言葉なら大概わかる。でその

言葉もわかつてはいたが、言葉で軽蔑されると、手でピチャピチャたたかれるのと、この二つを比較してみると、まだまだ前者の方が辛棒しんぼうができた。で、やっぱり捉えない。とはいえいつまでも捉えないと、また君尾の機嫌が悪く、同じようにピチャピチャたたくので、そこで時には捉えることもある。

「ノロマのノロマの三吉や、さあ妾わらわをとらえてごらん」

スーッと君尾は一方へ走った。

「ひとつ今度はとらえてやろう」こう思ったか三吉猿、一躍すると袖をとらえた。

「アラとらえたね、この悪者は！ なんだいなんだいいやらしい。おとこ猿のくせに女をとらえ、何をするのさ、お放しよ！ 放さないね。ソーラぶつよ」

そこで織手がひらめいて、すぐピチャピチャと音がした。キーキーキーとなきながら、三吉猿はにげ出した。

「堪忍しない、堪忍しない。いやらしい奴、しようのない奴。ぶってやる、ぶってやる。サア、サア、サア、……」林の方へ追って行った。

と一人のさむらいが、林の中から現われた。じっと君尾をながめたが、

「これは意外！ お京様！」こう叫ぶと走り寄り、つと君尾を引っかかえた。

「おお、お京様、拙者でござる！」武士の声は上ずっている。

見知らぬさむらいにひっかかえられ、驚いたのは君尾である。「何をなされます、失礼千万！」ポンとさむらいを突きやっした。「妾は君尾と申します。お京様などとはとんでもない。お人違いでございましょう！」

「ナ二人違い？」とそのさむらい改めて君尾を見詰めたが、「や、いかにも。これはこれは、人違いに相違ございませぬ」あわててとったは編笠あみがさである。そこで殷懃いんぎんに小腰をかがめ、「私わたくし事は袴広太郎、江戸の旗本、小禄者。尋ねる人がございまして、諸国漫遊に出でましたが、あまりによく似たお姿のため、とんだ粗相をいたしました。なにとぞご勘弁くださいますよう」ひどく恐縮してわびたものである。

君尾はかえって気の毒になった。

「いえいえそのようにご丁寧ていねいに、おわびくださるには及びません。よくあることでございます」

「はい」といったものの広太郎、小首をかしげざるを得なかった。

「驚いたなア、そっくりだ。中高の細おもて、高貴の姫君ではあるまいか？ そういったような貴族的の鼻、夢見るような神秘的の眼！ だが、いささかちがうのは、お京様の方には靈性があり、この娘には野性がある。それはそうとこんな山中に、どうしてこんな美しい娘が、猿などと一緒に遊んでいるのだろうか？ 衣裳はといえば大振り袖、べに色勝った友禅縮緬ちりめん。ううむ、帯は京物だな」まじまじ見守ったものであ

る。

若いさむらいに見守られても、君尾はいつこう恥ずかしがらなかった。野原を吹く夏の風！　そういったような性質で、ものにかかわろうとしないからである。とはいえいかにも江戸っ児らしい、洗い上げたりりしい若武士が、うっとりしたようなキョトンとしたような、やや道化た眼つきをして、いつまでもマジマジと見ているので、とうとう明るく吹き出してしまった。

「ホッ、ホッ、ホッ、ホッ、おさむらい様、お珍しそうでございますことね、でもお気の毒でございますわ。秋祭りにはまだ間があり、夏祭りは過ぎてしまいました。当分妾の顔の中を、だしは通りはいたしますまい。ホッ、ホッ、ホッ、ホッ、おあいにくさま！」　いいたいことをいつてしまった。

「や、これは、お手きびしいことで」　しかし広太郎も吹き出してしまった。「アッ、ハッ、ハッ、ハッ、面白いことをおっしゃる。だが無作法はお許しを願ひ、どうぞもう少しお見せくだされ」　そこで臆面もなくマジマジと見る。「いや活潑な性質だ。男を男とも思わない、それでいてすれっからしではなさそうだ。つまり自然児というやつだな。おれは好きだ、ひどく好きだ」

不意に君尾が声をかけた。

「失礼ながらお武家様には、剣術がお出来でございましょうか？」

「さよう。いささか、柳生流をな」

「あの、名人でいらっしゃるのですの？」

「なかなかもって。下手糞の方で」

「いいえ」と君尾は真顔に笑った。「きっと名人でいらっしゃるすわ」

「結構な折り紙。ありがたいことで」

「自然とわかるのでございますの」

「ははあ人相もお出来とみえる」

娘があんまり開放的なので、つい広太郎もつり込まれ、冗談口を利くようになった。

「出来ない方は自慢をし、お出来になる方は謙遜します。：下手だとおっしゃったではございませんか。ですから名人でいらっしゃるのよ」君尾、やっぱり笑いながらいう。「それはそうとお武家様、なんと思つて杉窪などへ、おいでになったのでございますの？」　高価な衣裳を惜し気もなく、君尾は草へ坐りこんだ。

自然の児

君尾が草へ坐ったので、これもうっかりつり込まれ、広太郎も草へ坐り込んだ。

「ははあそれではもうここが、杉窪の里でございませうかな」

広太郎の方でき返した。

「はい、さようでございませう。盆地をくだれば杉窪の里、ほんの眼の下でございませうの」

「実はな、先ほども申しましたとおり、尋ねる人がありまして、まず手はじめに水戸の方を……といって何もその水戸に、尋ねるお方がいるものと、そう思ったのではございませんが、……つまり、一つにはうさ晴らし、霞ヶ浦の風景でも、探っ

てみようかと存じましてな。松戸の宿まで参りましたところ、眼についたは一つの石標、西、杉窪の里とある。実は以前より杉窪については、耳にしたこともございましたので、こういう場合、出掛けて行き、変った土地を見るもよからうと、それで参ったのでございますよ」

「おやおやさようでございましたか。でも杉窪と申しまして、別に變った土地でもなく、家があつて、人がいて……悪い人だっておりますのよ」

「ほほう、悪人もおりますかな？」

「文三といつて大悪人……」

「ははあ、人殺しでもしましたので？」

「妾を追っかけるのでございますの」

「なるほど、そいつは悪い奴だ」 広太郎愉快に笑つてしまつた。

「でも、いいものもおりますの」

「ははあ、美しい若い衆でも？」

「あの、いいえ、三吉猿」

すると小粋な頬かむり、のみを取つていた三吉猿が、自分の姓名を呼ばれたので、急いで手をとめて振り返つた。そうして存在を示すように、キーキーキーとないたものである。

「これはこれはよい若衆。ははあ三吉と申しますかな」 とも広太郎笑つたものだ。

「お可哀そうでございますわね」 君尾、こんなことをいい出した。「お探しなすつているお京様、まだお目つけになれませんのぞ」

「これは容易に目つかりますまい」

「あの、妾に似ておりますそうぞ」

「下世話にいう瓜二つ」

「では、やっぱり妾のように、お美しい方なのでございますのね」

「ううん」と広太郎面喰らつてしまった。だが益々氣に入つた。——素直でいいな、全くだ。——

「さようさよう、あなたのように、お美しい方でございます」

「そうして妾のようになさうなさい」

——あッ、こいつだけは賛成出来ない——。

「いや、あなたは転婆でござる。もっともそれがよろしいのではあるが。……」

こう率直にいったのが、かえつて君尾には氣に入つたらしい。ホッ、ホッ、ホッ、と例の笑い——明るい笑い声をぶちまけた。

と、すぐ木だまがホッ、ホッ、と返り、それを縫つて、キョッ、キョッ、キョッ、と、ほととぎすの聲が聞こえてきた。「いいなア」と広太郎はうつとりとした。「お京様そっくりのこの娘と、こんなすがすがしい山間で、一緒に暮らしたらどうだろう」

その時君尾がいったものである。

「あの、袴広太郎様、お願いがあるのでございますの。どうぞどうぞ当分の間、むさくるしくはございますが、妾の家に泊まりくだされ、杉窪の里の人たちの、味方となつてはくださいますまいか」

その声には熱があり、訴えるようなところがあった。

武器蔵

袴広太郎と君尾とが、山上で話をしている頃、銅兵衛は武器蔵で部下を指揮し、武器の手入れにふけていた。

「槍が五十筋、弓が百張、ええと太刀が五百振りか。……それから鉄砲が六十挺に、地雷弾が八十個かな。……さあさあ矢尻をとぐがいい、弦を張ったり弦を張ったり。……貝と鉦とは大丈夫かな。……ほぐれぬように柄糸を巻き、刀のさびを落として置け。……二十挺の種ヶ島の筒口に、湿りをつけてはならないぞ。……鞍からあぶみからくつわまで、手落ちがあったら承知しねえ。……籠手すね当てのかずを調べ、野郎どもに渡して置け。……くさりかたびらも大切だ、千切れた所はつづるがいい……たすきの白布頭の鉢金、さあさあ人数だけこしらえろ……」

銅兵衛八方へ指図をする。

武器と武器との触れ合う音、ピンピンとつる鳴りの音。

……出て行く者、はいつて来る者、女は女で立ち働き、男は男で立ち働く。手入れができると片っぱしから、ドンドン外へ持つて出る。要所要所へ配るのであろう。そこから持ち込むのもある。イタミの出来た武器であらう。

「ばかめ、なんだ、その手入れは！」銅兵衛またも叫び出した。「布でふいて油を塗れ！油を塗ったらまたふくのだ。そうだな今度は乾いた布でな。……これこれ馬鹿者、なんということだ。槍の穂先を磨き粉で磨く？そんなべら棒があるものか。やっぱり布だ、布で拭け。さてそれから油をさす、そ

うして二、三時間うっちゃって置く。乾いたところでまた拭くのよ。そういうことを五、六度やる、すると錆なんか落ちてしまう。……さあさあ今度は楯を磨け！とりわけ竹立牌に気をつけろ。それで銃丸を防ぐことが出来る。……巢車の縄をなえ！弓がけ、弓ごての縫い目をしめろ！ああ忙しい忙しい！これでは狂人になりそうだ！さすまた、もじり、棒、まさかり、こういうものだって馬鹿には出来ねえ、出来るだけ手入れをするがいい」

副頭領の楠右衛門、四人の小頭、十人衆、いわゆる家の子郎党が、クルクルクルクルと立ち働く。

蔵内の暑さ、人いきれ、その中に殺気が充ちている。

「ところでおとしあなは掘ったかな？逆茂木をうんとこさこしらえて置け！」またも銅兵衛わめき立てる。「敵は大勢、しかも強い。血煙り矢だまをくぐって来た奴らだ！まごまごするとみな殺しにあうぞ！」

「ナーニ親方、大丈夫だ」誰とも知れず一人がいう。

「うん、そうとも、大丈夫だ」杉窪の銅兵衛すぐ応ずる。「が油断は禁物だ」

「ナーニ、あべこべにみな殺しにしてやる」

「うん、その元気。そいつが大事だ！」

ヨイシヨ、ヨイシヨ、ヨイシヨ、ヨイシヨ、武器を運び出す掛け声だ。ド——ンと遠くで爆発の音！

「えい、間抜けめ、もったいない。地雷弾を一つ落としゃアがった」

カッン、カッンと木を切る音！掩護物を造るため、斧を振るっているのだろう。

なんのための戦闘準備？ 何者がせめて来るのだろうか？

「味方がほしいな。軍師がほしい」銅兵衛口の中でつぶやいている。「おれ一人では手が廻らない」

カパ、カパ、カパと蹄の音！ 誰か物見に行くらしい。

その時バタバタと足音が、武器蔵の方へ走って来た。

意外の客

バタバタと武器蔵へ走って来たのは、ほかならぬ娘の君尾であった。

「お父様！ お父様！」と嬉しそうに、「あの、お客様でございますの、山で目つけたお客様。江戸のお方でお旗本、そして剣道は柳生流、お若くてりりしくて立派な方。霞ヶ浦へおいでの途次、この里の噂をお聞きになり、見物に参られたそうでございますの。客間においででございます。早く早くお逢いなさりませ。助太刀をなされてくださるそうで、ええええ妾がおたのみしましたのよ」こういうとまるで子供のよう

に、銅兵衛の袖を引っ張った。

驚いたのは銅兵衛で、「これこれ娘、どうしたのだ。袖がもげる。まあ待ってくれ」それからちよつと考えたが、「不思議だな、合点がゆかぬ。こんな場合に見知らぬ武士が、戦の助太刀しようなど入り込んで来るとは受け取れない。……楠右衛門どん！」と呼びかけた。

「おい」と副頭領の楠右衛門、五十年輩のたくましい顔を、銅兵衛の方へ振り向ける。

「お前さんはどう思うね？」

「さあ」と眉を顰めたが、「奴らの間者じゃアあるまいかな」「何をいうんだよ、馬鹿楠右衛門！」君尾遠くからぶつ真似をした。「そんな人品とは違うのよ。立派な立派な若殿様。お前の息子の文三なんか、束になったって追ツつきはしない。証拠があるのさ、いい証拠がね。悪人が善人がすぐかぎ出す三吉猿がなついたじゃアないか」

「ほほう」というと楠右衛門、金網窓へ半面を向け、槍の穂先をとぎ出したが、「三吉猿がなつくようなら、なるほど悪人じゃアなさそうですね。……文三、こいつは馬鹿でござす」とするとさつきからそのそばで、弓弦を張っていた当の文三、テレまいことか、頬をふくらませフツと横を向いたものである。

「アツハツハツ」と杉窪の銅兵衛、とりなすように笑い出した。「どうも相変わらず口が悪い。が、こいつも育ちのためさ。素姓は途方もなくいいのだが。……それはそうとそのおさむらいさん、姓名を名乗りはしなかったかな？」

「姓は袴、名は広太郎。こうおっしゃってございますの」

「えッ」というと杉窪銅兵衛、持っていた種ヶ島をほうり出し、何かにさされでもしたように飛び上がった。

「袴広太郎！ ううむ、袴！ や、えらい人がおいでになった！」

「爺つあんおめえ知ってるのか？」けげんそうに楠右衛門が声をかけた。

「知ってる段かい、大知りだ！ 立派な人物！ いい味方だ！」

「ご覧よご覧よ楠右衛門め！ 問者だなんて何をいうんだよ。」

若殿様だよ、思い知るがいい」君尾ピシヤリとヤツつける。「ねえ、お父様楠右衛門は、よっぽど馬鹿でございますねえ」

「そうともそうとも大馬鹿者だ」銅兵衛衣紋を整える。

「文三も馬鹿でございますねえ」

「問題にも何にもなりやアしない。……どれそれではお目にかかろう」

武器蔵を出ると中庭である。それを通ると母屋の縁、廻廊をまがると客間である。細目にふすまを引き開けたが、内の様子をうかがった。間違いない。袴広太郎、旅よそおいで控えている。まず「ご免」と声をかけ、銅兵衛サラリとふすまを開けた。

「袴広太郎殿、しばらくでござった」

振り返った袴広太郎、「おおこれは傀儡師殿！」

「さようで」というと杉窪銅兵衛、ピタリとすわったものである。

敵の真相

広太郎と銅兵衛とのこの会見、銅兵衛にとっても意外であったが、広太郎にとっては一層の意外といわざるを得なかった。「いつもよいところへ現われて、ピタピタ予言をしてくれた、あの不思議な老傀儡師が、ここの主人とは夢のような話だ」——で広太郎手をつかえ、挨拶の言葉をのべようとした。と、銅兵衛とめたものである。

「ああいやいや広太郎殿。お互いの挨拶は抜きとして、早速ながらお願いの筋、なんと聞き届けてはくださるまいかな。

というのはほかでもござらぬ。われら一同大敵を受け、今や困難の立場にあります。でご助力をねがいたいものです。もつとも娘より承れば、すでに承引くだされたとか、事実ならば千万お礼。いかがのものでございましょうな？」

底力のある声である。霸氣充満の態度である。傀儡師時代とは似も似つかぬおもかげ、さながら老英雄である。気合いに押された広太郎、ついつり込まれてのつけからいった。

「よろしゅうござる。恩報じの意味、何事であれ、お味方致す。しかし若輩拙者などが……」

「謙遜ご無用」とまた銅兵衛、片手を上げると抑えつけた。

「たしか剣法は柳生流、据え物切りではご名人。兵法はたしか甲州流、小幡勘兵衛景憲殿の、印可を受けておられる筈。

義心厚く熱情家。もつとも時々憂鬱になられ、ずいぶんムダ使いもなされるし、場合によっては毒舌もふるわれ、またしやれなども仰せられる。お家は豪富、ご次男の筈、何から何まで存じております。アツハツハツハツ、どうでござる」

これには広太郎気味を悪くした。自分より自分のことを知っている。いったいどうしたというのだろう？ ぼう然とならざるを得なかった。それを見て取った杉窪銅兵衛、にわかに調子をおとしたが、

「いやナニ、これには理由がござる。非常に簡単な理由がな。一口に申せば隅田において、島原城之介と斬り合われて以来、拙者不断に貴殿の身辺を、つけ廻して研究いたしましたのでござる」ここでニッコリ微笑したが、にわかに穏やかな顔となり、好々爺のおもかげさえ現わした。

「しかし」というとキツとなった。「決してご貴殿お一人を、

つけ廻していたのではございませぬ。天草時行、島原城之介、イスラエルのお町、由井正雪、すなわち巻軸に関係ある、あらゆる人達の身辺を、つけ廻していたのでございますよ。さてその理由は……」とここでまた、やさしい顔に一変したが、「その巻軸を拙者の手に、奪い取ろうがためでござった。……そうして幸いにも巻軸は、今や拙者の手中にござる。しかるに……」という銅兵衛の顔、恐怖の情を現わした。と、ゴックリとつばを飲む。「しかるに天草時行一味、近日大挙してここへせめ込み、巻軸を奪い返そうといたす！ きやつ極悪、佞奸の人物。しかも恐ろしい兵法家！ 一味は兇暴、命知らず。……で、お助太刀を願うのでござる」

はじめて敵の何者かを、銅兵衛うち明けたものである。

広太郎自身からいう時も、お京様を一時監禁した、天草時行そのものは、まさしく敵といってよかった。そいつを相手に戦うことは、むしろ痛快なことであった。「よし一番戦つてやろう」決心のほぞはかためたが、気にかかるは巻軸である。「さてご老人、助太刀の儀は、拙者誓ってお引き受け致す。ついては多勢の人々が、そうまであらそう巻軸なるものの、内身はいったいなんでござるな？」思い切つてきいたものである。

第二の恋

巻軸の内容はなんであるか？ こう広太郎にきかれた時、銅兵衛の顔は充血した。しかし結局語らなかつた。

「九州島原、原の城、落城の前に持ち出された、絶対秘密の

巻軸でござる。巻軸、城より持ち出されたため、原の城は落ちたのでござる」わずかにこういったばかりである。

もうこれ以上は聞かれぬ。断念をした広太郎、銅兵衛の屋敷にとどまって、蘊蓄を傾け防戦準備、それに専心することにした。

一日二日たつうちに、腑に落ちないことが出来て来た。君尾に対する銅兵衛の態度が、なんとなく、ピツタリ来ないことであつた。一方限りなく愛しながら、一方恐ろしく尊敬している。主人の娘をあずかつた家来というような態度がある。が、まずそれはよいとして、副頭領楠右衛門のせがれ、文三という若者が、君尾をつけまわす一事だけは、広太郎に我慢出来なかつた。で自然強くあたる。すると文三も強くあたる。

お京を金弥と争つたように、ここでは君尾を中心にして、邪心深そうな文三と争わなければならなかつた。しかしお京が金弥よりも、広太郎を愛したそれと同じく、君尾は文三を軽蔑し、広太郎に愛の眼を注いだ。まず安心というものである。「おれはお京様を忘れたのではない。お京様を愛しておればこそ、お京様そっくりのこの娘を、こんなに愛し恋しているのだ」これが広太郎の心持ちであつた。

君尾にとっては広太郎は、はじめての恋しい男であつた。

里の若者のガサツとちがひ、なんと広太郎は優秀なんだろう！ 山上ではじめてあつた時から、君尾は広太郎に魅せられた。だがおおかたの処女なるものが、恋を感じたその場合、物思わしくなるのと違い、君尾はいよいよ快活になった。で、広太郎と三吉猿、恋しい男と可愛い動物、二人をつれて駈け廻つた。

一方広太郎は里人の間に、信頼と尊敬とを博していた。親方に忠義な里人が、その親方の氣に入っている、広太郎を氣に入らない筈がない。広太郎と君尾の恋についても、里人は好感を持っていた。たまらないのは文三である。で、いつも機嫌悪く、広太郎と君尾の挙動ばかりを、白い眼をしてネメ廻した。

武備はドンドンのはかどった。さあいつでもやって来い！

杉窪の里は活氣に充ち、里人は腕をさすったりした。

さてある日のことである。江戸へ出して置いた物見の一人が、敵の行動を知らせて来た。

「巴御殿からチラホラと、天草一味の連中が、水戸街道へ入り込みましたぜ」

「敵の同勢約五十」これが第二の報告であつた。すると銅兵衛はこういった。

「いやいやもつと来るだろう」

はたして第三の報告には「敵の同勢八十」とあつた。

「いやいやもつと来るだろう」これが銅兵衛の意見である。

はたして第四の報告には「敵勢大略百人」とあつた。

「もうそれくらいでとどめたいものだ」こう銅兵衛はつぶやいた。

しかしその次の報告には「敵の同勢百五十人」とあつた。

「ううむ、随分やって来るな」

「石標のところから真っ直ぐに、押しのぼって来る」という知らせがあつた。

「正面から来るな、大胆至極、自信がなければ出来ないことだ。天草らしいやり方だ」銅兵衛不安そうにつぶやいた。

と、果然驚くべき、一つの知らせがやって来た。

一つの人形

なんだろう驚くべき知らせとは？

「天草一味と連絡のない、一百人の同勢が、二挺の駕籠を引っ包み、草加宿の方面から、上がって来る」というのである。

「不思議だなあ、何者だろう？」

「巻軸取りの連中は、天草以外にも沢山あるが、傀儡仕込みの火術をもって、天草一味を混乱させ、ドサクサまぎれに奪い取ったことを、知っているものはない筈だ。ではやはりその同勢は、天草一味の別動隊ではないかな。どっちにしても困ったことだ。味方は一切で三百人、女子供と老人を抜かせば、戦闘員は百人しかない。地の利を占めているとはいへ、二百五十人を相手にしては、ちよつとどうも防ぎかねる」銅兵衛はますます不安そうにした。

「広太郎殿どうしたものでござろう？」相談をかけたものである。

「草加の方から来るといえば、里の背面を襲うものとみえます。うっちゃって置くことは出来すまい。といって、人数を二手にわけては、両方とも守備が薄くなります。で背面へは地雷を仕掛け、点火の人数を二、三人だけ、配置することに致しましょう」これが広太郎の意見であつた。

「これはいかにもそれがよからう」——で地雷弾を埋めることにした。

天草一味の百五十人が、盆地の頂き、東南の地点、柏峠

に陣を張ったと、そういう報告のあったのは、広太郎が里へやって来てから、十五日を経た頃であった。戦機いよいよ熟したらしい。そこで広太郎の意見として、女子供や老人を、一人残らず一まとめにし、銅兵衛の屋敷へ籠らせることにした。女たちにはドンドン焚出しをさせ、子供達には矢だまを運ばせ、老人達には女子供を、監督させることにした。そうして屈強の若者だけを、敵の正面へ立ちむかわせ、空き家になった家を、掩護物として戦うことにきめた。そうして広太郎は馬に乗り、真っ先に出て指揮をしよう、こういうことに一決した。副頭領楠右衛門は、旗本ともいうべき屋敷にあって、銅兵衛と君尾を守ることにし、文三が地雷のかかりとなった。さあいつでもやって来い！ 士気はまさに横溢であった。

その十五日目の日もくれて、二十日の月がかかったころ、一つの人影が人目を忍ぶように、盆地の上へ上がって行った。上がりきった所は原である。見ると遙かの林の中から、篝火の光がもれて来た。

「よし」というとその人影、かがり火を目がけて走り出した。と灌木の茂みから、二、三人の人影が現われた。

「これ、貴様、何者だ」 抜き身突きつけて取り巻いた。

「へい、私は里の者で」

「うむ、そうか、どこへ行く？」

「天草殿に逢いたいの」

「ははあ貴様、間者だな」

「いいえそうじゃアございません、天草殿にお目にかかり、お話したいことがございますので。どうぞ陣所までお連れな

すって。へい、大丈夫でございます、刃物一本持っています

「そうか」というと二、三人の者、何か互いに耳打ちをしたが、

「よろしい、それでは案内して進ぜる」

二人の武士が左右につき、篝火の方へ歩きだした。

篝火に近づくに従って、白い物が見えてきた。張り廻された陣幕である。

見えぬ敵

陣幕の中央に床几がある。天草時行が腰かけている。なんの武装もしていない。例によってきたない爺いである。さけたみつ口から歯が見える。左手にいるのは築土新吾、鎖かたびら、籠手脛当、陣羽織をはおっている。その外には誰もいない。ひどくサツパリした陣営である。槍が一本立てかけてある。そのほかには武器もない。いやいや一個恐ろしいものが、陣幕の隅に据えてある。スペイン製の精巧な野砲。陣幕のそこには二頭の馬が、バリバリ草を食っている。

パチパチと篝火の燃える音、時々夜鳥のはばたく音、百五十人の同勢は、いったいどこにいるのだろうか？ 出切ってしまったに相違ない。

「どうもいけないよ。浮世の連中、ひどく物事を信じたがってな」話の続きに相違ない。天草時行さえない調子で、忙中閑ありというように、こんな事をいい出した。「孫子呉子、六韜三略、などというから口くなくさは出来ない。すべて前人

の作ったものは、認めないことにするがいい。認めるからこそ議論が起こる。議論というものは花が咲く。花ばかり論じるようになる。自然根のことを忘れてしまう。地面に足がつかなくなる。そこで地上三尺生さ。『夜間の突撃には喊声（かんせい）を上げず』などということがいわれているが、場合によっては喊声もあげるさ。ナーニおれの筆法からいけば、『夜間の突撃には喊声を上げず』だからおれは喊声を上げると、こうアマノジャクにいききたいのさ。『土煙（どえん）の高くして淡きものは、これ騎兵の行進なり』などということが書いてあるが、これだって実際のいかげんなものさ。大鹿の群れが走って行つたって、そういう徴候は見られるんだからなあ。……それはそうと島原一揆では、おれも随分働いたものさ」みつ口から齒茎をほころばせた。

「ええやはり天草殿には、天帝をお信じなされた結果、原の城へお籠（こも）りなされたので？」築土新吾、慇懃（いんぎん）にきく。

「ぼろい儲けはあるまいかな？　こう思つて入城したつてものさ。神様商売もうまくやると、お賽銭（さいせん）のあがりが大きいかなあ。ところがどうも島原では、思うようにはいかなかったよ」

「それはまたなぜでございましたな？」

「一口にいうと信者ばかり多くて、不信心家が少なかったからさ」

「面白いお言葉でございますな」

「面白いものか、ひどい目にあったよ。だつてお前そうじゃアないか。一切物は信じてはいけない、それだのにお前物もあろうに、神様なんかを信じるんだからなあ。戦争に負ける

のはあたりまえだよ」

「しかし神様というものは、信じるものではないでしょうか？」

築土新吾は、不思議そうにきく。

「神様の方からいえばだね、まさしくお前のいうとおりだよ。だが人間からいう時は、信じるような顔をして、本当のところは利用するんだなあ。……待てよ？」というと天草時行、床几から離れて槍をとり、陣幕をくぐつてそとへ出た。

二十日の月がかかっている。森も林も灌木も、月光に浸つてぬれている。戦いの前の静けさである。槍を地につき、槍の柄へ、額（ひたい）をおツつけた天草時行、じつと何かを聞き澄ました。

「気になるなあ、どうも変だ。……あの物音！　なんだろう？」

杉窪の里とは反対の方へ、聞き耳を立てたものである。が、いったいどうしたんだ、なんにも音などは聞こえないではないか。しかし天草には聞こえるとみえ、槍を取り直すと引きしごき、見えない敵へ突っかけた。「カーッ」とかけた気合いである。

裏切り者

見えない敵へ気合いをかけ、さて引返して来た天草時行、床几に腰かけると考え込んだ。

「どうなされました、天草殿？」築土新吾、不思議そうにきいた。

「うむ」というと天草時行、皺顔（しわがは）を一層しわにしたが、「どう

もな、ちょっと変なのだ。だが恐らく空耳だろう。いくさ場では色々かわったことがある。で、カーツと気合いをかけ、悪魔ッ払いをやったッてもものさ。だがもしこれでも聞こえるようなら備えの立て方をかえざるまい。……それはそうと、神様のことだが、島原一揆の連中には、森宗意もりそういだの蘆田忠左衛門だの、相当の人物がいたんだが、どうもね、みんな信心家で、ハレルヤ、ハレルヤ、ゼウス、ゼウス、などと変てこな呪文じゅもんを唱え、神様へ頭をさげたので、とうとういくさに負けッちゃった。なんにでも頭をさげちゃアいけねえ。さげたとたんに退治られる。神様なんかにさえ退治られる奴らだ。松平伊豆まつだいらいずにかなうものか。松平伊豆ときた日には、神様へ塩を振りかけて、取って食おうというえら者だからなあ。術数権謀じゆんぽんぼうの化け物だよ。ああいう奴こそ人間だよ。……で、おれは見切りをつけ、原の城から抜け出したってものさ。入城したから退城した。ちっとも不思議はないじゃアないか。はいったが最後、出られねえような奴は、とても浮世では出世しないなあ」

すると築土は微笑したが、「その砌みぎりたしか天草殿には、巻軸をお持ち出しなされた由で」

「オイオイ築土、何をいう。持ち出したなんて、人間きが悪い。ふんだくって来たところいいねえ。すべて物事というものは、下等な言葉でいうがいい。万事その方がいきいきして見える。上品な言葉を使ったが最後、物事精彩を失ってしまふ。……そうだよ巻軸をふんだくって来たよ。ところがどうも驚いたことには、おれより一層素早い奴があつて、いつの間にか一本持ち出してしまった。二本の巻軸を合わせないこ

とには、秘密の糸口はわからないんだからなあ。これにはおれも参ってしまつたよ」

「その素早い人間とは、杉窪の銅兵衛でございましょうな？」

「そうだよそうだよ銅兵衛だよ。きやつも一個の人傑だが、その上に立っている人間が、すばらしくえらい人物だな」

「ははあ何者でございますか？」

「葵のご紋だ、葵のご紋だ」

その時であつた、陣幕の外から、「天草殿へ申し上げます」
こういう声が聞こえてきた。

「はいはい何用でござんすかえ？」天草時行気軽に答える。

「文三と申す若者、密々に言上致したいと、里を抜け出して参りましてござるが」

「ほほう、さようで。それは結構。文三さんとやら、さあおはいり」

声に応じて陣幕をかがけ、恐る恐る姿をあらわしたのは、さつき盆地を駈けあがり、天草の部下にとらえられた男、楠右衛門の子の文三であつた。

「ようおいで、今晚は。築土よ築土よ、円座をおやり。さあさあ文三さんお坐りなすって。……さア何用得参れらたな？」

などと正面から切り出すと、ちといいにくうござろうな。開戦間際に味方を出し抜き、こっそり敵陣へ来られたからには、内応と見当をつけるが当然。よろしゅうござる。内応なされ。いづれござろうな、交換条件が。金かな、それとも女かな？ 二つの外にはござるまい。人間の欲望押しつめると、二つの外には出ませんからなあ」

聞こえる物音

内応であろう？ 交換条件は？ こう天草にいい出されて、文三ハナから度胆^{どたん}を抜かれた。しかしこやつもシレモノである。のっけから条件を切り出した。

「女がほしいんでございますよ」

「ああさようで、ご婦人をな。で、どういうご身分の方で？」
天草時行依然として軽い。

「親方銅兵衛の一人娘、君尾という子でございます」

「ははあなるほど、君尾ちゃん。……どうなさろうとおっしゃるので？」

「いずれ乱軍になりましょう。ドサクサまぎれに引っさらい、逃げて行きたいんでございますよ。あなたの陣中へ飛び込みます。その時お見のがしを願いたいものです」

「たいへん簡単で、いと易い^{やす}こと。承知しました。見逃がしましう。で他国でむつまじく、一緒におくらしなさいまし。

……ところで内応の方法は？」ピンと天草ひきしまった。

「盆地の裏手、屋敷の背後、そこが手薄でございます。ただし地雷が張つてあるので、幸い私がその係り、火口をしめして置きましょう。破裂しっことはございません。そこからおせめなさいまし」

「ははあ」というと天草時行、トロトロトロトロと両眼を、硫黄火^{いおうび}のように輝かせた。まるで妖精の眼^{まなこ}である。が、そいつがポツと消えると、トボケた爺さんに一変した。「結構な内応、満足でござんす。しかし」というと天草の眼、またもや

硫黄火をたき出したが、「よもやペテンではありませんまいな！
もしもペテンであろうものなら、おのれのこがれる君尾とやら、この時行がひっさうぞよ！」ヌツと立ったが姦雄^{かんゆう}の本性、瞬間に現われて、まるで鬼だ。

が、ヒヨロヒヨロと床几へ腰かけ、ホッホッホッホッとなのように笑った。「いや信じます、信じます。なんのあなたがペテン師なのか。人相に出ています人相にな。よい人相、善人善人。で、取り引きもこれで終った。ではお別れと致そうかな。……ああそれからもう一つこれは付録としておたずねしたい。ええと最近に銅兵衛さんが、大事にしている一つの品物、箱か竹づっぱかそんなような物が、たしかにあると存じますがな、どの辺にしまっておりましょうな？」何気ない様子にカマをかけた。うっかり乗った裏切り者、文三ベラベラしゃべってしまった。

「肌身放さず親方が、持っているようでございますよ」

「で、今夜は銅兵衛さん、どこらあたりにおいでかな？」

「武器蔵か本陣でございます」

「では文三さん、おさらばおさらば」

陣幕をくぐって文三が、そとへ出たのを見きわめると、天草時行突っ立った。

「築土築土いくさは勝ちだ！ 伏せた五十人を引き払い、貴様そいつを引率し、裏手へまわって乱入しろ！ 本陣へだ、武器蔵へだ！ 残った百人で正面攻撃、大石大木を投げおろし、弓鉄砲で打ちすくめろ！ むやみと喊声^{かんせい}を上げるのだ！ 牽制^{けんせい}するのだ、敵勢をな！ それから槍^{やり}だ！ 突き崩すがいい！ 手に余ったら火をかけろ！ 分捕^{ぶんと}り功名勝手次第。

この里には別嬪も「#「別嬪」はママ」いる、一人ずつ嬪にするがいい。ため込んだ金もある筈だ、洗いざらいふんだくってしまえ！　まず行って下知を伝え、その足ですぐに裏手へ廻れ！」

「はっ」というと築土新吾、陣羽織の袖をひらめかし、幕をくぐって飛び出した。

だが不思議にも天草時行、さも不安らしく渋面を作った。

「聞こえる聞こえる変な物音が！」槍を握ると陣幕から、ヒラリとこれも飛び出した。

連判状

陣幕から飛び出した天草時行、槍を横たえると地上へ寝、土へ耳をおっつけた。

「約半里、東北にあたり、人数にして百人前後、まさしくこっちへのぼって来る。不思議だなあ。何者だろう？」じつと聞きすましたものである。「どっちみちうっちゃって置かれないう、そーだー」というと飛びあがり、陣幕の中へ駆け込んだ。

引き出したのはスペイン製の野砲、ガラガラと東北へ押し向けた。

「さあ来てみる、防いでみせる！　十発も放したらみな殺しだ！」

月光にキラキラ輝くのは、上向いた野砲の筒口である。槓桿にかけた天草の手が、かすかにかすかにふるえるのは、強敵と睨んだがためだろう？　だが何にも聞こえないではないか！

いやさすがは時行である。その聴覚には狂いがなかった。

ここは天草の陣営から、半里離れた峠道、今一隊の異風行列が、二挺の駕籠を前後に包み、十本のたいまつで道を照らし、肅々として歩いて来た。そのかずおよそ二百人、だが扮装は別々である。儒者風の者、鷹匠風の者、卜筮者風の者、僧体の者、神主風の者、鍛冶風の者、瓦工、陶工、人相見、石工、仏工、医師風の者、しかしいずれも一様に、天狗の面をかぶっている。ある者は槍を持ち、ある者は弓を持ち、ある者は鉄砲をかついでいる。豪奢を極めた駕籠である。その一挺は女駕籠。と行く手に森があった。行列がそこへさしかかった時、駕籠の中から声がした。

「この辺でよからう。駕籠とめい！」

同時に二挺の駕籠が下り、タラタラと同居並んだ。カタンという戸の開く音、一挺の駕籠から現われたのは、緋の衣にときん襦袢懸け、羽団扇を持った人物で、天狗の面をかぶっている。すなわち僧正天狗である。据えられた床几に腰を下ろすと、まず悠然と見廻した。

「江戸を離れる数里の山間、おそらくあたりに人もあるまい。連判状を読み上げい」重々しい声でいったものである。

「はっ」というと一人の天狗、髪は総髪、法眼袴、威風あたりを払うのが、スルスルと前へ進み出たが、懷中から巻物を取り出した。

と、スッ——と上へ持ち上げ、徐々にキリキリと巻きほぐす。と、読み出したものである。

「それ人は天地の精、人ありて万物備わる。この上に立つて

支配するもの、みかどにあらずんばあるべからず。わが日東扶桑国、いにしえより上帝臨幸し、教えを垂れ、神を敬い、下を恵み、皇統連綿、無窮に伝え、国は神国、仁義堂々、諸域にまさる。中古代わって政をとるもの、源家以来將軍と称す。その威年々盛んにして、あえて朝威を傾けんとす。これ尊王の大義を忘れ、人臣の礼を欠きたるもの。しかも驕慢四民を悩まし、下苛政を恨まざるなし。ここにわれら義を結び、盟を作つて義旗をひるがえし、武権をくじき皇威を揚げ、政事を神代に返さんとす」

読み終わると一礼し、僧正天狗の膝もとへ、開いたままの連判状、つと押しやったものである。

「盟主とたのみ奉るは、紀伊大納言頼宣卿！」

「うむ」というと僧正天狗、袖から錦の袋を出した。「牧野兵庫、これをおせ！」

進み出たのは儒者風の天狗、袋を受け取ると印を出した。

「虎の御印、すわりましたぞー！」

声に応じて一百人、一同額を地につけた。

天狗舞い

頼宣卿の虎の御印、連判状におされるや、法眼袴の総髪为天狗、ふたたび連判状を取り上げた。

「指揮するもの由井の正雪」こういうと自身頭を下げた。「江戸表は佐原重兵衛」

声に応じ、頭を上げたのは、医師姿の天狗である。

「大坂表は金井半兵衛」

すると鷹匠に身をやつした、一人の天狗が一礼した。

「京都表は熊谷三郎兵衛」

鍛冶風の天狗一礼する。

「元帥は柴田三郎兵衛」

陶工風の天狗一礼する。

「柳宮放火、將軍脱出、丸橋忠弥、あずかるべきもの」

神主風に身をやつした、一人の天狗が一礼する。

「名古屋表は坪内作馬」

——と、僧体の一人の天狗、これも謹んで一礼する。

「大將衆といたしましては、吉田初右衛門、加藤市郎兵衛、鵜野九郎右衛門、秦式部、桜井三右衛門、石橋源右衛門、有竹作左衛門、四宮隼人、永井兵左衛門、戸次与左衛門、以下そのかず一百人、血判いたしましたでございます」

朗々たる音声、それに従い、シタシタと頭を下げたものである。

すなわち慶安義士の一党、頼宣卿を盟主に奉じ、改めて誓いを立てたのである。

と、頼宣、声をかけた。「正雪舞え！ 予が歌う！」

「はっ」というと立ちあがり、法眼袴の一天狗、由井の正雪踊りだした。

「天王寺の妖靈星！」羽団扇で膝をたたきながら、僧正天狗、頼宣卿、さも豪壮に歌いだした。

それに合わせて一百人、「妖靈星！ 妖靈星！」

「天王寺の妖靈星！ 見ずや見ずや妖靈星！ 天下乱るる前兆なり！」

「妖靈星！ 妖靈星！」一百人が合唱する。

戦の勝負は？

ドカドカ燃えるはたいまつだ。キラキラ光るは森の木々。ザワザワ渡るは深夜の風だ。物すさまじい光景の中、幕府の権勢を空しゅうし、踊り狂う天狗舞い！ 足裏を見せ、身を斜めに、キリキリ廻ったとたんである。風が変わったか遙か山上、杉窪の里の方角から、喊声剣戟の音がした。

「踊りやめい！」と頼宣卿。「誰かある。物見致せ！」

「はっ」というと神主風、一人の天狗が飛び出した。丸橋忠弥盛幸である。灌木を渡る風のように、サーツとばかりに駆け出した。

あとは寂然と声もない。

と、またもや風に連れ、鉄砲の音が聞こえてきた。

「第二の物見。柴田参れ！」

正雪声をかけた時、馳せ返って来た丸橋忠弥、片膝を敷くと声はずませ、

「杉窪の里を追っ取り巻き、何者か攻め立ております。窪地の頂きに野砲一門、こなたに筒口を向けまして……」

「よし！」と頼宣みなまで聞かない。「正雪指揮！ 里を助けろ！」

「承る！」と走り出した。

「五十人は続け！ あとはご警護！」

二手に別れた一百人、五十人が後を追う。

「姫よ、姫よ！」と頼宣卿、女駕籠へ声をかけた。

スツと駕籠から現われたのは、小松原の娘お京である。

駕籠から現われた一人の娘、それはお京に相違なかったが、刺繍したうちかけ、錦の帯、そのよそおいは姫君である。

と、ドーンと山上から、響き渡った野砲の音！ 天草時行がスペイン砲を、助太刀に向かった正雪の軍へ、ぶっ放したに相違ない。

お京ヨロヨロとよろめいたが、

「お父上様、お姉様は!?」

「うむ」というと紀州頼宣、お京を片手でつとささえた。「そちにとつてはふた児の姉、君尾の身の上心もとない。駕籠は危険、矢弾のマト。杉窪まではわずか半里。そちも紀州頼宣の娘、勇を鼓して徒歩で行け！」

「早くお逢いしとう存じます！ 一里でも二里でも三里でも、たとえ十里でもひろいます！」お京シャンと立ち上がる。

二発目の野砲、またもとどろき、ワーツという関の声！ 正雪の一党斬り込んだらしい。

「さあ進め！ 押し寄せろ！」頼宣の下知に五十人、頼宣とお京を真ん丸に包み、たいまつで道を振り照らし、頂上さして押しのぼった。

森を抜けると灌木の原。そこをよぎると草の斜面。頂上に近づくに従って、叫喚の声、剣戟の音、鉄砲の音が近まさり、手に取るように聞こえてくる。

「意外だ意外だ。どうしたことだ」頼宣走りながらうめくようにいう。

「いったい誰だ。攻めている奴は！ ああ銅兵衛を殺したくない！ あれは旧臣、忠義者だった！ ……お京お京！」とその手を引き、「ゆえあってそちと君尾とは、生まれ落ちるから手もとに置けず、残念ながら嬰兒のうちから、一人は銅兵衛、一人は平左衛門へ託して傳育させたのだが、逢わざるこゝと十数年！ ……兵庫兵庫！」と兵庫を呼ぶ。「そちの献策で小松原家から京姫を取り寄せはしたものの、どうやらこいつは失敗らしいぞ！ 銅兵衛を訪ねて君尾と逢い、親子姉妹のなりのをしよう、この計画も失敗らしいぞ！ 君尾も死ぬ銅兵衛も死ぬ！ 予感がするぞ！ そんな予感が！」

「大丈夫でございます。大丈夫！」頼宣に引き添った牧野兵庫、「銅兵衛殿はあれほどの豪勇、めったに負けはしますまい」「いやいや、それはわからない！ 君尾はどうだろう？ 姫はどうだろう？」

「銅兵衛殿の息のあるかぎり、君尾姫にはご安泰。見越しをつけるべきかと存ぜられます」

「ともかくも急げ、のっ立てろ！」

森があつて森を出た。と、カーツと火の光！ 天を染めて真っ赤である。

「や、火事だ！ 火をかけたな！ 里が焼かれる！ 牧野、牧野、姫を背負え！ 京姫を背負え！」

ドツと五十人駆け上がった。破壊された鉄砲、裂かれた陣幕、天草時行の陣営があつたが、正雪一味に破られたとみえる。そこをトツ走ると盆地の縁、見下ろせば一面火の海だ！ 子供の泣き声、女の悲鳴、剣戟の音、ガラガラガラ、建物の崩れて落ちる音！ 火の底から聞こえてくる。渦巻きあが

る黒煙り！ その中を駆けめぐる無数の人馬！ と、一つの人影が、盆地の斜面を駆け上がった。来た。

「何者？」と叫んだのは牧野兵庫。

「丸橋忠弥」と折り敷いた。槍の柄が血のりでぬれている。

「いくさの勝負？ 敵は何者？ 銅兵衛はどうした？ 君尾はどうした？」頼宣卿たたみかけた。

山の小父さん

「残念！」と忠弥まず叫んだ。「島原の残党天草時行。こやつが敵にござります！ 味方に裏切る者があつて、伏せた地雷が役に立たず、そこを目がけて裏手より、敵ムラムラと乱入し、一挙に本陣武器蔵をつき、銅兵衛殿には鉄砲にあたり…」

「おっ！」と頼宣こぶしを振った。「ううむ銅兵衛やられたか！」

「氣息奄々、断末魔！」

「姫はどうした、君尾はどうした!？」

「文三と申す裏切り者、もったいなくもかどわかし！」

「残念！」と頼宣、おどりが上った。

「ただし袴広太郎という義士、追っかけてゆきましたと申すこと」

「銅兵衛に逢いたい！ のしくだせ！ 槍をもて！ さあ続け！」

「殿！」と兵庫、さえぎった。「千金の御身、かかる場合に！」「だまれ！」と槍をひっ抱え、「京姫！ 京姫！ そちもつづ

け！ 修羅の戦場！ 一度は見ておけ！」

サ——ッと盆地を駈け下りた。

後追っつけた五十人、頼宣卿を真ん中に、火焰をくぐって突き進む。降り来る火の粉、渦巻く煙り、それを開いて異風天狗、武器蔵の方へひた走る。敵はおおかた散ったらしい。切り込んでくる者もない。

屋敷をめぐると一個の建物、ここばかりは燃えていない。すなわち本陣武器蔵である。

床 上に横たわった杉窪の銅兵衛、胸の緋帶唐紅だ。

走り込んだ紀州頼宣、天狗の面をかなぐりすてると、

「銅兵衛！」と呼んで頭をかかえた。「氣を確かに！ 頼宣であるぞ！」

銅兵衛がすかに眼をあけたが、

「おっ、お館様……もったい至極！ ……殿、殿、姫君を奪われしました！ ……申し訳……申し訳……ござりませぬ」眼を閉じガツクリ項垂れたが、謔言のようにつぶやいたのは、「取られた……取られた……二本の巻軸……まだ大丈夫だ、しっかりたのむ……将右衛門どん、しっかりたのむ！」

将右衛門どん、とは何だろう？ しかし鉄砲にあたって以来、絶えず叫んでいる言葉であって、君尾を取り返しに追っかけて行った、広太郎もこの言葉を聞いていた。

ふたたび眼を開かぬ杉窪銅兵衛、そのまま息が絶えてしまった。

ちょうどこの頃のことである。杉窪盆地から西南の山路、ふもとへ下れば草加宿となる。そのウネウネとした山路を、

杉窪の方へ上ってゆく、一個不思議な人物があった。二十日の月に照らされて、一匹の白布がノビノビと、地上から空へ引き上げられたようだ。ジャラーンという鉄杖の音！ 修験者島原城之介である。

ブツブツ口小言をいつている。

「ヤキが廻ったね、このおれも。玉は取られる鳥には逃げられる。憐れをとどめたというものさ……たしかにこっちへ来た筈だが、どんなことがあってもとツつかまえないけりやならねえ。……それはそうとどうしたんだ！ 空が真ッ赤に焼けていらあ。ははあさては山火事だな」

そのおりからである。山上からカパカパとひづめの音、この坂道を乗りおろして来る。

「火事の知らせかな。それにしても、杣や炭焼きではなさそうだ。馬術に達した奴らしい」

つぶやいて窺う眼の先へ、木立むら葉をヌツとわけ、乗って来て来た一騎の武者、

「どけ、あぶねえ！」としわがれ声！

「や、手前は！」城之介、ピューと鉄杖を横へ振った。

敵の片腕

島原城之介力をこめ、ピューッと鉄杖を横へ振ったが、払い落とすことはできなかった。

馬上の人物手綱をしぼり、まずもって馬の両脚を、ピンと棹立てたものである。流れた鉄杖、手もとへ引きつけ、ふたたびないだ一髪の間、ヤツとかがった「責馬」の声、パッ

と向こうへのり越した。

「待て！ 天草！」と城之介、追いつがるのを馬上の武士、振り返ったが哄笑した。

「ご苦労！ 島原！ また逢おう！」

つぶてを恐れたためだろう。前輪にピッタリ食ツつくと、パツ、パツ、パツ、パツ、パツ、ふもとをさして馳せくだった。

ぼんやり突つ立った島原城之介、「天草時行とは驚いたなあ」まずもらしたものである。

「一体全体なんのために、こんなところにいたのだろう？ あいつのことだ。いずれ何か、悪事をたくらんでいたのだろうが」

首をかしげたが見当がつかない。

「が、マアそれはどうでもいい。よくねえのは逃げた鳥だ。ほんとにほんとにどこへ行きおったかな」

山骨へ鉄杖をジャラーンと突き、二足三足歩きかけた時、
「またもや山上からひづめの音！」

「天草殿！ 天草殿！ そう急がれてはかなわな。お待ちください。お早いことで」呼びかける声が聞こえてきた。

「ふふん、天草の一味だな。今度こそのがさぬ。見ていやアがれ」つと城之介木かげへ隠れ、鉄杖を構えて窺った。

それとも感づかぬ武者一騎、手綱をゆるめ、身を乗り出し、ムラ葉を抜いて現われた。飛び出した城之介声もかけず、鮮やか鮮やか棒の手だ、「搔手」というやつ、払いあげた。ワツという悲鳴、ころがり落ちると、両手を上げて頭の鉢、かかえたまんまで動かない。逸走する馬に眼もくれず、氣勢に乗

った城之介、振りあげた鉄杖で、も一つみっしり脳天を食らわせた。と、グーッとうめく声、左右へ両手をひろげると見るや、ヌーッと身体を伸ばしてしまった。

「脆えものだ」とつぶやきながら、城之介は死骸をのぞき込んだ。

「口から鼻から血が吹いていらあ。お痛からう痛からう。可哀そうだなあ。南無阿弥陀仏……やっ！」という胸を張った。「ほほう、こいつ、築土新吾だわい」愉快そうにゲラゲラ笑い出した。「そうかそうか新吾だったのか。いい気味いい気味、ざまア見やがれ。これでかたきの片腕を、たたっ斬つてやったというものだ。……が、いよいよおかしいなあ。こいつらいったいこくらあたりで、何をたくらんでいたのだろう？」また考えたがわからない。「死骸があつてはちょっと面倒。とびや鳥につつかせても、あの世で成仏しにくからう。谷へ蹴込んで水葬礼、浮かべ浮かべ、海で浮かべ」

谷間を目がけて、片足上げ、ドツと蹴落とした。その拍子に、新吾の死骸の懷中から、小長い物がころび出て、コロコロと草間へ隠れたのを、島原城之介見のがしてしまった。

眼をあげれば山上の空、色を加えていよいよ赤い。

ジャラーンと鉄杖の音を立て、一歩踏み出した時である。

「誰か来てくださいヨ！ 助けてくださいヨ！」行く手から女の悲鳴がした。

「お町じゃアねえかな？」と城之介、ギョツとして耳を引っ立てた。

「助けてくださいヨ！ 誰か……誰か……」
プツリ声の切れたのは、口をふさがれたに相違ない。

「お町じゃねえかな？ お町じゃねえかな？」グイと鉄杖をかい込んだ。

一人へ五人

グイと鉄杖をかい込んだ時、

「文三、文三、何をするんだヨー。人攫いめー かどわかしめ！ 助けてくださいヨー、助けてくださいヨー」またも女の悲鳴がした。

「ははん、なんだ。お町ではないのか」安心をした城之介、かい込んだ鉄杖をおろしてしまった。

「お町でなければおれは知らんよ。どうやらこの辺の若い衆が、別嬪^{べっぴん}さんをかどわかすのらしい。よからう、うんとかどわかすがいい。かどわかしてよいものだ。おれなんかもチヨイチヨイやる、チヨイチヨイどころかノベツにやる。『イスラエルの神に、え、捧げようぞ！』などというと別嬪さんたち、コロコロコロコロたばになって、かどわかされに来るんだからなあ。いや全く面白い。もしもこいつがあべこべに、女が男をかどわかしているなら、飛び込んで行って助けるんだが、そうでないんだからおれは知らんよ。どうして浮世の女さん達は、男なんかよりウント強い。お町なんかがいい例だ。まるっきりおれをおもちやにしている。色目を使っておれをたらし、巻軸を巻きあげるとキツクなり、指一本さわらせやがらねえ。あげくの果てが飛んでしまった、それっきりにしよウツていうんだからなあ。全くもって苦手だよ。ところがそういう苦手に限って、また恋しいときたものだ。不自由だね、

この浮世は。ところが一旦退治してしまうと、女というものはおとなしくなくなる。あべこべに男を追っかけ廻す。すると今度は男の方で、『助けてくださいヨー、助けてくださいヨー』こういつて逃げ廻る番になる。退治ろ、退治ろ、退治てしまえ！ ナーニ、だからさ、目前によ、悲鳴をあげている女だって、あさつてになるとガラリと変り、『逃げちゃあいやよ、逃げちゃあいやよ』などと男にいうだろう、あさつての声が聞きてえものだ。……ということであつてみれば、失望することになるんだからなあ。……そのお町だが、どこにいるのかしら？ たしかにこちらへ来た筈だが」

「助けてくださいヨー」と女の悲鳴、にわか横へそれてしまった。

「あッはん、さようか、それましたね。それがよろしい。正当だ。あんなに悲鳴をあげられては、里へ連れては行かれなからなあ。そこで深山^{みやま}の奥へ行き、ご婚礼ということになる。だがおれには疑問だよ。どうしていったい女というもの、退治られるまでは騒ぐんだらう？ 思うにあいつは商法だね。あんなにもいやがったこの妾^{めかけ}を、あなたは退治たんじやアありませんか、大事におしなさいよ！ 大事におしなさいよ！ 高く売ろうツていうんだね」

ノッシノッシ歩きだした。

と、今度は行く手から、チャリーンと太刀音が聞こえてきた。

「今夜はよくよく変な晩だ」島原城之介突っ立ってしまった。「馬に女に刀ときた。いくらおれだって気味が悪いよ。ふけ

ろふけろ、ふけてしまえ」木の間をくぐって立ち去った。

「またもやチャリーンと太刀の音！ バタバタバタと走る音！ しだいにこっちへ近づいて来る。」

と、一人の若武士、ヨロメキヨロメキ現われた。追いつがった五人の武士、グルグルと若ざむらいを引っ包んだ。立ち止まった若武士、サーツと太刀を横へ振った。と、五人飛びしさる。が、若武士、ヒヨロヒヨロと、一本の立ち木へ背をもたせた。ハッ、ハッ、ハッと荒い息！

「助けてくださいヨ！」と女の悲鳴！

「お助け致す！ お助け致す！ 袴広太郎、お助け致す」ヨロヨロと前へ出るところを、出鼻を利用し、一人の武士、広太郎の眉間へ斬りこんだ。

昏迷の太刀

拝むがように太刀を捧げ、つばで受けとめた広太郎、斬り返して行く力もない。受けた拍子にまたヒヨロヒヨロ、おのずと左へまわり込んだ。太刀が離れ体が離れ、入り違った時広太郎、片手で刀を右へまわした。それがきまって敵のうなじ、盆の窪からスポリと斬った。

悲鳴、それからたおれる音。

「斬ったな、斬ったな」と広太郎、口の中でつぶやいた。「まだ斬れる。大丈夫だ！ ……ああ幾人斬ったろう？ 二十人は斬っている。おれも斬られた、おれも斬られた。槍傷、太刀傷、滅茶苦茶だ。だが痛くはない、なんともない。ボーッ……と心が遠くなるばかりだ。そうして足がヒヨロヒヨロす

る。胸が苦しい、呼吸が苦しい。眼の先にキラキラと赤いものが見える。……一体全体どうしたんだ、どうして刀が重いんだ！ 持ちあがらない！ 石のように重い！ しかし斬れるぞ！ まだ斬れるぞ！」ヒヨロヒヨロ、ヒヨロヒヨロと前へ出た。

と、一人飛び込んで来た。

「来たな」と広太郎刀を捧げた。とまたつばで受けとめた。押し返してゆく気力もない。ヒヨロヒヨロヒヨロヒヨロと右へまわった。と自然と太刀が離れ、体が離れて入り違った。そこで夢中で広太郎、サーツと刀を左へまわした。おのずときまったかぶと割り、敵のうなじをはすかに、耳の下からスポリと斬った。

「斬ったな、斬ったな、まだ斬れる」またもや口の中でつぶやいた。

「大石大木を投げおろし、それからそろって槍襖、土煙りをくぐって突いて来たつけ。味方は防いだ、よく防いだ、二度も三度も追い返した。おれは斬った、斬り立てた。しかも馬上で、指揮をしながら。……と、ボーッと火が燃えた！ きやつらが、きやつらが、かけたんだ！」

ヒヨロヒヨロ、ヒヨロヒヨロと前へ出る。刀を青眼につけている。ともするとそれがおりようとする。辛うじて、辛うじて、持ちこたえている。

「眼の前がだんだん暗くなる。ここはいったいどこなんだ？ 杉窪じゃアないのか？ やッ、敵がいる！」

ヒヨロヒヨロ、ヒヨロヒヨロと前へ出ると、また一人飛び込んで来た。ヒヨイと広太郎刀を出した。と、チャリーンと

音がした。受けたのではない、からみ合ったのだ。二本の刀が一本となる。火事の光と月の光、木の間をもれてボツとさす。それにうつつてまるでつららだ。

と、キューツという音がした。しごいた太刀の音である。とたんにピカリと一閃した。広太郎の刀が動いたのである。ワツという悲鳴がすぐ響いた。刀の落ちる音がした。

「斬ったな、斬ったな、腕を斬ったらしい？ こいつらはいったい何だろう？ ……火は八方へ燃え移った。屋敷の方から悲鳴が聞こえた。馬を煽って飛び返った。敵勢、敵勢、裏手の敵勢！ どうして地雷は破裂しなかったんだろう？ 聞こえてきたつけ、『裏切り者だア』と。……みんな武器蔵の方へ走って行った。おれも走った、武器蔵の方へ！ ……胸にたま傷！ 銅兵衛殿！ おれを拝んだ。拝みながらいった。『君尾が、君尾が、文三めに！』……あつ、そうだった、やつと思ひ出した。おれは文三を追っかけて来たのだ！ 文三めエツ！」

と睨みつけた。もう刀が持ちあがらない。ダラリと垂れると地へ突いた。その柄頭へ両手をかけ、グーツと首を突き出した。

と、パタパタと足音がした。「参れ！」と息も絶え絶えに、やつと持ちあげた長谷部国俊、ピューツと横へ一振りした。

止どめの切っ先

最後の勇気を腕へこめ、広太郎刀を一振りした。が不思議にも手答えがない。ないのが当然、バタバタと、足音を立て

て山上へ、二人の敵は逃げたのである。

と、また刀をダラリと下げ、地へ突くと寄りかかった。

「逃げた逃げた。ざまア見やがれエーツ」

だが自分もたおれてしまった。

「残念！」とうめくと膝を立てた。立てた膝がすぐまがる。

「あッ、あッ、あッ、君尾殿オー」

ザワザワザワと渡る風、風にまぎれて、「助けてくださいヨー」遠く遠く君尾の悲鳴、裏手の方から聞こえてきた。

「声が、声が、声が聞こえる！ 君尾殿オオーツ、君尾殿オオーツ」刀を杖にまたヒヨロヒヨロ立ちあがったが駄目である。ドツとたおれるとはい廻った。

「お助け致す！ お助け致す！ おのれ文三！ 待て待て待て！ ……手がつる、手がつる！ 足が動かねえ！」

ガリガリと土を引っかいた。その手にさわった小長い物！ 夢中で取りあげじいッと見た。

「巻軸一本！ ……ここにあったアア……」

グイと懷中へ押し込んだ。

「助けてくださいヨーツ」

と声が消えた。

もう広太郎動かれない。——グツと横向きに伸びたままだ。太刀はしっかり握っている。ブルブルブルブルふるえる切っ先、大波を打つ背のうねり、その上を火光と月光と、ボ——ツと淡く照らしている。

意識がだんだん失われて行く。銅兵衛の姿が浮かんできた。と、その姿が娘になった。君尾だ君尾だ、笑っている……と、一軒の家が見えた。縁に娘が坐っている。お京様だお京様だ

お京様だ！ やっぱりうれしそうに笑っている。……

「おれは死ぬのだ！」——ハッキリ思った。深い空間へ落ちてゆく。何者かおれを引っ張っている。……それっきり何にも感じなくなった。

木の間をもれて月光と火光、依然広太郎を見おろしている。

千切れたもとどり、顔にかかった髪、ああその顔の面白いことは！ ゲッソリ痩せて、骨ばって、黒い輪が両眼を隈取っている。切り裂かれた袖や裾、裾からニューツと二本の足、白ねぎのようにみ出している。赤いくもの巢が色どっている。それがズルズル動いている。血が流れているのである。

静かである。山の中！ 誰一人助けには来ないらしい。風もやんだ。木の葉も動かぬ。スクスクと立っている両側の木立！ 幹がなま白く光っている。静かである。まだ静かだ。その時山上から足音がした。忍び寄るような足音である。と人影が現われた。さつき逃げた二人の武士だ。

「おい」と一人がささやいた。「死んでいるようだ、たおれている」

「うん」ともう一人がささやき返した。「どれ、とどめでもさしてやるか」

スルスルと一人近寄った。ポンと足で蹴ってみた。広太郎動かない。

「よし」というとそのさむらい、広太郎の死骸にまたがった。

片足あげて横顔を踏み、抜き身の切っ先ユルユルとおろし、耳のつけ根をぶつとりと！ 刺そうとした時一条の捕り縄、群葉を抜いてスルスルスル、蛇のように走り出たが、さむらいの首へ巻きついた。

「うまいぞ、忠公！」とかん高い声、木立の蔭からひびき渡った。

広太郎の死骸？

群葉を抜いて飛び出した縄に、首を巻かれた一人の武士、「ヒッ」と叫ぶとひっくり返った。ズルズルズルズルと引きずられる。縄がしばられるからである。

「ヤッ」と仰天したもう一人の武士、麓を目がけてかけ出した。と、その前へ一人の虚無僧、木立の蔭から飛び出した。

「悪党！」と一声、銀シルバー声！ あがった尺八、風を切った。

「ガッ」という悲鳴、額をわられ、武士はフラフラとよろめいた。額をおさえ、めくら滅法、かけ出した方角に谷があった。ガラガラガラガラと落ちる音！ かれ勝手に飛び込んだのである。人間一人谷の底で、こなごなにこわれたに相違ない。

手足をバタバタおよがせたが、首をしめられたその武士も、すぐに伸びて動かなくなった。

ピヨイと木蔭から飛び出したのは道中師風の小男である。

「どうでえ、あねご、こんなものでげす。中条流の捕り縄だつて、時にはこんな働きもしまさあ」ほかならぬ早引忠三である。

「見事見事。ほめてやってもいいよ」虚無僧姿のイスラエルのお町、天蓋の中で愉快そうに笑った。

「それはそうとこのお武士さん、もう命は助からないのかしら？ どっちが悪いのだから知らないが、二人に一人。可哀そ

うに、とどめを刺されようとしていたんだもの。だまって見
ちゃアいられないじゃアないか。どういう身分のお方かし
ら？」および腰をしてのぞき込んだが、にわかにお町グタグ
タと、両膝について天蓋をはねた。「袴様だヨーツ、広太郎様
だヨーツ」ヒシとだきあげたものである。

がっかりしたのは忠三で、「ワッ」というと飛びあがった。

「袴が広いか！ 惜しいことをした。おれにとっちゃア恋が
たき、助けなけりやアよかった。くたばれくたばれ！」

そんな言葉は耳にはいらぬお町、広太郎をだきしめた。「お
町でございます、お町でございます。お心をしっかり！ お
持ちくださいヨーツ……おとおおそれにしてもこの傷は！
まるでクチャクチャに斬られているよ。……息は？」と片手
を鼻へやった。「しめた。忠公、生きていらっしやる！」

「へーいさようござんすかね」

「これでマア少しは安心した！ もしこのお方に死なれよう
ものなら、それこそ妾^{わかし}だつて……袴様！」しかし広太郎身動
きもしない。「駄目だ駄目だ。正氣づかない！ あつ、そうだ、
きつけ薬！ それから水だ！ ヤイ忠々！」

「へーい」とノツペラ棒の返辞をする。

「水だヨーツ……水々……水を汲んでおいで！」

「で、どの辺にござんすえ？」

「一、二、三、四、ヤイ忠々！ 十かぞえるその間に、水を
汲んで来なかうものなら……」

「あねご、無理だ！ 水のあり場所……」

「谷だ！」とお町、くらいつきそうだ。「飛び込め！ そうし
て飛びあがれ！ 笠に一杯！ 手前^{てまえ}の笠に！」

谷のふちまで駆け出したが、「こいつアいけねえ、とても深
い！」

「五、六、七、八、ヤイ忠々！」

「あと二つか……どうなるものか！」

絶壁に懸かった藤蔓^{ふとうづ}づたい、身軽に忠三、スルスルとおり
た。

ほとんど死骸の広太郎を、しっかりだきしめたイスラエル
のお町、ワナワナ全身をふるわせている。

谷底から忠三の声がした。「あねご、大変だ、大変だ！」

君尾の運命？

「大変だ」と叫ぶ忠三の声、お町の耳へはいらない。お町
うつとりと考え込んでしまった。

「不思議だねえ。夢のようだよ」まずつぶやいたものである。

「あの夜南蛮屋の南蛮部屋で、はじめてこの人と逢った時か
ら、妾の心は変わってしまった。巻軸の秘密、ほしくもなく、
ほしいのはこの人だった。どんなことをしたって手に入れよ
う。恋だわねえ、初恋ってやつさ」またここでじいッと考え
込んだ。「それからというものの忠三にいつけ、この人の様子
を探らせていると、にわか旅へ出たとのこと。『忠三のばか
め、目つけておいで！』毒づいてやったら可哀そうに、それ
でもあっちこっち聞き合わせたあげく、杉窪とかいう別天地
へ、入り込んだらしいという人の噂。では行こうと出かける
と、あのいやらしい城之介め、ついてついてつき廻る。中途
でマイて来てみれば……こんな姿になっておられる。……そ

れでも縁はあったってものさ。これがもう一足遅れようものなら、それこそ取り返しがつかなかったんだからねえ」

「あねご！」と谷から忠三の声、「築土が殺されておりますぜ！」

だがお町には聞こえない。依然広太郎に見入っている。

「傷は？」とお町、気がついた。だいた広太郎をそつと置き、まず胸をひらいてみた。「肩に三カ所胸に二カ所、みんな薄手だ、大丈夫。腕に八カ所、斬られたものねえ。だが安心、かすり傷だ。股に六カ所、たま傷、矢傷。ああ有難い、深手はない、精根をつからせてたおれただけだ。でもいったいどうしたんだろう？　まるで戦場で斬り合ったようだよ」

「水だ！」という声がうしろでした。

振り返ってみると菅笠をかかえ、眼の前に忠三が立っている。「きつけー！」というイスラエルのお町、腰から印籠を引き出した。ふたをあけるのもどかしく、丸薬をつまむと歯でかんだ。それから水を含んだが、かたく食いしばった広太郎の歯、容易なことでは開こうとしない。気がついて抜いたのは小柄である。歯の間へソロソロと支う。わずかに開いたすき間から、口移しに流し込んだ。「袴様！」とそこでまた叫んだ。

と、かすかに身をうねらせ、二、三度まぶたを痙攣させたが、カッとはかりに眼をあけた。

「気がつかれた！」とお町の歓声！

「やれやれ」という忠三の声！

とたんに広太郎、叫んだものである。

「お助け致す、君尾殿！」

その君尾だが、文三にだかれ、山の反対側を走っていた。「助けてくださいヨー、誰か来てくださいヨー」

火光は見えない。月光ばかりだ。

「お嬢様、お嬢様。もう駄目です。呼んだって誰が来るものですか」文三走りながらしゃべりまくる。「謀反までしたこの文三、みんなあなたがほしいからで。どうやら里は亡びたらしい、銅兵衛さんだって傷を負った。助かりませんな、鉄砲傷だ！　家もなければ親もねえ、それが今のお嬢さんで。文三におすがりなさいまし。大事にしますとも、大事にします。一緒に住みましょう、町へ出てね。働きますぜ、お嬢様のためだ。だからお嬢様もおとなしく、あつしの子供でもうむがいい。誰と暮らしたって一生でさあ。こんなにこがれている文三だ。添って功德をお果たしなせえ。駄目駄目、駄目駄目、もがいたって駄目だあ」

林の中へ駈け込んだ。と何物か文三の顔へパツと飛びつくものがあつた。

「ワツ、いてえ！　眼を引っかきやアがつたア！」

老人と少年武士

文三の顔へ飛びかかったのは、君尾の飼ひ猿三吉であつた。戦場から逃がれ、林づたい、追っかけて来たに相違ない。

「畜生！　てめえ、三吉だな！」

文三片手で脇差しを抜いた。「けだもののくせに途方もねえ、人間の恋の邪魔をしやがる」

振り廻したが素早い三吉、今度は足を引つ掻いた。

「アレ、この猿、狙いどころをかえたな。顔なら顔と一つ所を狙え」

キツ、キツ、キツと叫びながら、三吉、左手を引つ掻いた。

「いてえ！」と叫ぶと手を放す、ドンとところがったのは君尾である。飛び起きると走り出した。

「しまった！」と文三あとを追う。そこを後ろから三吉猿、肩へ飛びついて引つ掻いた。「おのれ！」といって振り返り、脇差しを振るうとスルスルスル、三吉猿は木へのぼった。「お嬢様、お嬢様、お待ちなすって！」文三後を追いかける。とまった木から三吉猿、飛びおりて頭を引つ掻いた。「チェッ！」という脇差しを振るう。と三吉スルスルスル、またもや木の上へのぼってしまった。「逃がしてたまるか！」と君尾を追う。またまた飛びおりた三吉猿、ふくらはぎを引つかいた。「野郎！」という振り返り、またも文三脇差しを振るう。が結果は同じだ。三吉猿、木へのぼって葉に隠れる。

「お嬢様、お嬢様！」と追おうとしたが、あつ、君尾の姿が見えない。「むうう」とうなると可哀そうな文三、ベタベタとすわったものである。

そのころ君尾は林を抜け、草の斜面を走っていた。夜の山中、人はいない。なまじに声を立てたならかえって文三に目つけ出されるだろう。そこで無言でひた走った。二十日の月夜、ボツと明るく、森や林が立っている。灌木や叢が飛び散っている。身体がグタグタにつかれている。いまにもいきが絶えそうだ。だが休んではいけない、人里へ！ 人里へ！

人里へ！ 草がたけのびて走りにくい。で君尾は裾をからげた。すっかり着崩れた振り袖姿！ 深紅の蹴出しがはぎに纏う。蹴出しから漏れる真つ白の脛！ 人氣がないので恥ずかしくもない。走りながら振り返ってみた。追って来ない、人影が見えぬ。君尾ドンドン走って行く。と、行く手に丘があった。塚のようにまるい小丘である。その丘を廻った時である。カツと火光が眼を射た。

「あつ」といって立ち止まった。数本のたいまつが燃えている。十数人の人が立っている。それは奇怪な光景であった。真ん中にノビノビと立っているのは紗の唐冠、白い道服、刺繍した履の老人で、口ひげはないが長いあごひげ、眉毛と共に卯の花のように白い。そのかたわらに立っているのは、十五、六歳の少年武士、前髪立てにのし目の振り袖、その定紋は葵である。二人を圍繞して五、六人の武士、うやうやしく地上にかしこまっている。少し離れて三人の武士、高くたいまつをささげている。さらに離れて二人の武士、鋤と鋤を地に突いている。

掘り出された一個の石棺が、かれらの前に置かれてある。古風な刀剣、曲玉管玉、石棺の中に充ちている。

と一斉に振り返り、君尾の姿を不思議そうに見た。

この時はじめて君尾の口から、「お助けくださいまし」と声がもれた。ベタベタとすわって手をついたのは、憐れみを乞うというよりも、一種莊嚴の光景に、強く胸を打たれたからであった。

恋人さがし

今は秋！江戸も涼しい。ここは上野山下である。明月が空にかかっている。と一人の若ざむらいシヨンポリとして歩いて来た。と向こうから人が来た。片眼つぶれた若者である。これもシヨンポリとうなだれている。二人事もなく行き違おうとした。

「あの、もしえ、お若い衆さん」不意にさむらいが声をかけた。

「へーい」というと片眼の若者、足をとどめて振り返った。

「何かご用でござんすかえ？」

「お京様をご存知ではございますまいか！」

「あの、一向存じません」

「でも、もしやご存知では？」

「とんと存じませんでございます」

「それは大変困りました」若ざむらいはうなだれた。ほかならぬ臼井金弥である。

「あの」と今度は若者がいった。

「君尾様をご存知ではございますまいか？」

「とんと存じませんでございます」

「それは大変困りました」片目の若者は文三であった。

で二人向かい合い、シヨンポリとして立っている。二人の影が地に落ちてゐる。どっちが影だかわからない。きっと四つとも影なんだろう。

「あのね、あなた。お京様はね、私の許婚いひなづけでございました。

ところが誘拐されましたので、はい今年の夏の盛りに。で、探しておりますので」

すると今度は文三がいった。「よく似た身の上でございますなあ。あのね、あなた。君尾様はね、私と許婚ではございませんでした、が、許婚になりたいと存じまして。いいえさ、実は、夫婦にね。……で、出かけたのでございます。はい、さようでございます。はい、さようでございね。すると、あなた、邪魔がはりました。それがさ、人間ではございません、猿だったのでございます。三吉猿と申すもので。ほんとにほんとに憎い猿で、連れて行ってしまったのでございます。それに私の顔を引つ掻き、片眼つぶしてしまいました。今年の夏のことでございます。で、さがしておりますので」

「お気の毒さまでございますね。で、いまだに目つきりませんので？」金弥同情したらしい。

「目つきりませんでございます。しかしどうやらこの二、三日、猿の居場所だけは目つきりましたようで」

「それは結構でございますな。やはり木の上にも？」

「堀の内にいるのでございます。立派なお屋敷の堀の内に、つまりお庭でございますな。飼われているようでございます。で私の思いますには、三吉猿がいる以上は、君尾様もおられるに相違ないと……そこで毎日出かけてゆき、様子を見るのでございますが……」

「しかし、はたしてその猿が、三吉猿でございましょうか？」
「それはもう確かでございます。なき声を知っておりますので。キーキーキーキー、キー、こんなようになくのでございます」

「キーキーキー、キーキーキーははあ、こんなようになきま
すので。だが、たいがい猿というものは、キーキーとなくよ
うでございますな。ところでお屋敷はどの辺で？」

「そ、そいつは申されません」

文三にわかに後じさりをした。

「それはまたなぜでございますな？」金弥さもさ不思議そ
うにきく。

と、その時どこからともなく、フフンという冷笑の聲がし
た。

根岸の屋敷

フフンと冷笑の聲はしたが、二人の耳へははいらなかった
らしい。

「何ゆえと申しましておさむらい様、うかうかとお屋敷をあ
かそうものなら、先廻りをしてあなた様が、私のこがれてい
る君尾様を、横取りなされないものでもなし……で、お屋敷
はあかされませんなあ」文三用心がいいのである。

「それなら大丈夫でございます」金弥別に怒りもしない。「私
にはお京様がございますので」

「あつ、さようでございますでしたね。あの、ところでお京様は、
まだ手がかりがございませんので？」

「八百八町広いお江戸を、五十ぺんほどもまわりましたかし
ら。いまだに手がかりはございません」

「さぞお疲れでございますうな」

「他人の足のようにになりました」

「ほんとにご同情申し上げます」

「はい、そうしてあなたへも」

丁寧に二人辞儀をした。またシヨンボリと向かい合ってい
る。と金弥がいい出した。

「今夜もお探しでございますかな？」

「はい、これから参ります。そうしてグルグル屋敷を、見廻
るつもりです」

「成功をお祈りいたします」

「はい有難う存じます。どうぞあなたもお京様を、一日も早
くお探しなさるよう、私もお祈りいたします」

また丁寧に辞儀をし合う。月がまるまると照らしている。

「ではお別れいたしましょう」

「はいお別れ、ご機嫌よろしゅう」二人左右へ別れてしまっ
た。

とその時家蔭から、ピヨイと飛び出した小男がある。

「いや面白いかけ合いだった。キーキーキー、キーキーキー
猿のこわ色まではいったんだからなあ。……待てよ」と小男
腕を組んだ。「こいつ笑ってはいられない。袴広太郎様の尋ね
人、それも確か君尾といった。三吉猿の話も聞いた。文三と
いう悪党が、かどわかしたということだが、今の野郎が文三
かもしれねえ。それにしても安手だなあ、どっちみち後をつ
けてみよう、猿のいるというその屋敷に、君尾という娘がい
るかもしれない。よし」というと足音を忍ばせ、ヒタヒタと
後を追ったが、南蛮屋の主人忠三であった。

さて文三つけられるとも知らず、上野山内を根岸へおりた。
今日の上根岸、六十番地にあたる辺、そこに立派な屋敷があ

る。グツと取りまわした嚴重な高塀、庭木が森のように繁っている。と、文三ピツタリと身体を塀へくツつけた。

「どこかに節穴でもあるまいか。のぞいて見てえ、のぞいてみてえ」こんなことをつぶやいている。指でさぐっても節穴はない。板と板との合わせ目もない。だが容易にあきらめない。塀に添いながらノロノロと、先へ先へと歩いて行く。まがり角まで来た時である。月光に浮かんで一条のとり縄、弓形をなして飛んで来たが、キリキリキリ、首を巻いた。気が遠くなってぶったおれる。と現われたのは早引の忠三、縄を解くと脈を見た。

「殺してしまつては都合が悪い。氣絶ぐらいが格好だ」ズルズルと木蔭へ引つ張り込んだ。「いったいどなたのお屋敷だろう！ 大々名の下屋敷、といったような伽藍がらんだなあ。とにかく様子を探ってみよう」庭内の立ち木へ縄を投げた。それが巻きついてピンと張る。そいつをたぐると足で塀、踏まえてツルツルとよじのぼった。

奥の声

塀へよじ登った早引忠三、足をちぢめると飛びおりた。さても広大な裏庭である。立ち木が多いので先が見えない。地をはいながら進んで行く。と一むらの竹林があった。月光を受けて光っている。そこを廻ると草ぶきの亭てん、だが人はいないらしい。人声もしなければ灯火もささない。で、ズンズン奥へ進んだ。やがて泉水の縁へ出た。風流の土橋がかかっている。石灯籠がともっている。泉水の向こうに館やうたがある。そ

こまではい寄った早引の忠三、まずうずくまって物音を聞いた。月が館にさえぎられて、こちらあたりはほとんど闇だ。身を隠すには都合がいい。しんと屋内は静かである。忠三だんだん大胆になった。「ほんとうのおれの目的は、君尾という娘がいるかないか、それさえ確かめればいいのだが、こう易々やすやすと忍び込めてみれば、ちよつといたずらをしたくなるなあ。泥棒心理というやつだろう雨戸をあけて内へはいり、間ごと間ごとを打ち通り、いずれ腰元もいるだろう、綺麗な寝顔を見てえものだ。ナーニおれは盗みはしない。あべこべに何か置いて来てやろう」で立ちあがるとピツタリと、雨戸へやもりのようにくつついた。とスルスルと開いてしまった。「これはどうだ、不用心だなあ。こんなことならおれにだつて、本物の盗人ぬすひとが出来そうだ」開いた戸口からはいあがつた。そこは長い廻廊である。忠三はいながら先へ進んだ。依然として館は静かである。と、廻廊が鉤の手にまがつた。そのつきあたりには別棟があり、コロンコロンというかすかな音が、たまでもころばすように聞こえてきた。

「どうやら人間がいるらしい」心でつぶやくと早引忠三、大胆にもそっちへはって行つた。ふすまがピツタリとしめられている。ふすまの奥は空部屋で、そのまた奥に部屋があり、そこに人がいるらしい。「かまうものか、押し込んでやれ」益々大胆になった早引忠三、ソロソロとふすまを引きあけた。思ったとおり空部屋で、その向こうに部屋があり、さかいのふすまが閉じられていた。

「將軍塚と申すので、南北朝時代の武将などの、遺物があると思ひましたところ、曲玉管玉まがたまくだたまが出ようとは、ちと意外でござ

ございましたなあ」こういう声が聞こえてきた。老人の声で威厳がある。だが不思議にも言葉の音が、純粹の日本の音でない。

内丹説

「はてな？」と忠三首をかしげた。「異国の人間に相違ない」

その時別の声が聞こえて来た。「不遇な楠氏の末胤でも、葬られているかと存じましたところ、いかにも先生の仰せられるとおり、神代遺物が出て来ようとは、いささか意外でございました」それは少年の声であった。いかにも清らかで美しい。だが非常に老成した声だ。

とまた老人の声が出た。「このまが玉やくだ玉から見ると、將軍塚の塚ぬしは、出雲族に相違ござらぬ」

コロン、コロンと音がした。

「ははあ」と忠三感づいた。「コロンコロンというあの音は、玉を台の上で転がしているのだ。なんだちっとも面白くねえ。第一爺いと子供とが、あんなに真面目に話していたのでは、どうも聞く方で飽き飽きする。やっぱ若い女中どもが、つめったり引つ掻いたり、キャー、キャーいって、色っぽい話をしている方が、おれには有難いというものだがなあ」だがその次に聞こえてきた、老人の声を耳にした時、早引忠三ふるえあがってしまった。

「光殿、光殿。それはそうと、隣り部屋へ賊が忍び込んだ時、どんな手段をとられるな？」

それはこういう声なのであった。

ふるえあがった早引の忠三、ピッタリ畳へ食いついてしまった。

「驚いたなあ。知ってるらしい。逃げなければいけない、逃げなければいけない」だがどうにも動かせない。なんともいられない一種の恐怖、そいつが上からおさえつけている。「なんてえことだ！　なんてえことだ！」動かせないのだから仕方がない。全身汗びたしになりながら、隣室の様子をうかがった。と、少年の声が出た。

「呼び入れて訓戒いたします」

「結構」と今度は老人の声。「が、人間の肝臓を、好んで食べたというような、盗跖のような兇賊なら？」

「ちと難儀でございますな。で、先生ならどうなされます？」

「さよう、私ならうちやって置きます」

「みすみす物を奪われまして？」

「ナニ、一個人の盗み高など、悪い為政者の国盗みからみれば、たいして問題でもございせんよ。もちろんよいことではござらぬがな」

「これはごもつとも存じます」

ここでちょっと話が切れた。忠三息づいたものである。「まずよかった。大丈夫。どうやら見のがしてくれるらしい。だが皮肉の連中だなあ。おれのいることを知っていながら、平気で噂をしているんだからなあ。底なしの大胆というのだろう。いったいどういう連中かしら？」

「またも老人の声がした。「光殿、光殿。ご存じかな、道教における内丹説を？」」

「たしか抱朴子にありましたようで」

「さよう、抱朴子にありました。一口にいえば氣息の調和で。心臓から出ずる氣、呵と称し、脾臓から出ずる氣、呼と称し、腎臓から出ずる氣、吹と称し、肝臓から出ずる氣、嘘と称し、肺臓から出ずる氣、泗と称す。六息乱れれば延命長寿、つまり達者で永生きをします。ところがこいつが当然なることには、泥棒の役に立ちますのでな」

「いけねえ」と忠三ちぢこまってしまった。「まだおえねえよ、おれの噂は」

すると少年の声がした。「はは泥棒に役立ちますかな」

「はい、大いに役立ちます。わが朝においては例の盗跖、貴朝におかれては袴垂、この辺の大盗になりますと、おのずから道教内丹説に、かなった行動をとりますな。かれらは他家へ忍び込むに際し、さらに一層平素よりも、氣息をととのえたと申しますことで。ところで人間というものは、天地の中和から出来ております。したがって人間の氣息なるものは、天地に影響いたします。で氣息さえととのっておれば、少しも天地を刺戟しません。きわめて自然に忍び込めます」

「なるほどなあ」と早引の忠三、今度はすっかり感心した。とまた老人の声がした。

「これが反対にいく時は、盗賊をみつけるに役立ちます」

「少し風向きが悪くなった」忠三またもちぢこまる。

「慣れない賊などが忍び込むと、少なくとも呵の息を乱します。胸の動悸が高まるので。と天地に影響します。すぐに目

つかってしまいます」

「どれ？」と忠三胸をおさえた。「まるで早鐘でもついているようだ。……何しろあぶない。早く逃げよう」スルスルと膝ではった時、老人の声がまた聞こえた。

「光殿、光殿。間違っても、逃げる賊を捕えてはなりませんぞ」

「おれはどうにも動けなくなった」またもや忠三ベッタリと、畳へ食いついた時である。「ではいよいよあすの晩、傾城塚へ参りましょうかな」こういう老人の声がした。

正史編纂

傾城塚へ行こうかという、老人の声を聞いた時、早引の忠三「おや」と思った。それは最近めつきりと、噂にのぼっている塚だからで、時々女の泣き声が聞こえてくるということである。

少年の声がすぐ聞こえた。「お供することにいたします」

すると老人の声がした。「やっぱりわしにはあの塚は、南朝に関係ある武将などの、寵姫かないしは夫人などの、古塚のように思われますがな」

「さていよいよ掘ってみて、曲玉や管玉に出られたのでは、いささか失望にございますな」これは少年の声である。

「いやいやそれとて結構でござる。一国の正史を編もうとするには、それくらいの障害はやむをえません」

「これはいかにも御意のとおり」

ここですばらしくしなとなった。

「正史をあむということは、偉人を世の中へ出すことではなく、偉人をぶちこわすことでござる」老人の声が聞こえてきた。「できあがっているものを鵜呑みにする、この傾向はいけませんな。一度は疑ってみるべきです。あの人物は偉人だという。しかし信じてはいけません。偉人ではないときめるのです。そうして材料をあつめるのです。偉人ではないという材料をな。するとこれも当然なことには、たいがい偉人ではなくなります。一応値打ちをひっくり返す！ 真髓をつかむ秘訣ですな。もっともどんなにひっくり返しても、ひっくり返らない人物もあります。それこそ本当の偉人です」

「どんなお方が偉人でしょう」

「大楠公などは偉人ですな。それなのにロクないしぶみさえない。是非建てなければなりませんな。さよう湊^{みなとがわ}川の古戦場へな」

だんだん真面目な話になる。忠三なんとなく引つ張り込まれ、耳をすまして聞いていた。また、しばらく静かになった。と少年の声がした。

「紀州の叔父上のお振る舞いなど、いかが先生には思^{おも}しめしますかな？」

「ちと奔放に過ぎますな。平地に波瀾を起こされるようで」

「困ったものでございます」

「そのうちおいさめなさるがよろしい」

「しかし私など若年で……」

「年など考えてはいけませんな。よいと思つたらなさるがよろしい」

「はい」とおとなしい返辞が聞こえた。またしばらく静かに

なった。

忠三には見当がつかなかった。

「塚をあばくって言うのだから、大泥棒かと思つたら、今度は歴史をあむんだそうだ。それじゃア二人とも学者なのかな？ 紀州の叔父上って誰のことだろう？」

その時老人の声がした。

「勢力をおさえてもいけません、無理に進めてもいけません。自然自然に移るのを、徐々に進めてゆかなければ、当人どもはよいにしても、はたが迷惑いたしますよ。ご覧なさい明朝は潰れました。そうして清朝が起りました。しかし支那の四百余州は、決してくらしよくはなりません。とうとう私など逃げて来ました。……少し部屋の中が籠^{こも}ったようです。どれふすまでもあけましょう」

仰天したのは忠三である。たまるものかと這い出そうとした。とスルスルとふすまが開き、さっと灯し火がさしてきた。

「これこれ若者、逃げないでもよろしい。何か物でもほしいのか」

「どう致しまして、とんでもないことで」

忠三おずおず眼をあげたが、「まあどうだい、この部屋は！」

日本の居候

まあどうだいこの部屋は！ こう忠三つぶやいたものの、それはその部屋の装飾が、特別に珍しいからではなく、本が余りにも多いからであった。部屋の大きさ五十畳敷きもあろうか、本来なれば見かすむばかりに、広く見えなければなら

ない筈を、恐ろしく狭く見えるのであった。三方が本で埋ずめられている。が、ただし、その間には、古墳から掘り出したと思われる、石のからびつ、古刀剣、曲玉管玉、古甲冑、土偶、木乃伊、弓、矢の根、古い錦欄、銅板、鉄牌、古瓦、化石というような物が、整然と分類されて置かれてあった。それらの物に押しちぢめられ、ひどく座敷が狭いのである。

一人の老人が坐っている。あごひげと眉とが純白で、耳から耳まで白髪が輪取り、顱頂部が美しくはげている。身にまとったはゆるやかな道服、形はまさしく唐風である。その前に朱塗りの机があるがこれもまさしく唐風である。年齢どうでも百歳以上。机を隔てて坐っているのは前髪立ちの少年武士で、のし目の振り袖に葵の定紋、聡明そのもののようないやいや威厳が備わっている。貴族の御曹司に相違ない。「ははあ、なんにもほしくない？」ちょっと老人は不思議そうにした。「うむ、賊ではなさそうだな」

「ヤクザ者ではございますが、コソコソ泥棒ではございません」忠三ヒヨコリと辞儀をした。

「では何ゆえここへ忍び込んだ？」

「さようでございますね。というかうか……」

「ここをどこだと思っているな？」

「とんと存じませんでございます」

「このお方をご存知かな？」少年武士を指さした。

「とんと存じませんでございます」

「尊いお方だ。ご挨拶をしな」

「へい」と忠三頭をさげた。

すると今度は少年武士がいった。

「このご老人を知っているかな？」

「とんと存じませんでございます」

「えらいお方だ。ご挨拶をしな」

「へい」と忠三お辞儀をした。

「ナニサわしは居候だ。日本の国の居候で、そうしてこの方の居候だ。……いったいなんだな、お前の身分は？」

「料理屋の亭主でございます」

「ほほう、さようか、それは結構。では唐風の料理の書、一冊そちに進ぜようかな」

「いえ、私のは南蛮流で」

「さようか、それでは役に立つまい。……どうだな、亭主。変わった話はないかな？」

「へい、どうも、これといって……」

「何かあるだろう。話してくれ」

「お暇いたしとう存じます」

「まだよからう。もっと話して行け」

「へい。有難う存じますが、もう夜ふけでございますし、店の方も心配で。……不用心の世間でございますから」

「全く不用心の浮世だな、戸締まりを破って押し込む奴がある」

「いえ、自然と開きましたので」

「光殿、光殿」と老人はいった。

「今後雨戸は閉じない方がよろしい。その方が用心がよさそうでございます。……では亭主、また来るがいい、ただし今度は表門から来いよ」

「へい」というと早引の忠三、部屋をすべって廻廊へ出た。それから庭へ飛び出した。と、女の声がした。

「ノロマのノロマの三吉や！」築山の方から聞こえて来る。

孤独の山姫

「ノロマのノロマの三吉や」築山の方から聞こえて来る。「おや」というと早引の忠三、やみに立ってそつちを見た。明月に照らされた大築山、頂きに女が立っている。その前にいる一匹のけもの、頬かむりをした猿である。後足で立ち、手を差しあげ、月をとらえようとするように、ピョンピョンピョンピョンはねている。

と、美しい女の声。「ノロマのノロマの三吉や。さあ妾をとらまえてごらん」スーッと築山を駆けおりた。と小猿が後を追う。「ノロマのノロマの三吉や」いいながら女は裾をめぐり、築山の向こうへ行つてしまった。「キー、キー、キー」となきながら、猿がその後を追っかける。と、またもや女の影、築山の頂きへ現われた。つづいて猿が現われた。ピョンとはねると飛びついた。

「おや、とうとうとらえたね」キュツとだきしめるとベタベタと、頂きへ坐ったものである。

「ねえ、三吉」と話しかけた。「お前はほんとにノロマだよ。杉窪にいてもノロマだしお屋敷へ来てもノロマだし、ノロマのノロマの三吉や。でもね、お前は恩人だよ。お前が助けてくれなかったら、妾は今ごろ文三めに……お前はノロマで恩人だよ。……ノロマの恩人の三吉や！ お前がいるからまだ

いいのさ。そうでなかったらさびしくて、妾は病氣になってしまう。光圀様はよいお方。朱舜水先生もよいお方。そうしてお屋敷は立派で、皆さん大変親切だけれど、やっぱり妾は杉窪の方がいいよ。三吉お前もそうだろうね。山があつて、野があつて、林があつて、森があつて、風が小鳥を吹き飛ばして、お日様がカツと明るくて、大きな声でおしゃべりができて、いいわねえ杉窪は。でもね、三吉。杉窪はね、焼けてこわれて人が散つて、お父様がなくなって、すっかり亡びてしまったんだとさ。……お父様がなくなってねえ」嗚咽の聲がふともれた。

「だからね三吉や。宿なしなのよ、妾たちはね。どこへも行く事ができないんだわ。悲しいわねえ、三吉や！」キューツと猿をだきしめたらしい。

「キー、キー、キー」と猿がなく。あんまりしつかりしめられたので、痛いヨーと泣いたのだろう。「お前と毎晩お庭へ出て、鬼ゴツコをするのが楽しみよ。外に楽しみなんかありません。さあ三吉、鬼ゴツコよ」ヒヨイと小猿をほうり出した。キーとなくと宙で返る。ともう後足で立っている。続いて立ち上がった女の姿、紅色勝った大振り袖、裾のあたりが朦朧と煙り、肩に斑を置いたは月影だ。

「とらえてごらん、とらえてごらん」ヒラヒラと一方へ走って行く。猿がその後を追って行く。

「とらえてごらん、とらえてごらん」反対の方へ走って行く。と猿が後を追う。

お庭が一時に深山となり、美しい孤独な山姫が、けものと遊んでいるようである。

と、再び一躍し、猿は女へ飛びついた。
つかかえて胸へたく。

「袴様！」と空を見た。「お助け致す、君尾殿！ お声が耳に残っている。でも助けてはくださらなかった。……あの方どこにおいでだろう。……いいお月夜！ 思ひ出すわねえ」
月の光に顔が浮かび、夕顔の花のように真つ白だ。眼のひとところだけキラキラと、露でもおりたか光っていた。涙というものに相違ない。

じつと見ていた早引忠三、「ううむ」とまづもって感心した。
「町の女とはまるで違う。なんといったらよいだろう？ 野からうまれた阿魔っ子だなあ」

その時猿がキーとなき、忠三の方を指さした。

「どなた？」という女の声。

「へい」と忠三やみから出た。

純な心

とうとう目付けられた早引の忠三、闇の中から踏み出した。

「明るい晩でございます」トボケた調子で声を掛けた。

「ええほんとに、昼間のようね」無邪気な君尾の声である。

「あのどちらからいらしたの」

「へい」といったが返辞が出来ない。「よいお月夜でございます」

「驚でも飛びそうでございますのね。……でも、どちらからいらしたの？」

「裏門からでございます」

「なんのご用でいらしたの」

「うん」とつまったが、「かまうものかひとつ、この娘をおどしてやれ。……お嬢様！」と恐ろしい声で、「あっしは大泥棒でございますよ」

「そう」とちつとも驚かない。「で、何かお取りになって？」「やりきれねえなあ」と思ったが、「途方もないものをもらって来ました」

「見せてちょうだい、どんなもの？」

「それがね、ちよつと見せられません」

「なぜでしょうね。見せてちょうだいよ」

「形のないものでござんす」

「形のないもの？ では夢ね」

「うまいことをいう」とつぶやいたが、「いえ『言葉』でございます」

「『言葉？』と君尾は打ち案じた。どうやら意味がわからないらしい。

「内丹説ないたんせつというもので」

「内丹説？」と首をかしげる。「何かのご用に立ちますの？」

「へい、さようで、泥棒のね」

「ねえ」と君尾築山から、二、三步下へおりて来た。「ご存知なくて、袴様を？」

「さあ」とこれにはこまってしまった。「どういいうお方でございますか？」

「よいお方でございますの」

「いずれよいお方でございますような。あの、お嬢様のお仲好しで？」

「ええそうよ、兄弟のように」

「夫婦のようではございませんかね」

「ええそうなるかもしれないの」

「ひどくサッパリした返辞だなあ」忠三感心をしたものである。「でもね、お嬢様」と進み寄った。「その袴様という人が、ほかのお嬢様に恋せられ、一緒に住んでいたとしたら、あなたは何んとなされますな？」

「いいえ、そんな事ありません」君尾の声はりんとなった。

「いいえ、そんなことありませんの！」信じきっている調子である。「ねえあなた」といい続けた。「お逢いになったらいつてちようだい、君尾が待っておりますとね。そうしてここにおりますとね……ノロマのノロマの三吉や！ 捉えてごらん、さあ妾を」

築山の向こうへ駆けおりた。とまたヒョッコリ現われた。「あのね」と忠三へ話しかけた。「楽しい時もありますの。ええそうよ、妾にだってね。古塚を掘りに行く時はね。妾もお供を致しますの。ノロマのノロマの三吉や！」

また向こうへ駆けおりてしまった。

きびすを返した早引の忠三、堀まで来ると縄を引く。ピヨイと飛び超すと縄をたぐる。ふところへ納めて気がついた。「どうだ野郎、まだいるか」木蔭をのぞいたが文三はいない。

「ふふん、眼ざめて飛んだとみえる。よかろう、達者で永生きをしろ。そうして死ぬまで探すがいい。君尾様、君尾様、君尾様とな！ 水戸家の御曹司光圀様、明の亡命大学者、朱舜水先生に守られていたでは、どんな野郎にだって齒は立つめえ」

やがて帰って来た南蛮屋。

「旦那、遅いじゃありませんか」

「悪いか」と睨んで南蛮部屋へ通る。ドンと寝椅子へ腰かけたが、「あねごがいねえと寂しいなあ」一息にグーッと眠ったが、眼ざめたときは翌日の正午、と、戸が開いてノッソリと、はいつて来たのが島原城之介。

「よう島原か」「うん、早引」

狐と狸

睨み合った忠三と城之介、ひとしきり部屋内静かである。と、笑ったのは忠三である。

「ご精が出るの、え、島原」

「うん」というと腰かけた。「手に入れるまでは毎日来る」

「よかろう」と忠三せせら笑ったが、「出世の秘訣は運鈍根。ところがお前のやり口は、根鈍運というやつだな」

「出世とは違う、女の話だ」

「似たようなものさ、何が違う。おめえがあねごを手に入れば、途方もねえ出世といっている」

「ふふん」というと城之介、ギロギロあたりを見廻したが、「今日も帰っちゃアいねえのか」

「そうさなあ」と冷ややかに、「南蛮屋は随分手広いが、おっ振るって探すに手間暇はいらぬ。ひとつ家探しをしてみねえ」しかし城之介返辞をしない。ムツとした眼つきで見廻している。

「だが」と城之介いい出した。「猫も、鸚鵡もいねえところを

みると、持って行ったに違えねえ。そうよ一度はここへ来てな」

「ほう」と忠三からかいづらだ。「その觀察は優秀だ。が、要するに優秀だけさ。居場所についてはわかるめえ」

「ああいう荷厄介な生き物だ。遠いところまでブラブラと、さげて行くような氣づかいはない。近間に隠れているんだらう」

「なんのなんの長崎から、持ち運んで来たしろ物だ。蝦夷松前へでも持って行けらあ」

これで城之介だまってしまった。

「だがナア」とまたもいい出した。「氣象に似合わず卑怯なまねだ。巻軸一本取ってくれたら、ままになろうといいながら、そいつを実行しねえんだからな」

「それがよ」と忠三鼻をこすり、「おめえの鈍のなすところだ。巻軸を渡したその瞬間、驚につかめばよかったじゃアねえか」

「ところがあの時断りおった」

「そいつを素直に承知かえ」

「まさか手ごめにも出来なかったからな」

「そこで逃げたというものさ」

「そいつが卑怯だといってるのだ」

「おれの知ったことじゃアねえ」

「うんにゃ」と城之介手を握る。「てめえもグルだ！どこへ隠した」

「何をべら棒！」と負けてはいない。「強面でおどそうというのかい！ヘラヘラヘラ、ヘラヘラヘラこいつア笑いの形容よ。おらアちっともこわかアねえ」思い切ってひやかしたも

のである。と、鼻うたをうたい出した。「何をクヨクヨ鳥が飛び、ほかの色木にとまろうと、こちゃ知らねえ、こちゃ知らねえ。……だがナア」と忠三や真面目に、「おいらちっとばかりおかしいよ、おめえの身分からいう時は、女に不自由はしていねえ筈だ。イスラエルの神へにえ捧げようぞ！するとコロコロコロと、阿魔っ子がころがって来るじゃアねえか。その辺で我慢をするがいい。それとも最近利き目がなくなり、おさい銭のあがりがすくねえかな。とあってみればお気の毒。さりとておいらのセイじゃアねえ。そこでやっぱり知らん顔。あねこの居場所なんか知らねえ知らねえ。……が、待てよ、ご相談。うんそうだ、相談がある。オイ！」

という及早引の忠三、寝椅子から身体を乗り出した。「お前の住居はどこなんだい？こいつから一つ聞こうじゃアないか。そいつをおめえが明かせたら、そうさナアあねこの隠れ家、明かせてやってもいいかもしれねえ」だますようにきいたものである。と、城之介乗り出してきた。

凄笑い

うっかり乗り出した島原城之介、いおうとした時氣がついた。

「その手に乗るか、ばかな面め。おれの住居をほじくり出し、留守を目がけて忍び込み、うんとこさためたさい銭を、盗み取ろうというのだらう。計画はいい、それはほめる。だがナア早引、それにしても、ちよつとばかり甘く見過ぎたぜ、お町にかかっちゃア毫碌でも、金の音を聞くとこの島原、ピー

ンと、一時に正気づくぜ。交換条件まずご免だ。ただしこれだけはいい。イスラエル教の大行者、島原神父のご神殿は、この天が下、人あるところ、至る所にござるぞよとな。どうだこのくらいで負けてくれ。さあさあ話せ、お町の隠れ家。どこだどこだ？ ど……お……こ……お……だア？」

そっくり返ったものである。

真ん中どころを射あてられ、さすがの早引忠三も、げんなりとして苦笑したが、反動的に猛くなり、えぐってえぐってえぐってやれ！ で、まくし立てたものである。

「おおおおお、いかにもなあ、まだおめえにア脈がある。

もつともおれにカマをかけられ、チョロツカにねぐらを明かすようじゃア、よくよくヤクザな人間だ。そこまで毫碌はしていねえだろう。よろしいよろしい天が下、人ある所おめえの住居、大きく出たところに稚氣があつて、そうして大變可愛らしい。そこであねごの隠れ家だが、やっぱりそうだ天が下、人ある所にあるらしい」ここで意地悪く笑つたが、「ただしちよっくら匂わしておく。あねごは一人じゃないんだぜ。そんな不経済をするものか。相手があるのだ、共住みのな。年が若くて、男がよく、金持ちのせがれでわざが出来、身分はもちろんさむらいさ。なんでも人の噂では、四畳半では広すぎるそうだ。三畳に限るっていうことだ。が、おめえにアこの消息、なんのことだかわかるめえ。そこでクドイが説明する。いつも二人がピツタリと、くツついているんだから三畳でいい。四畳半ではすぎが出来、風がはいって寒いとよ。熱い熱い熱い仲だあ！ それによ」と忠三いよいよアクドク、「その果報の色ざむらい、お前には縁のある奴だ。縁も縁、敵だ

あね。とこういっても思いつくめえ。いつぞやおめえをからめ取り、正雪一味に手渡した、旗本袴広太郎、こいつだこいつだ、このさむれえだア！ ふふん」と鼻でせせら笑つた。「変つたね、顔色がよ。こいつア変るが当然だ！ さアてそこでだ。ご両人、どの辺に住んでおいでかね。江戸界隈にいるとすりゃあ、どうでも小梅の里あたり、小ぢんまりとした寮構え、是非とも萩の柴折戸だ。庭木がこんもり繁つていて、容易に奥が見えすかれず、まわりはグルリと金目垣、狎が一匹といいてえが猫と鸚鵡が住んでらあ。……とおれは思うのだ。……オヤどうした？ え、島原！ もう帰るのか。まあよろう、茶でも飲みねえ。おれも乾いた」

ヌツと立ち上がった城之介、すごい笑いを浮かべたが、「能弁能弁、見事なものだ。が、時々すき切れがして、大事な奥がチラツイたぜ。だからあんまりしゃべらねえがいい。しかしおかげで……何さ馬鹿め！」フラリと部屋から出て行つたが、すぐにジャランと鉄杖の音、門口のところから聞こえてきた。「待てよ」というと早引の忠三、胸に腕を組んで考えてしまった。

「しまった！」とわめくと飛び上がった。「ヤイヤイ誰かやって来い」

「へい」といって現われたのは、権十という部下である。

忠三の空想

「親方何かご用ですかい？」はいつて来た権十きいたものである。

「うむ」というと早引の忠三、改めてじっくり考えた。「色ばけている島原城之介、なんのあねごの離れ家を、目つけ出すようなことがあるものか。それにしてもちよつといい過ぎたなア。……それはそれとして君尾という娘、目をつかったからには明かさなければならぬ。……オイ、権十」と呼びかけた。「お前これからすぐに出かけ、あねごのところへ行つて来てくれ。つまりなんだ、こういうのだ。至急も至急大至急、すぐに南蛮屋までおいでくださいとな」

「へい、よろしゅうございます」

「オイ待て待て、まだあるのだ。本来なれば忠三が、おうかがいするのでございますが、お仲のよいところをのぞくのも、まことに変な格好で、あねごとにとつてもご迷惑、忠三にとつてもご迷惑。そこでお呼び立て致しましたとな」

「へい、よろしゅうございます」

「オイ待て待て、まだあるのだ。そうよなア、何ていおう、寮お住居もようがしようが、南蛮屋だつてすてたものじゃアねえ、時々いらしてもようがしようとな」

「へい、よろしゅうございます」

「オイ待て待て、まだあるのだ。袴広太郎様はようがしようが、忠三だつてようがしようとな」

「へい、よろしゅうございます」

「オイ待て待て、まだあるのだ。一体全体何がなんでえ！ひとつこういつてどなつて来ねえ」

「へい、威勢よくどなるんですね」

「まあ少し待て、考えてみよう。……どなるだけ理由はなさそうだな。オイ権十、どう思う」

「かまうものですか、どなりなせえ」

「おだてるねえ」と睨みつけ、「どうだろう権十、おれのつら、このごろトンマに見えねえかな？」

「どう致しまして、聡明で」

「ふふん、駄目だよ、財布はしめたよ。どだい根性が太すぎらあ。おれをおだててしぼろうなんて。トンマだといえ！

トンマだといえ！」にわかにしんみりと考え込んでしまった。

「トンマな忠三も可哀そうだが、イスラエルのあねごも可哀そうだ。ああも袴様にほれてしまつちやアな。ほんとに変ればかわるものだ。昔のおもかげつてありやアしない。何が浮世で困るかといつて、ふやけた悪党ほど困るものはねえ。それにさ袴という人が、取ツつき場のねえ性質でな。あねごを可愛がつているかと思うと、お助け致す、君尾殿！などと寝言をいうそうだ。……さアて、ところでその君尾、いよいよ目つかつてしまつたんだが、この納まりはどうつくだろう？あねごをすてて袴様、君尾という娘を取るかしら？ うんにや、そんな事は義理にも出来ねえ。あねごは命の恩人じゃアねえか！ 捨ててみやがれおれが承知しねえ！ しかしどうでも捨てるとなると、あねごはいったいどうするだろう。仕方がないというところで、袴様をあきらめて、忠公一緒になろうじゃアねえか！ こう来ねえとも限らねえ。ウフ、忠公、役づいたぞ！」

「親方、行くんですかい、行かないんですかい？」

「うせやアがれ！」と威猛高、忠三どなったものである。

「まだいたのか！ 途方もねえ奴だ！」

「ひでえや！」とわめくと子分の権十、外へ一散に飛び出し

